「たる程、私は君の所説を承認することにします」
と、グローコーンはやつと私の説に贊成した。

一七　新しき國家の教育（三）

私は話頭を一變して一つの比喩を試みた。

――こゝに一つの洞窟がある。それはその一方が僅かに光線を受け入るゝだけである。かれ等は幼時からその中で成長した。とは言へ、洞窟の奥に向つて視ることを許された以外には、鐵鎖を以て總ての自由を束縛されてゐる彼等である。

背面に當つて火光がある。火光と人との中間に小高な道路があり、そして、胸壁の後ろから、種々の技術品を手にして幾多の形象が現出する。それらの、形象中には、談話し又は沈默した人間、獸類および木石等があり、後面の火光がそれらの蔭影を奥の壁間に投ずる。

洞窟内に生くる彼等は、各々その蔭影に命名し、洞口から反響する音聲をみな壁間の影自體が發するものだと信じてゐるだらう。

然るに、突然それ等に背面の實物を見すれば、屹度苦痛の表情をして眼を外らさずにはゐまい。なほ、更に輝く太陽の光の下に出せば、その視覺の眩惑すべきことは敢て言を俟つまい。兎に角、彼等は漸進的に光度を增して、幾階梯の後遂に太陽が萬物の本源だことの結論を得べく、從つて暗黑界を離れて光明の天地に出づることを欲求し、曾て洞窟中に於て欲し望んだ名譽光榮等の價値なさを感ずるに至るだらう。

――洞窟には感覺の世界を描し、火光は太陽を意味する。そこから上り行くことは知識の道であり、幾多困難の試驗をパスして遂に知識の世界に於て、善の觀念を把握し得る。即ちそれは正理と善美との本體であり、光明の父であり、感覺の世界に於ける光明の君子である。また、知性界に於ける悟性および眞理の源泉だとの決論を下し得らるゝ。

しかし、一旦光明に接した彼等が再び突然暗黑界に入る時は、暗黑中に在るものよりも視力の劣ることは當然な現象で、哲學者が俗人界に於て滑稽味のあることはこれに等しい。が、その眼は再び從來の如く暗黑中に於てもよくその能力を現はし得るに至るものである。

一旦、光明に接し眞理に觸れた者は、その他の人々を教育して、眞理の光明に接するやう努力しなければならない。哲學者は先覺者である。彼は後進者を誘導して國家を組織し、國民の總てを高

尙にし幸福にすべきである。だから、哲學者が政治に携はるには、この使命を果すこと以外にない。政權を恣にするのではなく、それは只管國民のために盡すといふことにある。政治上に野心を抱くことを輕視し蔑むことは、哲學的生活をなす者のみの特長とも言へやう。從つて、護國者に、たゞ國民すべての幸福の向上を旨とする者を得やうとならば、哲學者を措いては決して望まれ得べきでない。

然うした人物の養成――それは哲學が能くしやう。人々をして、暗黑界から光明界へと向はせ、諸現象中からヨリ絕對不變の本體を把握させるから――。

如何なる種類の知識が人心をヨリよく向上させるものであるか――さきに、身體を强壯にするための體育と、心情を調和し高尙にするための音樂とに就ていつた。が、勿論この兩者がヨリその目的を達し得るものではない。

先づ擧ぐべきものは、誰もが敎育の初步に於て學ぶ所の數學である。數學が實用上必要有益な學科だことは言を俟たないが、ヨリ以上に數學の有つ價値は、思考力とその精神を實在へ導くことにある。更に言へば、總ての數がよく人間を高尙にし、人心をして變化の世界から實在の瞑想に進ませることに於て大いに効果がある。軍事その他への應用は寧ろ些事に過ぎない。數は感覺のものであり、抽象のものである。また數學は知能を鋭敏にする一面を有つことは特筆に値する。

「次に敎科として取り入るべきものは幾何學ですね、戰術上の基礎で、將軍の戰略は幾何學の知識の如何によつて增大するものですから――」

と、グローコーンが身體を少し乘り出し氣味にして言つた。

「そんなことは、さつき言つたと同じ轍で、末葉の問題に屬しますよ。私の所謂幾何學なるものは、そのヨリ高尙な部分のもので、それが如何に善の考察を助長するか？如何に人心を實在へ向ふやう牽引するか？といふにあるのです。現在に於ける幾何學は下等な實用に使はれてゐますが、その本質ともいふべきものは、精神を高尙にし、哲學の觀念を養成するところにあるのですよ」

「なるほど。して、その次は天文學ですね。何と言つても、航海や、軍事や、農事などに極めて有益な學科ですから――」

「君は自己辯護のダシに天文學を擔ぎ出しましたね、ハ、ヽヽ。兎に角さうした敎育なるものゝ總てが實用の知識を與ふるものだとばかりは言へませんが、心眼を純潔にすることは肉眼を然うすることに優つてゐますよ。何故つて、眞理を觀ることは心眼によつて始めて許されることですもの――。それは然うと、私達は學科の順序を訂正しなければなりませんよ、即ち平面幾何學の次に立體

幾何學をもつて來、その次に立體運動――天文學をもつて來なければならないのです。」

「然うですね、なる程。何と言つても天文學は高尚なものですよ。何しろ天體を觀測することは人心を向上させるものですからね、この點に於ては恐らく誰だつて同感でせうよ」

「私一人を除けばね――。何故つて、現時の天文學なんか、精神の向上はおろか、却つてその低下をさせるものですからね」

グローコーンは頗る意外の面もちで、私にその理由の說明を求めた。私は次の意味に於て答へた。

――かの所謂天文學者なるものは、仰臥して天井を眺むるものと聊かも選ぶ所がない。私のいふ天文學の知識は心眼をもつて觀るべきものである。何故なら、かの壯大な諸天體は美であるとは言へ神聖なる宇宙の眞理には遙かにはるかに劣り、何等そこには絕對の調和及び絕對の運動について敎ふる所がない。

諸天體の燦然たる美は、ダイダロス若しくばその他の名家のものした製作宛らで、たしかに賞鑑に値する。しかし眞の意味に於ける二倍、同等、比例等の眞理をその中に發見し得べしとは思はれない。天體の研究をなすには、よろしく智性を活動さすべきである。

ピュタゴラス學派の言ふ如く、數學はなほその他にも應用される。即ちそれは眼に於ける天文學の如く、耳に於ける音樂である。しかし、現時の天文學に於けると同じく現時の音樂者にも誤りがある。それは、善美の觀念を標的とすべきことを忘却し、すこしも心意を使はずして單に耳のみを用ひ、徒らに樂器を弄して微々たる音に耳を傾け、それを聽き分け得ることにプライドを有つといつた、實に淺薄極まるものである。それが俗人輩に於けることは勿論であるが、驚くべきは自ら高きを誇るピュダゴラス學徒等もが天文學に於けると同樣の誤謬を敢てし、音諧を研究する以上に進んで、耳の到底得聞かない數の自然の調和を考究せずしてゐる。否、その觀念だに有たない。

――以上の學科は、本曲に對する序曲である。本曲たる辯論術と相關聯する所にその効益がある。が、單純な數學者を辯論者と同一視してはならない。

「それはたしかに然うですね。しかし、私は未だ曾て論辯をよくする數學者を知りませんよ。全く――」

と、グローコーンがいつた。

「それは君、知性界の音樂でなければならない所の論辯學は、感覺界から引き上げた私達を、純理性によつて善の觀念の冥想に到達させるものなのです。が、要するにこれまでは序論です。これか

ら本論に入りませうよ」

私はかういつて次の意味に於て論を進めた。

――辯論術の性質および辯論術の殿堂に入るの道程は？と言へば、それは前術の諸學科を履修した者のみに啓示さるべきものである。

眞實體の夢もしくば假定說に過ぎない數學の諸科目は、自家の諸原理を分析することを決してしないが、辯論術は、前述の諸學科の齎らす助力により、原理に溯り、また假定說を超越し、心眼を改善して、漸次に人々を理知の光明界へと導き行く。

吾々は前述の諸學科を學術といふ。だが、その明晰の程度は、憶說より遙かに進んでゐるとは云へ、眞の意味に於ける學科より劣るものだことは否めない。何故なら、さきに說いた知識の有つ四階級――知性、悟性、信仰、感覺――が、その比例に於て、實在の變化が知性に於ける憶說の如く、また學科の信仰の悟性の知覺に於けると同一關係にあるものである。そして辯論學は、萬物の本體實在を定解し、善を說明し、善のためへの凡らゆる犧牲を辭しない。そのライフの輝しさにひき換き換え、辯論學を知らぬ者のそれは睡生夢死に等しい。覺醒する以前に最早や墓中にあるものがその殆んど凡てである。

一八　新しき國家の教育（四）

わが理想國の治者に、若し果して知慮賢明な者を欲求するとすれば、われ等は國民に大いに辯論學を教育し、能く問ひ、能く答へ得ることを習熟させなければならない。即ちそれは首位に座すべきものだこと勿論である。

しかし、この學科は如何なるものに課すべきだらうか？

それは、高尙な美麗な容姿の有ち主で、堅忍不拔の精神を持ち、好學であり、强き記憶力をもち、勤勉の性質と知識および德性を併有し、强壯心身を持ち、幾多の精神的試練に對して完全の狀態にあるものでなければならない。かうした者こそ實にわが國家の救濟者である。そして、教育を受くる彼等は修學の時期にある青年であることを要する。

その教育の方法は？

その自然の傾向を見せて概念を與ふるために、幼少のときには遊戯の種類を以てし、また、戰爭の味ひを知らするために彼等小兒に乘馬さして戰場に出すべきである。體育の必要なことは敢て言

を俟たない。

殆んど無秩序に教へた諸學科は、彼等が二十才に達するに及んで綜合し、諸學科相互とその實在との自らなる關係を教へ、最も聰明であり、戰爭その他の義務を盡すことに於いて優秀の成績を持つ三十才に達した者は、更に拔擢して光榮ある位置に進め、果して彼が感覺の世界をはなれて理想の實在に達し得るか否かを試みるために辯論學の試驗を必要とする。

こゝに一つの注意事項がある。それは、青年の通有性として、議論を好み、議論のために議論し、學說その他のために終に懷疑に陷り、德義を無視——尠くも蔑視するに至る所の辯論學の伴隨し勝ちな弊害である。だから、哲學の途は、秩序を重んじ强固な信念を有つ者でなければならない。

三十才——三十五才の五ケ年間は、彼等をして專心に哲學を研究さすべき時間である。ついで彼等は再び社會の單なる一員として兵役その他の職業に從はせ、然うして得た體驗を以てその性格の强國か否を試みるべきである。——それは十五ケ年間とする。

五十才となり、その性行學術等に於て功績のあるものは、よく目的の峯に達したものといふべく、心眼を開ひて善の觀念を得、それを以てその生活の律條とし、更に、必要ある場合に於ては自

ら國政を掌り、また國家の後繼者をなすべきである。

若しその定命盡くる時は、平靜の裡に瞑目すべく、この場合、國家は彼を神として祀つるべきことと勿論である。

「なるほど成る程、あなたはまつたくわが護國者の最も完全な典型——聖像をつくつて與れましたね。感心しましたよ」

グローコーンが、如何にも感嘆の面もちをしてこふ言つた。

「さやう。そしてそれは女性の護國者の彫像でもあるのです。何故つて、わが國家は、その然るべき性質を具有する以上、女子も男子も等しく總ゆることに携はるべきものなんです。そして、この理想國は、空想に近い希望を葬り去るべきでは決してなく、ひと度び○○○○○○哲學者がついて、世俗の虛僞やその他の醜惡を排斥し、飽く迄正義への猪突をするとすれば、屹度實現され得べきものなんです。何？　その速成法なんですか？　從來社會の醜惡の感染した——まあ、十才以上のものを悉く田舍に移住させ總ゆる眞に於て未だ白紙宛らでなければならない小兒だけを集めて、この理想とする法律や習慣を教養すれば容易に能きることなんですよ。そして理想國の憲法の下にある人民の幸福と利益とを實にたいしたものでせうよ」

「なるほど、それは妙案々々、私は大いに同感ですよ」

一九　政體論及政體が生む異つた國民性（一）

私はグローコーンへの言葉を續けた。

「つまり、吾等は、完全な國家は○○○○○○○○○○○○○○○、共同勞作――共同生活をして、○○○○○○○○○○○○○○、兵士は、衣食の用を辨じ得るに止まる俸給を人民から受くる以外、勿論金品の私有はしないとの結論に達しましたが、こゝで再び本論に立戻らうと思ひますよ」

「さう然う、それは當然の道行きですよ。何しろ私が君の言つた四種の政體の如何なるものだかを質問した矢先に、ポンマルホス君とアデイマントス君とが言葉を挾んだのでツイ今のやうになつたのですから――」

「ではまづ政體の解釋に移りませうね、その一つはスバルタ即ちラケダイモーンやクレーテー等の政體で所謂チモクラチア――功名主義の政治であり、他の一つは諸種の罪惡に充滿してゐる寡頭政治、また他の一つは平民政治であり、さらにまた他の一つは、政體中に於ける最も劣惡な暴政なんです。それから、國家が血あり肉ある人間から成立してゐるものである以上、それに對應する人物を研究しなければならない譯になります。先づ第一の功名主義の政體がドウシして完全な王政――貴族政の中から生じたかと言へば、それは、治者中の分裂からです。そしてその分裂は？といへば、萬事萬物の基底である所の數理――一定の完全なそれに相違した國民の生殖を見るときは、そこに當然の道行として結婚上の不幸が生じ、從つて下等であり不良である生れの者が治者となり、自からなる歸結として、その國家には正義が行はれず又教育も衰へ音樂を體育が凌ぎ、金・銀・銅・鐵等の性質の人がその區別をなくしてそこに分裂が生ずるのです、そして、銅や鐵の人性を有つ者と、金や銀のそれを有つ者とが二つの黨派をつくり、極度に金品を尊重するものと、所謂眞正の富を有つ者とが相反抗することゝなります。しかし、その結果は妥協に終つて、私有財產制度が生じ、曾てはその朋友であり保育有だつた者を奴隸とするやうになります。とは言へ、彼等はなほ尙武の性格は失ひません。そしてひたすら規則を勵行し戰爭に努力します。これが即ち功名主義の政體で、つまり貴族政治と寡頭政治との中間性のものなんです」

私はこの功名主義の政體に對し、また他の政體に對して次のやうに說明した。

――治者に柔順であり、共同會食を行ひ、商業を蔑み、尚武の念に富む點に於て、この功名主義の政治は理想政治に酷似してゐる。しかし、その何處かに伏在するバクテリアは漸次に哲學に侵入で、遂にその特有とした質朴性は纔に武士の階級にのみ殘り、治者中に利得を欲するものが生じ、ひそかに金銀を蓄積して妻女等の歡心をかひ、また彼等自身に於ても漸次金銀の快樂を覺ゆるに至り、ミューズの司るべき教育が強力に司配さるゝ所となる。

そして、この政體に對比すべき人物は、競爭心に富み、榮譽および權勢を好み、また體育を重んじ、狩獵を好み、青年期には富を蔑視するとは言へ晩年には貪婪の性となる。

――こうした人物の生ずる素因は、靜穩の生活を好む父が權勢の地位を棄てゝ政界を去つたゝめ、母が、他の婦女子間に於て勢力を揮ひ得られない憤うらしさから、その子に父の如く無氣力であつてはならないことを說き、その家僕もまた等しく彼を激勵する。そこに生ずる彼の發憤――父への反抗が野心性となりまた名聲を好愛することゝなる。

寡頭政治――富者のみが治者となる。そして、金銀の所有によつてこの政體の墮落が胚胎する。そこに發明された不正の消費法の傳播によつて、富が德義より重視され、金錢の好愛者が名譽のそれに代り、遂に政治上の奇畜漢が生じ、政治上の特權は富者のみに限らるべく法律の制定を見るに至るものである。

そして、この政治の弊害は、航海する場合に於て、運轉手を採用するにたゞ財產の多くを有つ者を以てするといふ危險のみには止まらない。即ち貧富の懸隔が生じ、從つてその無數の無產者中に諸種の犯罪者が現はれ、社會國家の害毒となるものである。

なほ、この種の人物の生ずる所以は、父の規律に從つて生活しつゝあつた彼が、父の失脚を見て心中ひそかに警戒心を生じ、遂に政界を離れ、虛名を棄て、貪婪飽くことをしらずして金錢を蓄積し、當然の結果として、理性および氣慨を失つた彼はひたすら富財を頌讃するに至るものである。即ち忠實な金錢の奴隸となり終る。素より彼には教育がない。だから、その心中に發育し跋扈するものは、奴隸的乃至乞食的若しくば惡漢的欲求に外ならない。若し彼が德義を行ふ場合があるとしても、それは外觀のみに止まり、決して誠實の發露ではない。

平民政治および平民主義の人物は寡頭主義のそれらから分派する。寡頭政治の最大欲求が、飽くを知らない貪慾にあるため、富有の青年に浪費を習慣づくべく治者等は奬勵する。そしてその青年等の零落によつて自己を利さうとする。多くの人は財產を失ひ公民權を喪失するに至る。そのためかれらは反抗心に燃え遂に革命を企つるに至らずにはゐない。また他の一面に於て高利貸等が債權

を楯に多數の人々を無一物とまでするが、治者等は財産の所有およびその使用に關しく何等の制限も設けてゐない。

しかし、强壯な身體を有つ無産者等は虛弱なそれをもつ治者および富者に對して輕侮の念を生じ、遂に、寡頭主義の彼等に對抗するため平民黨を形成し、兩黨抗爭の結果、平民黨が勝利を博して一切の政權を平等に分配するに及んで平民政治が生ずるものである。

各人が自己の眼に映ずる善を絶對善と信じ各人自儘の生活樣式を採り、萬事が放逸であり自由であることが、平民主義の國家が有つ特異な點である。當然の道行としてその國民の凡てが各々放縱不羈の生活をなすため、遂には高尙な教育原理を土足を以て蹂躙し去る。そして、彼等は、政治家を教育し訓練すべくすこしの注意も拂はない。

平民主義の人々は、吝嗇な寡頭主義の子である。奢侈の友と交ばることによつて外部よりの誘惑を受け、而も內部には情欲が起り、遂にそのために精神の至高部分は占領され、虛僞と錯誤と奢侈とが權力を掌握することゝなり、欲望はこゝに至つて節制および禮儀を國境外に放逐し去り、無禮は禮儀といひ、無秩序は自由といひ、また破廉耻は勇氣だといふ。若し彼が年令の長ずることによつて聊か善良性を取り戻すことが有るとするも、それは善良性の中に彼を生かすものではない。彼の爲すことの凡てが一時的であり、すこしの永續するものでないことは敢ていふまでもない。

次に、凡ゆる國家および人間中に於ける最も善美なものが平民主義から生じた暴政および暴君である。即ち、平民主義が、自由が人生に於ける最大自然の善だといふ一點張りを以て顧みないことによつて暴君主義に變ずるものなのである。

國民は一旦この主義に向つた以上、ます〳〵自由の强酒を要求する。そして若し爲政者がその要求を滿たさぬ場合に於ては、人民には治者を責罰し凌辱する。それほど治者と治者との自由平等は彼等の原則とする所なのである。そして、この暴政——無政府主義の當然の結果として、人は素より動物までも同一平面に立つ複雜化によつて國民精神は過敏となり、成文不成文の法律に堪え得ずなり、一人として主人を有たざるべくする。

凡ゆるものに矛盾法のあることは言を俟たないが、自由の過度は奴隷とするものである。似而非政治家乃至煽動者は自由の奴隷を以て巧妙に人心をそゝのかし、浪費その他によつて必然的にそこに生ずる利益の大部分を取つて、他の人民にはそのホンの少しを與へる。そこには取る者と取らるる者との對峙があり防禦がある。そして自から詐僞陰謀等が生じ、平民等は自己の守護者として或る首領を戴き、それを推し樹てゝその根から暴君を發生させる。

暴君は、暴政をなす當初に於ては溫顏に微笑を湛えて人々に接する。そして一時は善政（？）を行ふとはいへ、間もなく重稅を課して貧民を壓倒し、彼等をして專心その業務に携はるべく餘儀なくさせ、また人民中の勇敢な者は敵中に斃れしむべくする。すなはち敵國と事を構えて――。

そこには、期せずして不人望の火の手があがる。はじめに於ける彼の味方すら、氣骨ある者は彼に反對する。彼は國民中の賢明高尙な人々を排除して自己の安全を圖る。そして不人望の聲の高まれば高まるだけ、それだけ信賴するに足る護衞兵を要する。彼は高給を以てそれを採用する。それは易々たるものである、かれらは群烏さながらに彼の下に集まるから――。また彼は國民中の奴隸所有者から奴隸を掠奪して護衞兵とする。

然るに、詩人等はさうした暴惡な治者を頌美する。この一事を以て見ても詩人等の下劣さが容易に覗はれる。よろしく彼等は國外に放逐すべきである。

だが、詩人等はなほ處所の都市に到り、甘言を弄して一揆を起し、やうやくにして彼等から尊敬と報酬とを得る。とは言へ、われ等の謂ふ所の政體へ上り行くにつれて彼等の名聲は衰れ次第に減少する。

話しがツイ枝葉に亙つたが、暴君はドワしてその多數の護衞兵を扶持するかといへば、神社の寶物を沒收しまたは人民の所有物を掠奪して――。

人民が憤慨のあまり遂に激怒して彼を放逐すべくするとしても、既にその力は餘りにも微々なるものとなつてゐる。彼等はさうすることによつて彼の殘忍を募らす以外に何等得る所がない。

こうして人民は奴隸となることを嫌忌し、而もその結果は却つて奴隸となつてゐる。

――こういつた風に、自由が若し凡ゆる道理と秩序とを脫すれば、それは却つて奴隸としての最も惡い狀態に變ずるものだと言はなければならない。

一一〇　政體論及政體が生む異つた國民性（二）

――私の說明はなほ次のやうな筋に於て續く。

つぎに暴君性の人物についての研究をしたい。しかし、その前において、欲望の性質ならびに數を知る必要がある。何故なら、前問を解說する助けとなるものだから――。

情欲中のあるものが、無法であり無規則であることは勿論であるが、道理と法則との力によつて、ある程度まで矯正し、軟弱ならしむることを得るものである。しかし、人によつては情欲が多種で

ありまた強盛であるものがある。そして、その情欲がドンなものだかと言へば、理性の眠つてゐる場合に喫をさましてゐるそれである。しかし、單に想像するに止まるときは罪惡となるものではない。

また、健康な人の睡眠するに方り、道理を以て養ひ、且つ適度に情欲を滿足せしめたる場合に於ては、床中に於ける想像もさまで不規則でもなく法外でもあるまい。勿論こうした獸性は善人にもあり、そして往々彼の睡眠中に目をさますことがある。

さて、これから本論に歸らう。

――平民主義の者が、吝嗇なその父から卑吝の生活を誨ゐられたとする。しかし彼は既に奢侈の交友をもつてゐ、勿論父の主義を好まない。遂に奢侈と吝嗇との折衷主義を創造して絶えず放縱な生活を續ける。

いま彼が父となつたとしてみる。その子は彼の主義によつて教育され、而も彼の性質を遺傳した子は、漸次その欲望を增大し、戀愛その他の高尙さを欠く凡ゆる欲望が心中に跋扈して遂には眞正の思想も適度の感情もその影を失つて終ふ。實に、戀愛、飲酒、狂氣は暴君性の變態に他ならないものである。そして、暴君性の人物は、天性か、習慣か、またはこの兩者のためか、兎に角、大酒家となり、情欲家となり、感情家となることによつて生ずるものである。

つぎに彼の生活狀態を述べやう。いまこゝに彼の進路の第二歩を考察してみることゝする。

そこには、宴會があり、酒興があり、歡樂があり、娼婦があり、更にこうしたものゝ多くがある。この場合、戀愛が彼の心中の玉座に位して一切のことを命令するだらう。そして、これらの欲望を充たすべく金錢を消費し、借金し、遂には凡ゆる奸計を弄して金錢を詐取し、なほ幾多の罪惡を敢てして憚らないまでになるだらう。

そして、快樂は相續いて彼の欲望をそしり、遂に彼はその○○の所有を、或は奪取し、或は詐僞または恐喝により、或はまた○○を奴隸として賣るだらう。なほ進んでは、竊盜强盜をまでするに至るだらう。こうして、曾ては睡眠中に夢想したことが最早實現さるゝことになり、亂暴さは愈々その度を强むるに至るであらう。

――こうした徒輩は、善慈の國家に於ては極めて尠ない。かれらは、戰時に於ては暴君の傭兵となり、平時に於ては盜賊となり詐僞者となり、辯を良くする者は僞證者となり誣告者となるだらう。

彼等がその數の增加によつておのれ等の勢力を自覺するに至れば、その害毒の類しいことは勿論

である。即ち彼等は最も暴君性に富む者を以て黨首とし、それによつて國民を脅威する。

その初期に於て、彼等は力めて阿諛し迎合する。しかし、一旦ある目的を達した以上は、その人を顧みやうともしない。彼等は、如何なる場合に於ても、主人若しくは奴隷であり、決して朋友を有たない。そして、彼等は惡德であり不正であることに忠實である。最も不幸さの彼等だと言はなければならない。

そして、暴君的人物と、王政の正反對である暴政とは相對應する。王政が善良なものであり、暴君が劣惡のものだことは敢て言俟をたないが、兩者の孰れが果して幸福であり得るだらうか？

國と人とは同質であらねばならない。そして、暴政の下にある國民は、最も憐れむべき奴隷である。また、暴君的人物の精神は、隨劣であり野卑である。從つて、精神の或る部分の善良さも奴隷の狀態にあるといふべく、勿論それは自由公民の精神であり得ない。なほ、暴君政治の下にある國家は、全然自由の行爲を爲し得ない。そしてそれは貧窮たるを免かれない。また、この種の個人に於ても同樣である。不幸と、悲哀と、煩悶と、苦痛との點に於て、これらに優るものは決してない。

暴君は宛ら奴隷所有者である。彼はかれらの反亂を懼るゝの餘り、常にその歡心を買ふべく勉め、種々かれらに有利の約束を敢てすることによつて漸くに懷柔してゐる。その心中まことに憫然たるものがある。彼は自ら自己を拘束し、常に不安の憂慮に驅られ、所謂戰鬪の一生を終るべく餘儀なくされてゐる。彼は實に不幸でなければならない。要するに、如上の意味に於て、暴君はその實質に於て奴隷に他ならないといひ得る。そして眞の貧窮人であると——。

こゝに斷案を下さう。——最も善良であり、正義である者は、最も幸福でありまた最も王者に適應しそして自己に王たるものである。と同時に、最も劣惡であり不正義であるものは、最も不幸でありまた自己および國家の大暴虐者だと——。

更に精神の三成分——道理・野心・欲望——に對應する三種の快樂によつて論證することゝしやう。

道理は、金錢および虛榮などを度外觀して只管眞理へと到達すべく欲求し、野心は黨派心および虛名などを包含し、欲望は、食欲および感覺欲等を內容づくるものである。そして、勿論これらの快樂に對しては人によつて異にしてゐる。

右の三種の快樂中に於て、最も高尙なものを決定すべく、それは經驗と知識とに如く標準はない。そして、右の孰れに屬する人物が最も多くの眞正な知識と經驗の廣さとを有つかを考察しやう。

哲學者は、既に青年時代から、他人の經驗する種々の欲望乃至種々の名譽などの快樂を知り、しかも高尚な知識の快樂を有つてゐる。しかし、他の種類に屬する者は、その學識の點に於てまた經驗の點に於て到底哲學者の敵であり得ない。從つて哲學者の快樂を批判し得べくもない。その批判をなし得るものは勿論哲學者のみである。そして三者の比較の結果は明かに知識の快樂を以て至高のものとする。何故なら、高尚の快樂は高等の官能によつて是認されるものだから――。

――正義論は再び不正義を擊突した。

二一　政體論及政體が生む異つた國民性（三）

世の所謂快樂なるものは、殆んど凡てこの場合に於て相對的のものとされてゐるが、眞の快樂は絶對的のものでなければなるまい。そして智者の快樂は眞正であり純潔なものである。また、精神は身體よりもヨリ多くの眞實在を有つものである以上、精神の快樂は身體のそれよりヨリ眞實だと言はなければならない。そして、精神の快樂が知的であり眞理であることは勿論である。從つて眞の滿足を附與するものは、ヨリ自然の快樂だといふべきである。

素より、身體上の快樂のみを以て快樂とするものは、眞のそれを知るものだとは言へまい。それは單に快樂の陰影に過ぎない。そこには苦痛の混合があり、對象による彩られがある。そしてその感覺を過敏にし、ヨリ痛切に欲求するに至るものである。眞正の快樂を知らない彼等は遂にステージホロスが希臘人を指していつた、所謂トロヤに於ける眞のヘレンを知らずして、その陰影のために戰つたものと同じものである。

つぎに、野心について述べやう。それが若し貪欲なものだとすれば勿論下等な滿足であるとは言へ、若しそれが道理に從ふものだとすれば自然の快樂が惠まれやう。何故なら、精神の各部が各々その分を守るから――。

しかし、若し自然の快樂を得ない場合は、精神の各部分は單に快樂の陰影を追ふに過ぎないだらう。心意が哲學乃至道理を距ることに正比例して法則秩序が遠のいて行く。その隔りは其處にその快樂をして錯雜させるに至るものである。

そして、戀愛および暴君主義の欲望は、最も法則との遠距離にあ、王者のそれは前者と正反對の位置にある。それを的確に表明する唯一のものである數字によつて證明しやう。

――暴君は寡頭家より、三次の距離にある。すなはち、その快樂は影の影なのである。そして、寡

頭家は王者より三次の距離にある。そこに表はさるゝ3×3は平面數であり。更にそれを立方にして數の完全さを期すれば七二九の數が得られる。即ち王者は暴君よりも七百二十九倍大の快樂の生活をなすのだといふべきで、それはまた一ケ年間の晝夜の數に等しい。人生の或る關係を有つものだと謂ふべきである。

われらは正義と不正義との性質を知り得た。いま、こゝに靈魂の肖像を形成しやう。

――先づ種々の形狀を有つ怪物をつくる。その或るものは强暴な野獸であり。あるものはよく馴らされてゐるなどいつた凡ゆる性質の首――隨意に發生させまた變形させ得る――を連ね、つぎに獅子の形を、また次に人間の形をつくり、獅子の形は首よりも小さく、また人の形は獅子よりも小さくしてこの三者を一纒めにし、それを蔽ふに人間の皮膚を以てし、その內部は決して外部から見ることを得なくする。

不正義論者は野獸を愛育して人間を饑餓に迫らしつゝある。

正義論者は、人間を强くして溫和な性情を養ひ、獅子の心をよく自己の黨與とすると同時に多數の怪物を統制して全體の統一を圖つてゐる。――

それが快樂に關するものだにしろ、名譽や利益に關するものにしてもが、正義は善であり、不正義の意だのである。

私は言葉を改めて、

「要するに、高尙なる原理は獸性をして人間中の神に服從させることであり、下等なそれは人間と獸性に隷從させるものだと言はねばなりますまい。果して然うだとすれば、自分の有つ最も高尙な部分を最下等のそれの奴隷とするといふ條件の下に金錢を得たとすれば、その人は果して利得したと言へませうか？　エリフユレーは夫の生命の代償として頸飾を得たとは言へ、それは一層不良の破滅を得べく賄賂をとつたものだと言はねばなりますまい。人が若しその子を賣つたとすれば、彼は利得者では決してないのです。精神を賣るものはなほ更さうだといふべきでせう」

「然うです。遙かに惡ですとも――」

とグローコーンは答へた。私は更に說明を續けた。

――種々の怪物の跋扈が凡ゆる不節制の素因をなすものである。獅子又は蛇の分子のそれが傲慢であり、精神の過度の弛緩が奢侈となり柔弱となり、なほ精神が貪吝に屈服することによつて阿諛追從卑劣等が生ずる。從つて、靑年を敎育するに當つては、先づ彼等に充分の自制力を與へ、高尙な主義に則つてなすべきである。

人が若しその惡評によつて金錢または權勢を得たとしても、それは恐らく何等の利益もあるまい。また若し發覺を免かれて刑罰を受けないとしても、惡事の隱蔽が却つてその改悛を妨害するものである以上、それは何等の利益ともなり得ない。人が若し罰せらるゝ時はその內部に伏在する獸性が鎭壓さるゝことによつて節制が生じ、當然の道行きとして正義および知識の統一を得るに至るものである。そしてそれは身體上の天賦よりも優越なものだから、智者は知識を以つて至高のものとし、身體を以て第二義のものとする。それは身體と精神との最も完全な調和を得べく――。

そして彼は適當以上の金錢の蓄積はすまいけれども、人間を善良にする所の名譽は喜んで承認するだらう。しかし、公私共に苟くも自己の生活を亂すことを避くることは忘れまい。

果して然うだとすれば彼は政治家となることを辭しはしなかといふに決して然うではない。自己自身たる國家の政治家たることは決して辭すまい。すなはち吾等の創造すべき謂ふ所の理想國の支配者に――。

そして模範的國家は天上にある。彼はこの國家に倣つて生活すべく、その國家の實在すると否とは敢て問ふの要はない。何故なら、それは他に何等の交渉を有たないから――。

二二　永遠に生きざる可らず――靈魂は不滅

「私等が制定した國法中で最もわが意を得たものは詩歌に關するもので、模倣性のものであるそれを排斥することに於てです。何故つて、詩歌の模倣はそれを聽くもの、精神に有害なものだからですよ。さて、私はこゝに模倣性の性質を述べなければなりません。それは論の進行上必要なものだからです――」

私はこう前提として說明を續けた。それは次のやうなものである。

――こゝに一つのペットがあるとする。それは勿論製作者の心中にある觀念によつて作られたものである。

またこゝに天地の萬物を創造するものがあるとする。彼は實に驚くべきものである。しかしながら、或る意味に於ては誰もが創造者であり得る。何故なら、たゞ鏡面に映じ出すことによつて總ゆるものを作り得るから――。

勿論それは外形のみに止まる。畫家のなす所が恰度それである。即ち畫家は外觀の創造者なので

ある。そして畫家の爲す所は工匠のそれよりも眞實であり得ない。その作品が眞理の不明晰な表現であることは敢て怪しむに足りない。

例へば、こゝに三種のベットがあるとする。その一つは自然に存在するもので恐らく神の創造だらう。そして他の一つは工匠の作であり、更に他の一つは畫家の作である。

神は絶對のものとして、唯一の自然のベットを作つた。そして、それより低下した意味に於て工匠もまた製作者だといひ得る。しかし、畫家は寧ろ兩者の模倣者である。かれは眞實を去ること第三次のものを取扱ふものだと言はねばならない。また悲劇作者も眞理を隔ること畫家と同じ位置にある。

畫家が一切のものを寫し出すことは勿論であるが、たゞその一側面——事物の斷片の描寫に過ぎない。若し彼が如何なる技術家のものをでも描寫すると言ふとしても、その實は何等その技術に對して知る所がなく、要するに小供や愚人等を欺くに過ぎない。若し、凡ゆることを知る人を知るといふ人があるとすれば、彼は知識の眞に性質を知らずして一種の魔術師を以て全知の智者とする愚人だと言はなければならない。

と同樣に、ホメーロスおよびその他の悲劇作家を以て、凡ゆる技術と德義とを知をものだとする人があるとすれば、彼は謬見者だことも免れない。すなはち、かれ等は單なる模倣者であり從つてそのものするものは模倣に過ぎないことを知らないから——。しかし創作と模倣とを併せ得るものは或る何ものかを永遠に遺し、他を讃美すると同時に自己にも讃美を受くるであらう。

私はホメーロスに對して質問したい。

君が若し第二次の模倣者だとすれば、君はドンな善を人類に對して爲したか？何れの國家が果して君から法律を得たと公言し得るだらうか？或ひは君の軍略による戰爭が果して人類を益し得たか？或ひはまたタレースおよびアナハルシスなどの發見を以て人類に福利を與へたか？更にまた或ひは所謂ホメーロス流の修身法があつて現代および後代人の模範とするに足るものがあるか？と——。

しかし、それは決して求め得られない。傳へ聞く所によれば、彼は義父クレオフイロスをはじめ友人等は、饑餓に迫つた彼を敢て顧みなかつたといふ。若し彼が眞にヘラス人の教育者であり得るとすれば、乞食して徘徊すべき筈なく、また世に何等かの善を爲すものとすれば、世人は彼を引止め若しくは隨從してその教へを受くべきでなければならないに——。

如上の點より考察すれば、彼及びその他の詩人等は外觀の模倣者に過ぎない。それは、靴直しの

技術をもたぬ畫家が色と形との知識によつて能く靴直しを畫くこと宛らに、詩人等もまた言語の色を以て凡ゆる技術を描出し、大將にも靴直しにも等しく調和と韻律とを附與し得るものである。しかし、模倣は、韻律等の裝飾を徹することによつての生命は殆んどゼロとなるものだことを知らなければならない。

いま、轡と手綱とについて考へてみよう。畫家はそれを描き工匠はそれをつくる。しかし兩者ともその眞實の使用法を知らない。それを知るものはたゞ馬術師のみである。音にこれのみに限らない、もろ〳〵の事物がまた然りである。

そこには三種の術が生ずる。その一つは使用術であり、他の一つは製作術であり、また他の一つは模倣術である。そして使用者は法律と知識とを製作者および模倣者に教示する。製作者はその教示を學び信じて製作するが、模倣者はそれを學ぶことも信ずることもしない。

從つて模倣には知識がない。それは一種の遊戯に過ぎない。悲劇詩人及び叙事詩人は模倣者の最も甚だしいものである。

次に、模倣が、人間の管能の何れに對應するものだかを研究しやう。

——例へば、物を視る場合に、それが水中にあり又は水面外にあり、或ひは遠くにあり又は近くにあるときは、必ずその形狀を異にするものである。この變異のある現象を利用してその術を施すのが畫家及び手品師である。しかし、同時に同一物に關して二個の矛盾する意見は同時に眞であり得ないため、數學がわれらの混亂した心意を外觀力から救濟する。そして正當と否とを決定するものは數學で、それは精神の高等な管能の爲す所である。從つて模倣は下等な管能の爲す所だこと勿論である。なほ、耳目に關し、詩歌繪畫等に關しても然うである。

一體、模倣とは、有意識若しくは無意識の行動が、善若しくば惡の結果を豫想し、または現に快樂若しくば苦痛ある所のものを模擬するものである。が、人は、衝突する勢力の下に於て果して能く自己を統一し得るだらうか？　人が悲哀の事情の下に在る場合、感情は飽くまで悲しむことを欲求し、理性はそれを制御して忍耐を勸告する。何故なら、苦痛の善惡を辯知することは難く、要するに世間の事はさまで大事でないから——。すなはち、われらの精神の高潔な部分は忠實に道理に從ふが、その下等な部分は悲哀煩悶する。

しかしながら、不幸にも後者は特に多くの材料を模倣技術のために供給する。それに反して、常に冷靜である道理は容易に表面に現はれないため、道理に對する經驗のない群衆等の解し得ない所である。

眞理の下等な程度のものを描く點に於て、また、人心の下等な部分を取扱ふ點に於て詩人は靈家に似てゐる。われらは、詩人が、感情を恣にして理性を弱くする點に於て彼に人心上の權威を有つことを許さない。何故なら、彼は眞理を距ることが甚だ遠く、單に模寫物の製造者に過ぎないから——。

なほ、一層嚴重に詩歌を排斥すべき理由がある。それは詩歌が人の感情を激成する有害な力を有つものだからである。若しある詩中に於て一英雄が洩らす悲哀嘆息の情に接するときは、われらは彼に同情し、われらの感情を擾亂せしむる詩人の技巧を稱讃するが、若しわれら自身が彼の境遇にあるとすれば、われらはそれを柔弱なものとして排斥する。この矛盾した感情は、自己の場合に於ては制御すべき感情に一歩を讓るものと言はなければならない。しかし、他人の悲哀に對して泣くときは、當然の結果として、自己のそれに對しても然うあるべきである。

滑稽の場合に於てもさうである。多くの人が、自ら言行することを恥づる滑稽および劇場などに於て演ずる野卑の笑謔を喜ぶことを屢々繰返すときは、遂に自身がそれに同化されるであらう。

われらは、詩歌が、感情と欲望とを挑發する點に於て、神々の讃美と大人物の稱讃以外の詩歌を排斥するものである。何故なら、國家の支配は感情を以てせずして道理を以てすべきものだから——。

われらは如上の理由の下に詩人の放逐を叫ぶものである。しかし、若し彼等が歸參を願ふとすれば或る條件の下に許さう。

條件とは？　かれらに韻文または散文を以て自己の辯護をさせることである。

われらは詩歌が愉快なものだことを告白する。しかし、愉快なもの必ずしも有益ではあり得ない。そして、詩歌が眞理でないことを知る以上、さうした有害なしかも兒戯に類するものを避けて自己心内の國家の安全を圖るべきである。詩歌の愛に惑溺して正義乃至德義を忘れてはならない。そして德義の報酬は實に廣大なものである。それは單に現世のみに止まらないで、實に未來永劫に亘つて行はれる。すなはち、人の靈魂は不滅であるから——。そしてその論證は容易のことに屬する。

——凡ゆるものが、みな善と惡との二分子をもつてゐる。靈魂もまた同じである。そしてその善は自己の惡によつてほろぼされない限り、決して他のそれによつて滅ぼされるものでない。また、他の凡ゆるものに於けると同樣に、靈魂の腐敗原理がある。不正義、不節制、怯懦などが即ちそれである。

しかしながら、これは、疾病が身體を滅ぼすと同樣の意味に於て靈魂を滅ぼすことはない。若し

靈魂が不正義に充滿してゐるとしても、そのために靈魂の死滅を來すことはない。斯く、靈魂固有の害物である罪惡の靈魂を滅ぼし得ない以上、それは何れの害物も決して爲し能はぬことでなければならない。すなはち靈魂は永久不死なものだことの說がこゝに確立する。若し靈魂の眞相を觀やうとの欲求をもつものは、先づ理想の心眼を開き、清淨なこと明鏡宛ながらにして見なければならない。然うすることによつて靈魂はより美しく、正義不正義の顯著さが知られやう。

そして正義が靈魂自體に於ける最上ものだことは勿論であるが、凡ゆる善は、實に正義の人にのみ報ひ來たるものだことを知らなければならない。それは素より生前と死後とを問はない——。愚人がはじめ甚だ成功する觀を呈することがあるとしても、遂に彼は見事失敗に歸すだらう。

しかし、現在の善人の幸福は死後のそれに比すれば餘りに貧弱である。エルの物語が最もよくそれを裏書する。

エルが戰死して十二日目、不思議にも腐敗を免れたその屍體がまさに火葬に附せられやうとする時彼は蘇生したその未來の世界に於ける物語は次のやう。

——善と惡との靈魂が、神の審判によつて上天道と地下道とに分たれて千年間の旅行を終り、今や新生を受くべく草場に會合してその經驗を語り合つてゐた。と、暴君アルゲヤイオスが地獄に投げ込まれる戰慄すべき場面を見せつけられた。なほ進むと、虹さながらの光線が瞰下し得られる場所となつた。その光線の中には光りの柱があり、それから必然といふつむがかゝり、それを中心として凡ゆる天體が回轉してゐ、そして天體の至る處に相當の間隔をおいて、妙音天女と必然の娘である。運命の三人がみな白衣を着け頭には寶冠を戴ゐてゐる。運命の名はラヘシス、クロートイ、アトロポスといひ、共に美聲を以て妙音天女の音樂に合唱——ラヘシスは過去を、クロートーは現在を、アトロポスは未來を——し、まだ彼女等は天體を回轉させてゐた。

死者の靈魂がヘラシスの許に利着すると、通辯者が、人間の靈魂の新生を得べきことをつげ、且つその抽籤選擇を宣言して籤を地上に投じて新生の見本を示した。この場合、哲學を修めた者以外は選擇にしば〳〵誤謬があるそしてその光景は悲しむべく笑ふべく、また驚くべく種々である。が、大低は過去の經驗によつてその苦痛を避くべく新生を選ぶ。

各人の運命である新生が定まると、なほ旅行を續ける、そして忘却の平野を過ぎ無念の河に至り、その河の水を飲んで寢につくと、夜中に、暴風、雷電、地震などがあつて彼等靈魂は、流星宛らに各方面に發射して各方面に新生を得る。

死んだエルの靈魂がその身體に歸來したことには何等知る所がなく、たゞ單にその朝目覺めて見

れば身は火葬さるべく薪の上に横はつてゐることを知つたに過ぎないといふ。

——斯くこの物語りは救はれて滅ぶることがない。われ等もまた靈魂の不死を信じて忠實に正義と智識との道を守れば即ちこれが吾等の救ひとなる。われらは互に相愛し相愛され、また神に愛されて生活すべく、現世に終いても亦來世に於ても報賞と幸福とを得べきである。

眞樂主義經典（八）

禍福二つあるにあらず、元來一つなり、近く譬ふれば庖丁を以て茄子を切り、大根を切る時は、福なり、若し指を切る時は禍なり、只柄を以て物を切ると、誤て指を切るとの違のみ、夫柄のみありて刃無ければ、庖丁にあらず、刃あり柄無ければ、又用をなさず、柄あり刃ありて庖丁なり、柄あり刃あるは庖丁の常なり、然して指を切る時は禍とし、菜を切る時は福とす、されば禍福と云も、私物にあらずや、水もまた然り、畔を立て引ば田地を肥して福なり、畔なくして引ときは、肥土流れて田地やせ、其禍たるや云べからず、只畔有と畔なきとの違のみ、元同一水にして、畔あれば福となり畔なければ禍となる、富は人の欲する處なり、然りといへども、己が爲にするときは禍是に隨ひ世の爲にする時は福是に隨ふ、財寶も亦然り、積で散ずれば福となり積で散ぜざれば禍となる是人々知らずんばあるべからざる道理なり。（二宮尊德）

第七編　トマス、ヒューズの理想國家

一　産業制度

到る所に猛獸毒蛇の類が棲み、それに劣らぬ程の野蠻な土人の住む天地、炎熱の宛ら灼くやうなアフリカ……とは、植民地たる或る特別の部分々々を除いたアノ大陸に對して世の多くの人のもつ觀念である。

しかるに、その野蠻極まる天地と目された所に最も文明な社會が生れてゐることは甚だしい驚異の一つでなければならない。

彼はその社會を觀察すべく行つた。

何といふ驚異だらう。彼はその土地を踏んで豫想以上の善美を社會がなされてゐるのに甚だしく驚いた。

彼は傍らの紳士に刺を通じて來意を告げると直ぐ頓狂な聲で「ドウしてコウした立派な社會が出來たのですか？驚いてしまひましたよ實際……。私は實はこんなにまで良いものではないだらうと思つて來たのですが……」といふ。

するとその紳士はニコヤカな笑を滿面に堪えながら「どうしてつて、かうなるべき新しい進んだ都市……イヤ國家の經營法が發明されたからですよ、來る人毎に驚かれるのですが、御覽なさい向ふを走つてゐる馬車や自動車などの速力の迅さを。恰で鐵道のトラックの上をでも走るかのやうではありませんか。何しろ公道は總てコンクリートで造られてゐるのですからね。それに遙か向ふに見ゆる美しい家は百姓なんですが、その作業小屋だつて立派なものですよ。そして凡ての農事が自働機械を以てされてゐるし、その灌漑組織としては大きな溝や廣い池を備へてゐますからね、それにまた熱や動力などは遙か離れた地方の炭山や礦山から以て來られるし、電氣には瀑布の水力が用ひられてゐるので煤煙などの厄は蒙らない廣くそして大きい都市となつてゐるのです。マア手近い話がそこらの家々を御覽なさい。美盡し善盡された玄關や庭園の珍奇な草木のために、それこそ文化的な藝術的な近代的な家屋ばかりで、市中が恰で大公園のやうな觀を呈して、ゐるではありませんか。それからあそこに見えるのが模範學校であちらのが模範教育と言つたやうな次第で、なかなか完成された所ですからね。そして、家庭内の用をなすものにも總て電氣を仕掛けてありますからね。そんな風ですから、この國に生活する者は總てが幸福な日を送つてゐるのです。何といつても少しも生活の窮乏を感ずるやうなことがありませんし、國民は一切男子も女子も政治に將又經濟上の平等……つまりイクオーランドとなつてゐるのですもの――」と言つて紳士は彼に親しげな視線を投げた。

彼はさも感じ入つたといふ面もちして「然うですかね。ます〳〵驚異と感嘆との聲を大きくせずにはゐられませんよ。時に、甚だ失禮ですが、是非何卒その新組織の概念だけでも御説明願ひたいものですが……」と言ふ。

すると紳士は輕く頷いて「然うですか、それは御安い御用です。ぢや何卒私の家にお出下さい、直ぐそこですから……まあその上で緩りお話し致しませうから――」と言つて彼を促した。

さつきの話し振りから推して、なか〳〵な能辯家……イヤたしかに雄辯家らしい紳士の然も恰で舊友にでも接するやうにまで打とけたその言葉と云ひその態度といひ、彼はそれに感激せずにはゐ

られなかつた。

彼はその厚意に従つて紳士の後に續いた。

彼は紳士の家の庭園に面した何となく感じの良い一室に通された。庭に植々られた木と言ひ草と言ひ彼には珍らしいものゝみであつた。しばらく四方山の話をしてゐた紳士は、一寸言葉の調子を改めて「サテと、例の新組織についてお話しますかナ、先づ第一に擧ぐべきことは土地の國有ですよ、何しろこの土地といふものは總ての富の基で、凡ゆる産業も實業も土地の産出する物資によるもので、廣く言へば人間生活の一切が土地によつて、つまり土地の上に住居し土地からの所産によつて支持されるので、換言すれば土地は富の基であると同時に人間生活の本源ですからね、で、生活資料や富の分配を公平ならしめるためには、能ふ限り容易にそして自由に土地を手に入れ得るやうにしなければならない譯なんです。ツマリ一切の土地所有權を國家または州郡の手に屬させて、しかも何にでもそれを使用することが能きるので、要するにそれは國民全體の福祉となるのです。ですから、國民は容易にそして自由に土地を手に入れることが出來る譯なんですよ」

「デモそれでは一時は良いやうでも結局その良制度を裏切るやうなことはないでせうかね?」

「ハヽヽ、イヤそれはね、先づ國家は土地を欲する國民に對して、一種の所有權乃至その資格、更に言へばその使用權を附與するといふ譯なんです。で、その人は國家の受托人乃至代理人となつて土地を耕作するのですが、それだからと言つて何も國家の支配や指圖を受けるのでなくて、獨立の所有者と同樣に任意に土地を管理することも許されてゐるのです。またその土地を賣買しても良いので、たゞそれを子孫に相傳することだけが禁じられてゐるのです」

「しかしそれでは丁寧に土地を管理する人がないでせうし、第一張合がなくなつて眞面目に働く人がなくなりはしますまいか?」

「イヤ、そんなことはありませんよ。何故つて、子供たちが一人前になると直接國家自身の手からその所有權を貰へるのですもの。一體舊制度に於て富が極めて少數者の手に集中されて大多數の者には貧窮のみしか與へられなかつた。最大原因は、この子孫の財産相續權だつたのですからね、新制度に於ては社會の不合理の最大禍根をなしてゐたその弊害の起らぬやうにしてあるのです。そして動産にしろ不動産にしろ結局その所有權は國家の手にあるので、その所謂管理人が死亡すればその財産は總て一旦國家の手に歸り、その後に改めてその才能に應じて他の人に與へられることになつてゐるのです」

「え?、土地ばかりでなく、他の不動産も動産も國家所有物だと被仰るのですか?」

紳士は微笑しながら、

「然うですとも、動産に於て多くの財産が蓄積されるのと不動産に於てされるのとは事實上同じな筈ですよ。そして凡ゆる財産が國家の所有なので、何等かの職業に從事してゐる者は、合理的にそして合法的に當然國家の受托人であり代理人であり被傭人である譯なのです。ツマリ委託人と受託人または傭主と被傭人といふ關係は人生の總ての職業に及ぶので、更に言へば、事實上からして國民各自は彼自身が獨立の主人で、自己の適當と信ずる所に從つて自己の職業を經營し、國家からは素より何等の支配も指揮も受けずに、自己そのものゝためにベストを盡して他と自由なそして公然な競爭が能きるのです。そしてその經營法は他國のそれと殆ど同じで、たゞ需給の法則によつて物價や賃金が調節されるのです。そして他國同樣に一切の職業に競爭もあれば競爭者もあるのです。しかし、それらの背後にはやはり受託人、代理人、或は被傭人といふ關係のあることは勿論ですか……」

二　行政組織

「何？　ア、行政の組織などですか、それはね、區を以て單位とするのですが、農業部では二萬人乃至五萬人、都市部では二萬人乃至十萬人若しくばそれ以上の住民をもつてゐるのです。そしてこの區は更に職業上の目的から小區に分たれるのですが、勿論制度施行上から言へば區が單位なのです。そして小區は農業部に於ては六乃至八平方哩と四百乃至八百の人口を有つ町に相當し、都市部では一千人乃至一萬人を有する市區に相當することになつてゐて、適當の小區に分たれてゐるのです。ツマリそれはその境域內の財產一切の所有權が結局の所區の所屬とされるためなのです。更に言へばそれを各人の使用に供して各人の利益を圖るためなのです」

「區が財產一切の所有權をもつといふには、區はドンナ根據に基いて人民にその財產の使用や占有を許すのでせう？」

「その根本原理としては、國民各自が區から受くる所得額の如何を以てされてゐるのですよ。農場にも大小種々の別があるし、その建物の價格その他によつてもそれ〴〵差があるし、都市に立並ぶ家屋にも勿論多くの區別があるのです。そして商賣の目的で人民が所有してゐる財產の量にも隨分甚だしい差異を含んでゐるのです。先づ都市に於ける家屋制度から申しませうが、一體我々社會の家屋制度は他の社會とは頗る變つてゐましてね、どんな貧乏人にでも家族毎に一つの家庭を備へさ

せることになつてゐるのです。ツマリ區が區民各自に住居を與へてやるのですが、殆んど凡ての場合、何等地代や家賃などを徴收しないのは勿論、その家は徹頭徹尾區民自身に屬するものなのでその自由になるのです」

紳士は家屋制度に關する説明を續けた。それによると

――それは大抵の場合、國民が區から得る所得額に基づくもので、各家庭の家長は家庭を備へるために五ケ年間の平均所得額の三倍に相當するだけの國有財産を所有し使用する權利を與へられ、その三分の二……ツマリ所得年額の二倍だけを家屋と敷地とのために、そして三分の一を動産すなはち所帶道具などのために向けられることを原則とはするが、區民の要求によつては前者の割合を增して後者のそれを減ずることを得る――。

紳士が次の言葉を發しやうとするのを遮つて彼は言つた。

「その、土地と家屋とは家長の年收の二倍額と定められたにしろ、一體その價格はどうして定めるのです?」

「それはね、年收平均一千弗を得つゝある家長は、當然その二倍額すなはち二千弗に相當する不動産を所有する權利がある譯で、その時彼の住んでゐる小區にそれに相當する土地家屋が空いてゐると彼はそれを貰ふのですが、若し空いてない時には、區内民が選んだ土地に對して他の區民と競爭入札の結果、それに勝つた上で、更にその附近の土地と價格の比較をして適當と認められた時に敷地として決定されるので、然うした要求乃至必要が多くなればその區を擴張するか別に新らしい町を建設するかするのですが、その場合には公設競賣場が開かれて最高額の入札者に敷地を落札するので、土地の價格はこの場合に生ずるのです。しかしその所有權は依然として區に屬してゐるのです。」紳士はかう説明して置いて更にその土地に家屋を建設する場合のことに説き及んだ。それはかうであつた。

――例へば年收一千弗の家長が四百弗で土地を落札したとして、家屋の構造のために千六百弗だけを投ぜられる譯であるが、それは家屋基金の名の下に先づ銀行に預入される。そして彼は自己の任意に建築に要する人たちを選んで起工し、その竣工の上はその基金を小切手にして支拂ふ。彼は自己の凡ゆる取引に關する領收證の副本を區に提供して置くのである。ツマリ區民はその金が自分の金であると同樣に、自分の費用で自分が最も得をするので、それによつて奬勵づけられると同時に利益も受けるのである。即ち時間と手數とを厭はなければ自己の趣味に從つた家を手に入れることが能きるのである。若しまたそれを厭ふ人は適當な舊家屋の空くまで待たなければならない。ま

たアパートメントやフラットなどの建物は、區自身によつてか又は多數の相互協力によつて建てられる。

何れの場合に於ても所得額に相應する以上の家屋を手に入れることは、區の財産を使用する上に於ける凡ゆる區民を絶對的に平等に取扱ふべしといふ區の法律が許さない。

しかし、區民の所得は月々によつて、或は年々によつて變化がある。また、一定の收入を得てゐない人々、即ち農夫、實業家、自由職業者、勞働者などがあるが、そこをうまく調和するために地代及び屋賃を徵收する。それは、或人の所得が變化して土地家屋を與へられた時の標準以下となつた場合、即ち土地家屋の價格の二分の一以下になると、彼は地代と家賃とを負擔させられるのである。すなはち所得年額と實收入との差額だけの地代および家賃を區に支拂はなければならない。又、若しその反對にその人の收入が增加した場合に於ては、區からは更に高い不動産を與へるか若しくばその差額だけの地代および家賃を彼の方に支拂ふのである。これらは言ふまでもなく家庭の永住を保證するものである。

そして、全國を通じて一般的に徵收される地代及び家賃は不動産價格の八パーセントで、それは區民が土地、家屋、家具造作などを使用してゐる區の資本の使用代が四パーセントと、維持費、修繕費、價格下落の用意金として四パーセントとの合計である。

それから、區民は互に土地や家屋等の交換も出來る。

ツマリ財産一切の窮極の所有權は區にある如く區民のそれに對する關係は全然所有者の立場で賃借人のそれでは決してない。

そして、區は家屋や土地を支給するに方つて、その地位に相應したものを以てするが、それと同時に家族の多少等に對して現在及び將來などを充分考慮の中に入れる——。

紳士はこんなことを說明した。青年は熱心にそれを聞いてゐた。

彼は紳士に對してその組織の良さを稱揚した。紳士は少時してまた說明を續けやうとしたが、それはまだ保留になつてゐる筈の農業部に於けるものには觸れやうとはしなかつた。勿論その大部分は同じだらうが、都市に於けるものと地方に於けるものとの間にはそこに自ら差がなければならないだらうことを青年は思つた。で、彼は紳士にその說明を促した。」

三　國民の生活狀態（一）

「ヤ、ツィうつかりしてゐてトンだ脱線をする所でしたね、ハ、、、。地方部の家屋制度としましてはね、農業者たる者はその收入年額の三倍の配當を受けたのを以て、家屋や納屋その他の農場附屬の建物など言つた不動産と、家具や造作や農業の機械などの動産を手に入れなければならないのです。……イヤ被仰通り一見不公平のやうですが、都會人は配當の全額を家屋と土地とに費すべく餘儀なくされてゐるのですが、農業者はその三分の一若しくば四分の一を費すのみなのですからねしかし土地は廉くても、農業者は住居以外に農場附屬の建物が必要なので、そのために彼等は地代の徴收を免れてゐるのです。で、彼等はその受くる配當の全額を建物と動産即ち家具と農具とを求め得られるので、都市の區民と同額の金で家屋と納屋とを建てることが出來るのです。そして土地は一區域毎に、過去數ヶ年間に於ける生産額によつて定められた土地價格があるのです。それは勿論農場の眞の價格で區ではそれを標準としてゐるのです。で、農耕地の土地價格を保持して行くためには區は毎年平均收穫に等しい收穫を要求します。若し平均以下のものを收穫してその地價を損失した時は、天災地變などを除く以外の場合に於てはそれだけの金額を區に拂はなければならないのです。と同時に都市人と同じくその平均年收を得ない場合はその差額だけの家賃や地代を區に支拂はなければならないことを規定されてゐます。そして若し家屋を新築するか增築するかした場合區から受くる金額を超過した場合に於ては、彼はその所得を增すまで超過額に相當する地代や家賃を拂はなければならないのです」

紳士が言葉をきるのを待つたと言はぬばかりに青年は直ぐ質問を發した。

「農業部にも都市部と同じく農場の大少や所得に相應した家屋、農場附屬の建物などに、大小や樣式乃至價格などの差異があるだらうことは御說を俟つまでもなく肯定して誤らないと信じますが、一體、區民の家屋、土地、家具造作などの價格を年收の三倍と制限する法律は區民の上中下各階級を通じてのことなんでせうか?」

「然うですとも。金滿家でも貧乏人でも、區民の誰もに適用されるのです。一體この制限があるために、所謂極貧者にでも區の力で充實した結構な家庭を與へられ、それと同時に富者や權勢家にも充分立派な堂々たる家庭を與へることが出來るのですよ」

「なる程、住居などの點にかけては最も進歩した良制度を採用されてゐますね、一寸考へて見たのでは到底實行されないやうな良制度が實現されてゐるとはまつたく感嘆の至りです。シテ區民の衣食の資……給料はどんなことになつてゐるのですか?」

「各區とも同額の給料を全區民に平等に支拂ふのです」

「と被仰つても、各人の働く能率……男女老幼などによつて差がなければ本當の意味に於ける平等は望まれないでせうに……」

「然うですとも。この平等給を受くる資格のある者は所謂一人前の働きの出來るものでなければならないのです。一體この平等給と言ひますのはね、區が區民に分配し又は支拂ふもので、凡ゆる職業、凡ゆる階級の人に對して同一額を支拂ふのです。ツマリ區は各人の勞働が生んだ所得から、他の目的に使用するために幾らかを差引いた後で區民の同額の平等給を支拂ふのです」

「その平等給は毎月一定額を支拂つて區民の生活を保證するのでせうね勿論」

「イヤ、それは一ケ月乃至一ケ年間に區が儲ける額によつてその給料にも多少がありますが、どんなに景氣の惡い時でも彼等の生活を脅かされるやうなことはありませんよ。何故つて、各々事業の經營などに就ては最も愼重な態度を以て研究して殆んど萬全の域に達してゐますし、區としてもそれ相等に調節を圖つてゐますから……臨機應變のね。何？　イヤ各區とも平等給の額は同じではありませんよ。何故つてあなた區の大小や、人口、地質、產業の種類などによつて同一の生產を見る區がない筈ですから。しかし同一地域や同一特色を帶びた地方や同じ州などになると大概似たものですよ」

「シテ一體その平等給といふのはのど位な額ですか？」

「マア月に二十五弗か三十弗……」

「え？……」

彼は餘りの意外さに思はず大きな聲で叫んだ。區民の生活振から推してそれは餘りに少額過ぎることを彼は思つたのである。彼は意外さに緊張した面をあげて

「二十五弗か三十弗……それは普通の勞働者や職工たちには相當でせうが、所謂月額が四・五百弗もある人に對しては餘りにも無理な規定ですね、それこそ却つて不正義であり不平等ではありませんか？」

紳士は笑ひながら

「イヤ、この平等給と言ふのは區民の受くる給料のホンの一部分なんですよ。しかしこの平等給は單に衣食の方面だけのことで、それを他に使ふ必要がないのですからね。デモ自分の家をもたない區民はその四分の一または三分の一を家賃として支拂はされるのです。一體この國の根本律としての一つは「各人の必要に應じて與へる」といふことですから、國家が國民のために爲ることは總てこの原則から割出されるのです。で、區は、區民に對して普通の生活費を保證する以外に、精神的

物質的何等かの欲求を滿さしむべく各人にその所得の二十パーセントを支拂ふのです。それが所謂

「特別必要基金なんですよ」

「それはさうと、家屋の修理などはどうすることになつてゐるのですか?」

「家屋の修理ばかりではなく、家具の修理や新調のために、その人の所得十パーセントづゝを與へられることになつてゐます。そしてその所謂修理保存基金は、その五パーセントを家屋の方に、他の五パーセントを家具の方に向けることになつてゐるのです。ですが、それは不必要の場合にはそれを貯蓄して置くことも能きるのです」

『さうですか、シテその、使用に就て多少の制限を必要とする事はないでせうか?』

「その必要があるので、小區毎に家屋局を設けて建築場視察員を置き、必要な修理を閑却してはならないことゝ、不必要な修理に金を費はぬやうに監督するなど、家屋一切のことを取締つてゐるのです。で、その修理に方つては家屋局に屆出て視察員實地臨檢の結果によつて決定されるのです。また、アパートメントやフラットの場合に於ては、そこに住んでゐる、幾家族かの全體の所得の五パーセントを修理基金とされるのです。そしてその中の幾パーセントかを建物全體の修理と保存とに當てられ、その殘りはそこに住んでゐる各家族の所得に應じて分配されるのです。そしてまた一時腰かけ的に寓居してゐる人や空家などに對しては家屋局で管理し修理するのです」

四　國民の生活狀態（二）

「如何にも伺つて見れば見るほど誠に良い組織だことに感心せずにはゐられませんが、それと同時に私には一つの大きな疑問があるのです。それは、如何にこの新組織が一面に於て區を以て所謂資本家とし區民を傭人としてゐて、資本家たる區が受ける純益金を區民に分配するものだとは言へ、たゞそれだけでは到底かうした美しい社會は保つて行けさうに思ひませんが、一體それはどんなものでせうか?」

なるほどそれは尤も至極なお尋ねです。しかしそれには多額の所得を得る人……例へば年收六百弗以上の所得のある人が、他の所得の少い人に分つてやることになつてゐるのです。若しかうしたことがなければ、こんなに社會から貧窮を一掃することも能きなければ社會の全員に生活の必需品を供給することも能きないのですが……。それに就て、區は區民に與ふる生活費を制限し或は一定させてゐるのです。例へば年額一萬弗の所得のある人は二千三百五十弗を受け、二萬弗の所得の人は

四千三百五十弗を、五萬弗の年所得の人は一萬〇三百五十弗をその生活費として受けることになつてゐるのです。今假りに年所得一萬弗の人を例にひけば、彼は二萬弗の價格のある住居と一萬弗の價格のある動産とを所有し、不動産修理のために五百弗と家具や造作の新調乃至保存のために五百弗とを毎年受けることになつてゐるのです。で、彼はこれで身分相等の生活をして行くに充分なのです。しかし勿論贅澤三昧をするには不充分ですが、若し一人の人間が一つの大厦高樓を獨占するために百萬弗を使用することが許されたとしたら、それは直ちに一千人の人間を宿なしにすることを意味するほど密接なそして重大な關係がありますので、社會が擧つて幸福な生活を送るためには少數者の贅澤三昧は嚴禁しなければならないといふ意味から、然うされて、それがよく行はれてゐるので、マア御覽の通りの社會が生れてゐる譯なのです。何しろ富豪の濫費に對して或る何等かの拘束を加へない限りは多數者の貧窮は永久にその迹を絶つことは絶對的に不可能ですからね」

「その最大の禍恨を除かれたことがツマリかうした美しい社會を建設された基低と言へば言へますね。それはさうと、商業や何かの事業を起したい場合には何か然るべき便宜が與へられてゐるのですか？」

「それはね、千弗以上の所得のある區民に、その所得の最初の千弗以外の所得の四十七パーセントを以てそれらに充てゝ可い權利を與へられてゐるのです……何？　その過剩所得の四十七パーセントがどういふ風にして手に入つて來るかと被仰のですか　それはね、區は最初の一千弗に準じて徵收するのと同じ二十三パーセントを一般使用といふ名目で過剩所得に準じて差引くのです。そして過剩所得の三十パーセントは修理と特別必要とのために區民に支拂はれるのでその總額は五十三パーセントとなるのです。そしてその殘りの四十七パーセントが商賣用として區民に與へられるのです」

「然うですか、實は先刻から伺はうと思つてゐたのですが、區から區民に支拂ふ金には獨身者と世帶持ちとの間に何等かの區別があるのですか、それとも先刻御說明になつた通りに一人前の能力者には誰にも平等給を支給し、且つ特別必要基金などを支給するゝことゝされてゐるのでせうか？　私はその點がどうも不公平でないかと思はれてなりませんが……」

「區別はあります。しかしあなたも定めし怠屈されたでせうからお茶でも喫んで一休してからお話しすることに致しませうよ」

「サテ、先刻の宿題の說明に取懸ることに致しますかナ、一體、一家族の家長が受ける平等給以外の總ての給料はみなその必要のあるためですが、扶養すべく運命づけられた人の居ない獨身者……

例へば兩親かゐてどうにかしてその子女を養育して行けるやうな家庭に起臥してゐる獨身者は、一家族の家長となる人だとか扶養すべき人をもつ獨身者など、同じ要求をもつ譯に行かないのです。でそんな獨身者には平等給以外の金は支給されないのです。但し彼の所得がその所謂收入金よりも過剰を來した場合は別ですが……。そして、二人以上の人間から成立つてゐる一つの家族には、平等給以外の金を支給されるのです」

「デ、所得が收入以下にしかならずに、ツマリ國家に厄介をかけてゐる獨身者に各種の配當金を悉く與へるといふのは區の經濟上から言つて一種の謬見ではないでせうか?」

「それはマア言はゞ然ですが、區民の必要を充すといふことを根本法律の一つとしてゐるのが我社會の建て方なので。その獨身者を扶養しまたその生活を維持してやるためにそれらの配當が必要と認められた場合は止むを得ず支給されます。しかし普通は獨身者には平等給だけを支拂ふことにされてゐるのです。それでも若しその所得が收入以上に出る獨身者には各世帶主と同樣に支給されるのです。と言つただけでは直きにあなたから質問の矢を放たれるでせうが、此場合は私が前に申しました區民の必要を充すといふことゝ矛盾するやうに感ぜられるでせうけれども、その人が別に生活の必要から來る要望がなかつたにした所で、商賣上か、事業上か、職業上に於ける地歩を確立するなどゝいふ點に於て希望をもち、また必要を感ずるでせう。また、扶養しなければならない人をもつ獨身者には、その扶養すべき人員の多寡に拘らず普通の人と同じく諸種の配當を受くる權利があるのです。何故つて、そんな人は家族の首長と看做すことが當然ですから。法律に適つた正當な家庭を維持してゐる人は強ち結婚した人でなくても一家の家長で、當然それは一人前の配當金を受くべく資格づけられるのです。そしてこの部類に屬すべき人は一人以上の子のある家庭を維持してゐる鰥夫、または寡婦になつた母と共に暮してゐる子、同じ家に住んでゐる兄妹、或は多勢の年下の弟妹の頭に立つてゐる兄姉などは、年齢や男女の別に拘らず一家の家長として平當給および配當金を受くる資格があるのです。そしてこの場合は、その家族中で最高額の所得のあるものが家長となつて、財産その他の配當は何れもその人の所得に準じて與へられ、家族中の他の人々は獨身者として取扱はれるのです。また家族の要求によつては家族中の所得を一纏めにして拂つて貰ふことも能きますが、その場合には平等給は勿論一口にしか拂はれません。尤もその代り配當金の方も高率とされます。そして總ての場合に於て年少者の收入は家長の所得に合算されます。また妻の收入は夫のと合算することを通例とされてゐます。思はず話が岐路に入りましたが、獨身者と一家族の首長との間に存在する今一つの區別は、家長が若し職業を得られない場合に於ては、區がそのために周

旋の勞をとり、又若しうまく職業が見つからなかつた場合にも彼に平等給を支拂つてやりますが、誰も扶養すべき責をもたない獨身者にはその人が職業に從つてゐる時だけしか拂はないことです。マア、ざつとかう言つたやうなことを原則としてやつて行つてるのです。……サテと、今度は隱居さんと寡婦や孫兒などの扶持……つまり普通の働きの出來ぬ人々の生活に對して區はどうしてゐるかをお話しすることにしませうね」

紳士はかう言つて新しいシガアに火をつけた。

五　國民の生活狀態（三）

「一家族の家長が隱居することになると、その所帶道具や一切の私有品が彼の手に殘ることは勿論ですが、彼は彼が職業に從事するやうになつてから隱居するまでの間の所得年額を全部平均して得た額に二倍する價格の土地や家屋を與へられるのです。つまりこゝらがこの社會の特徴の著しい一つですよ。そして……」

「デモ、その後の生活費はどんなにするのです？たゞ隱退料とも見るべき土地と家屋とを貰つたゞけでは未だ不徹底のやうに思はれますが――」

「どうも若い人は氣が早くつて困りますね、ハ、、、。隱居さんの生活費として平等給を與へることは勿論、特別必要基金として平均所得年額の二十パーセントと、修理及び保存のために十パーセントづゝを支給されたのですから、それで充分その人の生活は保證されてゐる譯ですよ。ですから老人になつたり不具者になつたとしても自分の從前通りの生活が能きるのです」

「然うですかね、では、國民たる以上は誰もが他の人々と平等の地位にあつて而もその人の社會的地位の如何によつて兎に角充分生活の保證を國家がするといふのがこのイクオーランドの特色なんですね」

「然うです。そして病院の代りにホテルや保養所などを設けてゐるのもチト變つてゐますが、その經營は團體で以てされ、相當の利益を納めてゐるのです。といふのは、そこに行く客が國家から受ける給料若しくは他の收入から食事その他の費用を徴收しますから……えゝ寄附なんかで維持されてゐるのではありませんとも」

「そんな善過る制度では隱居を望む者が多くて困りはしませんか？勿論それについては嚴重な規定があるにはありませうが……」

紳士は苦笑して

「この社會ではそんなズルい考を起すやうな人はありませんよ。皆責任感に強いしそれに仕事に從事することとそれ自身に非常な樂しさを感じてゐるのですからね、で、若し老衰しかけて來ると何かしら比較的身體に骨の折れない仕事に從事するといふ有樣です。ですから退隱は要するにその人の健康や能力などの如何によつてされるのですから年齡には絶對に制限がありません。また無いのが本當な筈です。兎に角區民が最早働けなくなるとその區の退隱局に屆出て退隱者名簿に登錄して貰ふのです」

「シテ、退隱者が今まで商賣上などの目的のために使用して來た不動産や動産はドンナになるのです?」

「それはみんな區の手に入るのです。何?つまらないぢやないかつてそんなことはありませんよ、何故ならその代りにその人は平均所得に準じた年收を受け得られますから。何業に限らず、實業家が隱退する時には彼の所有する凡ての資本を、農業者の場合には今までその人が占有して來た農場を區へ引渡すことになつてゐるのです。しかし何等か自然的に收入を生ずるやうに投資してゐる人々はそれらによつて老年時代を過すことになつてゐるのです」

紳士はさらに語り續けた。

——夫婦者が退隱する場合にはその好む方々の暮し方を選ばせる。即ち下宿したり旅行したり養老院で暮しなどする方が家庭をもつより樂だと望む者に對して區はその權利を與へる。そして若し彼等に適當の住宅がなかつた場合に限つて地代家賃の上り高を支給することにまでなつてゐる。とは言へ老人中で一戸を構へて行けるやうな人にはなるべく然うさせる——。

「退隱についてはよく判りましたが、夫婦の何れかゞ死んだ場合には?」

「その生き殘つた者に對して平等給の三分の一と特別必要金に所謂年額の五パーセントと五パーセントの修理保存金とを受け、更に平均所得年額の一倍半の財産使用の權利とを與へられます。ツマリこれは夫婦暮しの者の受くる半分です。しかし病氣などの場合には必要に應じて增手當を支給されます」

「なる程ね、では若し數人の子と妻とを殘して夫なる人が死んだ時にはドウです?」

「そんな場合にはその寡婦は家族の人數の多少に應じて追加家庭費を與へられます。また兩親を失つた子供等に對しては、その教育や養育のために若干額の給料が拂渡されますが、兩親の財産は世帶道具や身の廻りの私有品を除いた外は總て一旦國家の手に返るのです。そしてその子供が一人前

になつた時に區は彼の所得に應じて財産の所有權と使用權とを與へるのです。また孤兒は年老いた婦人や寡婦などが家庭的に世話をしてゐます。ツマリ區は兩親の代りとして充分子供の養育と教育とを保證してやるのです」

六　社會的施設

「道路の修繕だとか水道や下水の工事など言つた公共的事業にはドンナ方法でその費用を得てゐられるのです？」

「水道や下水は社會全體がそれを負擔してその金は區債といふ形によつてされますが、街路や地方道路の改良、または排水や灌漑工事などには公債が發行されます。しかしそれはその恩惠を受ける程度の如何に應じて近隣の土地々々に割當てられるのです。

と言つて紳士は例をひいて說明した。

——或る街路の改良費が二百弗だとする。そしてその土地價格は二千弗とし、そこに居住する一區民の所得を平均千弗とする。

二千弗の價格の地に二百弗の改良を施したのだからそれは二千二百弗の價格の地となるべきである。

この工事をなすためには四パーセントの利で向う十ヶ年間に支拂はるべき公債が發行されたとする。

區または小區は毎年それに對して支拂をする。第一年目は二十八弗、すなはち二十弗の元金に二百弗の四パーセントの八弗を加へたもの。若しその土地の所有者の所得が以前と同じものだとすれば、彼は自己の所有資格より二百弗を多く使用することになるから、その額に對して年に八パーセントの地代を負擔させられる。で、土地所有者たる區民が拂ふ地代及び利子はほゞ公債に對する區の償還額と平均する。

公債が完全に償還さるれば同時に利子の負擔が止むことは勿論であるが、若し土地所有者の所得が依然として增加せぬ場合には、その改良の狀態に應じて、その土地に加へられたゞけの價格に對して彼は依然として地代を拂はなければならぬ——。

「しかし道路や街路などは公衆に使用されてヨリ損傷するもので、時々修繕などをしなければなりませんが、それにも拘らず昔の價格その儘を標準として地代を徵收することは甚だ不公平なことで

すね」

「然うですとも。だから五年目に一度づゝ評價の仕直しをします。その狀態の如何と隣接地に對する點とを充分に觀て眞の價格を査定するのです」

「シテ、農業者の所得を增加する目的の下に耕地整理や貯水地灌漑溝などいつた土地改良をなす場合に金を借りるにも矢張前の場合と同じなんですか?」

「然う〳〵しかし元金や利子を共通基金の中から小區で支拂ふ代りに農業者は利子と地代とを負擔させられます。そして總て斯る貸借は先づ小區當局の許可を經なければならないのですが、土地所有者は當局の許可を得ないでも自分で責任を以て借金することが能ます。この場合には勿論その元金も利子も共に彼自身の收入……平等給や特別必要基金などから支拂はれるのです。そして債權者は支拂を受くるまでそれらを差押へて置く權利をもつてゐるのです」

「土地改良に要する金錢貸借に關する規則などは嚴しく定められてゐるのですか?」

「定められてはゐますが、要するに然うした負債は、共同的に農場所得の增加を圖ることを理由とし目的としてなさるゝものですから、總ての農業區ではこの目的のために巨額の金を借入れて準備してゐる位ですから、法律だ規則だと難かしくいふ必要はありません」

「ソレデ、銀行事務の方はドウです?」

「最も隱健で安全な基礎の上に立つてゐますよ。何しろさつきからお話したやうな工合に、一つの負債に對して社會全體が責任を負ふことになるので、それこそ公債と同樣安全なものです。即ち小區が區民に渡す平等給その他の中から天引して支拂つてやるのですからね」

紳士はさらに銀行業に關する說明を彼に與へた。

——區民の債務を保證する區自身が諸種の用途のために大債務者となることも勿論多いが、これは團體的に同樣の原理を應用したので敢て不自然でも不思義でもない。また實業家や實業團體にも巨額の金を融通されるが、それらはその商賣に對する差押權によつて保證される。と同時に各銀行が各事業の實情を確知する特別な組織によつて自守的に安全を期しつゝある。

またこの國に於ては各種の事業上の目的で資金を使用するには至極都合が良い。といふのは、一切の土地が國有で、個人と個人との間に行はるゝ世襲財產の賣買などがないために、巨額の資金がそれ以外の他の目的のために使はるゝやうになるから——。

七　強制就職法

「強制就職法といふのが我が國にあることは特にお話しなければならないことです。一體この法律の生れた理由は、平等給を支拂はれてゐる國民は當然一年に同一時間數……平均時間數だけの働きをしなければならないのです。で、苟くも國家の被傭人として何等かの働きの出來る者には就職を強制するだけの權利が國家にあるのです」

「なる程それは頗る面白い法律ですね、他の多くの國々で職を得られないで殆んど狂亂の狀態になつてそれを漁り廻つてゐることゝ思ひ合して見ると實に世を異にした感がありますね。しかし、國民の誰もにとはチト無理が生じはしませんか？」

「イヤ、夫のある婦人だとか家事を負擔して家族の世話をしてゐる婦人、或は親の扼厄になつてゐる子供や退隱者、または一家族を支持してゐる母親などは除外されます。兎に角我國には遊民と名のつくべきものは一人もないのです。他の國に於けるやうに貴族などいつたものもなければ極貧者もないのです。何と言つても世の中から貧窮といふ悲慘なものを絶滅しやうためには所謂下層階級民をなくすると同時に上層の遊民を除かなければ駄目です。そして國民全體が幸福に暮して行くには國民各自が社會に對して何等かの働きをしなければならないのです。つまり國民全體が各自の存續發展のために、また社會全體の幸福のために時間と能力と勞力とを社會に提供しなければならないのです。で、強制就職法の必要があるのです。しかしながら實際にこの法を行使する必要は殆んどありません。各自が自覺してゐますからね」

「そのために何か事だつた組織でもあるのですか？」

「それには中央職業紹介局があつて、各小區に置いてあるその支局と連絡してゐて、もしその小區で就職の出來なかつた者は然るべき小區に送つて働かせるなどの方法まで講じてゐます」

「シテ、勞働時間はドウして定められるのです？」

「それは一概に言ふことは出來ませんが、各區は毎月その區内に於て行はれた勞働時間の報告書を發行して、凡ゆる職業のその月に行はれた平均勞働時間を示すのです。それによつてマア勞働時間は平均されて行くのですよ」

「勞働時間の精算なんといふことは何ケ月目にかやるのですか？」

「毎年末になつてします。そして平均數以上の勞働時間をもつ人は翌年度に貸越し、不足した者に

は、若し必要があれば翌年度のはじめに於て何等かの公共的事業に從はせ、でなければ平等給から適當の額だけ差引くのですよ。しかも大部分の人は働き越しの方が多いやうです」

「强制就職の法がある位ですから、定めし區が區民の勞働を支配するのでせうが、それはドウするのです？」

「イヤ、强ちそんなことをする必要はありませんよ。またそれは望む方が無理か知れません。たゞこの勞働法令は一年になす勞働時間數だけを區に要求してゐるのです。しかし區としても敢て區民に勞働を無理强いする必要がありません。何故かつて働かない者には給料を渡さないだけのことですもの」

「しかしそれではうまく社會の秩序が保たれないでせうし、第一强制就職令まで實施されてゐるのと聊か矛盾するではありませんか？」

「それに就て いまお話しやうとして ゐた所です。區はよくその務を果たす區民には甚だ親切ですが、サボツて務を果さない者には嚴格な處置をとります。若し相當な勞働時間を報告してゐない者があるとすれば、彼は審問された上に檢査を受けねばなりません。而も外面上から見て何等身體に障害がない場合は更にその精力を檢するために藥物試驗をされるのです。若し彼が後者の檢査に於て欠點のある所を認めらるれば、彼は一種の病者すなはち懶惰病者として取扱はれ、適當な方法を講じて彼に勤勉の風を習慣づけるのですが、これ以外の者……故意に横着で働かぬ者には峻烈な制裁を加へるのです。そんな奴にはね、足に鐵丸と鐵鎖とをつけて、役人の監視の下に何等かの公共的事業に苦役させ、若しそれでも充分懲りない者には、或る期間を感化院か懲治檻に入れて極端なそして不快な仕事をさせるのです。それは恰度他の國々に於て貧乏人か不幸者がすることです。しかし如何に然うしたことを罪人にやらせると言つても彼等の健康といふことには然るべき注意と方法とを講じてゐるのです」

「しかしそんな懲罰制度は恐らく世界一の怪いもので、他の國々では大部分の人が然うしたことに從事しなければ生きて行かれないのですからね。シテ、そんな場合に區と區民との關係はドウなるのです？」

「區民が若し罪を犯して懲罰の宣告を受けたとて彼は矢張り區の被傭人です。その所得に應じて他の區民と同樣に給料や他の收入を得られるのです。しかし彼が罰を受けてゐる間だけ在檻者維持費を差引かれ、その餘りは、若し彼に家族のある場合は家族の生活費に、若し家族のない場合には彼が釋放された場合に渡されるのです。つまり區は在檻者の扶養すべき家族を彼に代つて扶養してや

るのです」

「然うですかねえ、他の國々では、罪人をその家族から奪つて、罪のない家族の父一人の犯罪のために苦しめ、罪人を苦役して何等の給料を支拂はないで滿期出獄の時には文字通りの一文なしにして出すので、國家は彼を眞人間として生かすべく決して良い機會を與へないのです。で、國家はそのために却つて大きな損失を來しつゝあるのですよ」

「諸外國では然うだと言ひますね、そんな不自然な基礎の上に立ち、その運用からそこに何等の利益も生じないやうな懲罰制度の存在價値はゼロと言つて支差ありませんよ」

「然うですよ、全く……」

「大抵の國々では一度罪を犯したゝめに眞面目な渡世をする機會を永久に失つてしまつたゝめに犯罪生活を餘儀なく續けるといふやうな人々ばかりのやうで、罪人にとつては再び就職するなどいふことは殆んど不可能事と目されてゐますが、我がイクオーランドでは、罪人はその刑法を了へた後には他の區民と同等の地位と出世の機會とがあるのです。若し彼自身が職業を求め得ぬ場合には區が與へてやり、若し彼に適當なものを得られなかつた場合には平等給を與へるといふ風ですから、彼等に犯罪生活を續けさせる誘因はないし、第一、犯罪生活に入る動機や機會がありませんからね、兎に角他の國々に於ては常習犯人となるやうな人でも我國では有用の人として活動してゐるのですよ」

八　監督事務（一）

「さつきお尋ねしやうと思つてツイ忘れてゐましたが、區が區民各自の勞働時間を正確に知るには一體ドウしてゐるのでせう？」

「ツマリね、區民と區との關係は、營利の會社や團體などに於けると同じく、區民は區の被傭人ですから、給料その他は總て區の收入となるべきもので、それに對して區はその被傭人たる區民に一定の金額を支拂ふといふことになつてゐるのです。で、凡ゆる職業に從事するものに對して、區は彼にその勞働時間と彼に支拂ふべき金額とを記入した小切手を渡すのです。そしてお尋ねの勞働時間を確知する方法は譯のないことです」

紳士の説明はかなり詳しいものだつた。がそれは要するに

――都市の場合に於ては、市民の大半は何處かの所謂勤め人だから、その傭はれてゐる組合なり

會社なりまたは個人なりは、彼の勞働時間を記張するばかりでなく、一般にその勤務時間に應じて給料を支拂はれるので、そこから渡される支拂小切手に時間數を記入させるから極めて容易のことである。

それは單に常傭人に限らない。日傭稼に於ても同じである。と同時に銀行の頭取でも組合や會社の支配人でも重役でも誰でも一般の被傭人と同じく然うすべきものである。

勤め人以外のもの丶而も自ら何等かの業務に從事してゐるもの、即ち商店や料理店等の主人はその營業所の開いてゐる間の時間を認められる。それには何れの都市に於ても營業時間は凡ゆるものが同時に始まり同時刻に終ることを定められてゐるから譯なくその勞働時間が知られる。

要するに或る營業主の場合に於ては、その業務が要する所の時間數を以て彼の勞働時間とするのである——。

「しかし農業者の場合に於ては如何にしてそれを知られます？彼等の勞働時間は彼等自身以外に保證者がありますまいが……」

「然うです。而も彼等の勞働時間は甚だ不規則でいつも平均されたものではあり得ませんからね、勿論農場の被傭人のを知るには他の勤め人と同じく容易ですが、農業經營者それ自身のは困難だとお考になるのも無理はありませんよ。しかしそれは何等面倒なことはないのです。何故つてそれは賣却された各種の生産物の量が幾ブッシエルか幾ポンドあるかは雜作なく知られますからね」

「しかしドレだけのものを産出するにはドレだけの勞働時間を要するかといふことが正確に知り得られるとは聊か疑問ですね」

「イヤ〳〵、それは極めて正確なものです。何故なら、各地にある試驗所の監督の下に科學的の試驗法が行はれますのでね。またそれと同時に、地方部の各小區事務所では、毎年その管轄内の農場で産出した總ての生産物とその生産に要した農業者の勞働時間數を記張して置くので決して誤りはないと言つて差支ありませんよ」

「なる程ね、それでは醫師や辯護士などのそれは？」

「それは彼等の手を煩はした者が精細な時間を彼等の特別な手張に書き入れることにしてゐますから譯なく知られます」

「それでは先刻お話になりました農業經營者の勞働時間を算出するにその生産品の賣却高によると被仰つたがそれは農業者に無理を強いるものではありませんか？」

「イヤその理由はね、勞働時間は單にその人の所得にのみ準據されまたそれによつて保證を與へて

會社なりまたは個人なりは、彼の勞働時間を記張するばかりでなく、一般にその勤務時間に應じて給料を支拂はれるので、そこから渡される支拂小切手に時間數を記入させるから極めて容易のことである。

それは單に常傭人に限らない。日傭稼に於ても同じである。と同時に銀行の頭取でも組合や會社の支配人でも重役でも誰でも一般の被傭人と同じく然うすべきものである。

勤め人以外のもの丶而も自ら何等かの業務に從事してゐるもの、即ち商店や料理店等の主人はその營業所の開いてゐる間の時間を認められる。それには何れの都市に於ても營業時間は凡ゆるものが同時に始まり同時刻に終ることを定められてゐるから譯なくその勞働時間が知られる。

要するに或る營業主の場合に於ては、その業務が要する所の時間數を以て彼の勞働時間とするのである——。

「しかし農業者の場合に於ては如何にしてそれを知られます？彼等の勞働時間は彼等自身以外に保證者がありますまいが……」

「然うです。而も彼等の勞働時間は甚だ不規則でいつも平均されたものではあり得ませんからね、勿論農場の被傭人のを知るには他の勤め人と同じく容易ですが、農業經營者それ自身のは困難だとお考になるのも無理はありませんよ。しかしそれは何等面倒なことはないのです。何故つてそれは賣却された各種の生産物の量が幾ブッシエルか幾ポンドあるかは雜作なく知られますからね」

「しかしドレだけのものを産出するにはドレだけの勞働時間を要するかといふことが正確に知り得られるとは聊か疑問ですね」

「イヤ〳〵、それは極めて正確なものです。何故なら、各地にある試驗所の監督の下に科學的の試驗法が行はれますのでね。またそれと同時に、地方部の各小區事務所では、毎年その管轄内の農場で産出した總ての生産物とその生産に要した農業者の勞働時間數を記張して置くので決して誤りはないと言つて差支ありませんよ」

「なる程ね、それでは醫師や辯護士などのそれは？」

「それは彼等の手を煩はした者が精細な時間を彼等の特別な手張に書き入れることにしてゐますから譯なく知られます」

「それでは先刻お話になりました農業經營者の勞働時間を算出するにその生産品の賣却高によると被仰つたがそれは農業者に無理を強いるものではありませんか？」

「イヤその理由はね、勞働時間は單にその人の所得にのみ準據されまたそれによつて保證を與へて

ゐるのでゞす。そして農業者は他の區民と異つて萬事を區によつて生活してゐないからです。そして、今一つの理由は、その生産物の一部分が彼自身や彼の家族及びその家禽や家畜の食物などにするからです。彼はそれらの消費されたものに對して何等の保證を受くることが出來ないのです。何故ならそれらは決して區の所得にはなりませんからね。で、賣却された一般生産物や家禽や家畜などだけに對して區は保證を與へるのです。それから農業者がその生産物を賣却する時には、幾ブッシェル又は幾ポンドといふその數量を支拂ふ切手の上に記載して貰はねばなりません。といふのは、彼はそれを彼の小區の事務所に支拂はないで小切手をそこの事務局に引渡し、それと同時にその勞働時間に對する保證を與へられるのですから」

「或る事業の所有者が死亡するか退隱するかした場合に於ては、その事業が區のものとなると被仰いましたが、區はそれをドウ處分するのですか?」

「それはね、何もかもその儘にして直ぐに商賣の出來るやうな狀態の儘で、區民に競爭させて誰かに與へることになるのです。そしてその競爭をすることの能きる候補者はそれと同じ商賣を經營してゐる總てのものとされてゐるのである。さうすることによつて區と區民はヨリ充實し向上して行くことが能きるのです」

「しかし志願者中から選拔すると言つてもそれは頗る面倒なまた幾多の情實のあることだと思はれますが……」

「なアにそれは譯のないことですよ。何故ならね、單に數學的の問題で解決されるのですもの。その根據となるものはその志願者等の最近の五ケ年間に於ける事業の成績報告によつて、彼の技倆や信用等を充分に取調べ、その最も優れた者に與へるといふのですから、そこには何等の情實もなければまた敢て面倒なこともありません。」

「同じ商賣の營業者なればその後補者になり得られないとはイクオーランドとして聊か矛盾してはゐませんか?少くも今少しその範圍を擴張しなければね」

「ウツカリしてゐましたが、その候補者はその商賣の番頭や他の雇人でも良いのです。さうしないと所謂後進の途が開けてないことになりますからね」

「シテ、その所謂選拔試驗にパスした人の今まで營業して來たものは矢張區に引揚げるのですか?」

「然うです、そしてまたそれを他の希望者中から選拔してその人に營業させるといふのです。で、區民がその地位の向上發展を圖る機會は絶えずあるといふ譯です」

「さつき、營業組織の多くは矢張他の國々に於けると同じく會社や組合となつてゐると被仰いましたが、當然それらのものに就ても他と異つた所があるでせうね」

「然うですね、つまり資本株は區民に賣渡されるやうになつてゐると、區民は自分の配當されるものゝうちの一部分をこのために使用するのです。そして、株主または組合員となつた區民は區の受託人とする譯で、若し損害の生じた場合には、彼は自分の所得と資本使用權とを失ふのです。これは何と言つても都合の良い投資法ですよ。何故ならね、人爲的な價格設定や新株の濫發などは嚴重に禁止されてゐて、うまく法律で調節され保護されて行きますので、その利益配當は大きいものですから」

「若しその株主なり組合員などが死んだ場合にも失張り區の手に歸するのですか?」

「然うです。そしてそれは一つの受與物として選ばれた區民に與へるのです」

「農業者の場合に於ては?」

「さつきお話した他の一般の事業と同じですよ」

「ツマリこの財産授與規定は廣い意味に於ける財産相續法といふものですね」

「然うです。何しろ區全體が一家のやうなものですからね」

「或る區民が他の區に轉居する時にはその人はドウなるのです?」

「實に自由なそして氣樂なものですよ。甲の區民が乙の區に一時的な就職をする場合などに於ても、彼は甲區に於ける場合と同じ給料その他の收入を得べく乙の區にそれを引渡すのです。またその規定は事業上のために旅行する人々にも適用されてゐます。」

「すると所有品などはドウなるのですか」

「それは彼の必要品の總てを持つて行つて良いことになつてゐるのです。或はその動産を公賣または個人賣買して金に代へることを許されます。兎に角彼は甲區に於けると同じくその生活を保證されるのですからね。ツマリ轉住したものはその區の被傭人となるのですからそれは寧ろ當然なことですよ」

「若し或る者が二三の區に轉住したとして、その退隱に際して彼の受くる恩給にドンナ影響を及ぼすのですか?」

「ドンナ影響つて何も別にありませんよ。何しろ恰度他の國に於ける官吏などと同じですから、彼の居住した各地によつてその年數と所得との多少によつて退隱恩給を支拂はれるのですからね」

「若し彼が死去した場合に於ても矢張それに比例して渡されるのですか?」

「勿論然うです、それからね、若し外國から移住者がある場合に於ても、その年齢や技術などを充分試驗した上一般區民と同じくそれ相當の收入と平等給をも受け得られます」

「では移民者が陸續として來るでせうね？」

「來ますよ、隨分。皆が天國だなんて大喜びして愉快に働いてゐますよ」

九　監督事務（二）

「さつきからお訊ねしやうと思つてゐたことですが、區が區民の總てにその所得を報告すべく義務をもたせてゐるといふのは一體ドウいふ風にして仕組まれてゐるのですか？、なか〳〵正確な報告は得られないでせうが……」

「なアに報告は正確なものですよ。例へば甲が乙に何かを販賣する場合、その金額の多少に拘らず炭酸紙を以て普通二三通の記錄をつくるのです。そしてその一通を乙に渡し一通は甲の手元に置くのです。若しこの場合甲が丙の使用人だつたとすれば丙にも一通渡すのです。それを販賣票だと言つてゐます。勿論凡ての商人が物を賣る場合にも農民がその生産物を賣却する場合にも同じです。そして大會社や大工場大商店などに於ては特に會計檢査部を設けて、營業の總ての狀態を極めて精しく調べることを司らしてゐます。また會計檢査會社と言つて各商店などの營業狀態を精細に檢査することを仕事としてゐるものがあります。即ちその會社の社員は毎日一二回づゝ各商店を廻つて販賣票を集めたり現金簿の金高を調べなどするのです」

「さうすればなる程充分な正確に行きますね。しかしモツト販賣票の手間の取れないことがあつて欲しいものですね」

「勿論あるのです。料理屋だとか、菓子屋、パン屋、理髮店などいつた小商賣ですと、その商賣相當の金額と品目とを印刷した販賣票を用ひるのです。そして受取金額の所に鋏を入れるのです。また新聞屋や菓子屋或は小間物屋などいつた極く小さな販賣票がありますが、それは各種の金高順に記されたものに切取線があるので、金高に相當する部分を容易に切取ることが能きるのです。それから今一つは、或區では印紙消去法といふのがあつて、小額の受取に用ひられてゐるのですが、機械でやるので譯ないことです」

「しかし各種の販賣傳票を勝手に作られるのではいろ〳〵な面倒が起りはしませんか？」

「そのために各種の販賣票が總て會計檢査會社から出されるもので、五十枚づゝか百枚づゝかの組

になつたものでその一枚々々に番號がつけてありますから大丈夫ですよ」

「會計檢査會社といふのは、たゞ單に商店の會計を檢べるだけのものなんですか？」

「イヤ〳〵それと同時に彼等に對して種々の注意をし、また與信所みたいなこともして彼等を保護するのです」

紳士はなほ説明した。それはザツト次のやうなものだつた。

——販賣票すなはち請取書はそれを精算した上でその關係してゐる會計檢査會社に廻すが、區民は自己の居住地の小區に檢査會社から證明された所得を拂込む。そして平等給、配當等を受取る。各種の使用人は自己の居住する小區の役所と直接に交渉してその所得を引渡すのである——。

「農業者には充分な注意を與へないと自然と地味を減退させる惧れがあるでせうね、如何にこゝの土地が豐饒だと言つても……」

「それに就ては地味保存の責任があるのですが、敢てそんな規定を設けなくつても、地味を減退させるとその產出力を減じて利益を失うやうになるので大概の農業者はそんな馬鹿な眞似はしません。何しろ、農業者は各自が年々その所得を維持すると同時に、その屬する小區の平均生產額に相當するだけのものを產出しなければならないのに、若し土地を濫用するとそれが能きなくなりますからね」

紳士は新しいシガアに火をつけて語り續けた。

——農業者は地代と地價に對する區の損失とを負擔しなければならない。そして地力の減退を來した者はその土地に與へた損害に應じて特別の料金を徵收される。そして當然の勢として彼は收入の減收の結果劣等な農場に移されるか或は全然農業から追放されてしまふ。

また土地濫用料を徵收されるやうな者には手當金を受くる資格が消滅する。總ての農業者は、その所得額及びその耕作する土地の狀態が他に優る場合の外、ヨリ良い農場に移ることを得られない、即ち財產授與規定の堅く禁ずる所である。

農業者は、他の事業經營者と同樣その消費高を報告する責任がある。勿論それは彼自身のためにも最も忘るべからざることだ。何故なら、配當、手當等がその實際の所得に應ずるものだから——。

「しかし他の總ての事業に對して充分にその會計を取調べ、農業者に緩にするのは一つの矛盾ですね」

「イヤ、ちやんと小區に置いてある檢査員によつて極めた正確な檢査が遂げられてゐるのですからね、何しろ……ソラ毎月出すとお話した報告書の材料を調べに幾度も巡視などしてゐる位ですか

ら、收穫の時だつて誤らない確かな調査を遂げるのには敢て不思議はありませんよ。而も各種の生産物に對して細大なく調査されるのです」

「向ふに見える町家の裏に廣い土地がありますが、アレは矢張農家なんですか？」

「イヤあれは市民の住居なんです。大概の家では家畜を飼つたり野菜を作つたりして出來るだけのものを自分で作るやうにしてあるのです。自然に親しむ機會の少い都市生活者にアヽした天地を與へてやることは當然しなければならない國家の義務ですからね。この際申さなければならないことは、農業者の勞働は販賣する作物を產出する場合に於てのみ認めらるゝことゝ、自家用の家禽や家畜を使用するためにその生產の或る程度までの使用を許されてゐることです。しかし、市場に出す目的の下に飼育するそれらに使用した時間や食料の額は間違なく記錄して置かなければならないのです。その報告によつて區はその勞働時間に保證を與へるのですから。それからまた、所有物評價員といふ特別な役人によつて、家禽や家畜など各農業者の所有する財產について半年毎に財產目錄を作製されるのに準據してそれらのものを賣るに都合よくしてあります。また農業者が若し病氣その他の避くべからざることによつて生產物の減少を來した場合に於ては、作物檢査員によつて報告されてゐるので彼は勿論そのためにその收入を減ずるやうなことはありません。兎に角一方に於ては嚴重な代りに一方に於てはそれ相當の便宜乃至保護を與へてゐるのです」

「なる程ヨク行屆いてゐますね。それはさうと、この國での教育はどうです？」

「義務教育を受けない者は殆んどありません。大概の人が普通教育は修めてゐます」

「舊社會が我が新社會の組織を採用することについては、何も今あなたが懸念されるやうな程のことはありますまいよ。概して舊社會の人は食はず嫌ひが多いのでね」

と苦笑しながら紳士は一旦別れを告げた彼を再び椅子にすゝめて語り出した。それは

——要するに新制度に於ける各區民が國家の代理人となり委托人となり使用人となる。然しそれは舊社會に於ける大多數の人にとつて大なる變更では決してない。即ち舊社會に於ける官公吏その他會社若しくば社團等の社員など、更に言へば要するに給料若しくば賃金を受けて働きつゝあるものはこの範圍內のものである。舊社會の所謂下級勞働者もこの中に入るものだ。

で、そのために敢て社會に變動は起らないことは白明の理である。

新國家の組織に變更するに方つて起る變化は何か？　それは、社會の全員が國家の委托人であり代理人であり召使ひであるから財產の絕對所有權が廢止されてしまふ。

總ての人に平等の機會を與へるために、財產の絕對的な無條件的な所有權を廢することに、善美

な社會を建設する基礎工事である。

しかしそれだからとて社會的の地位は勿論その人の努力と能力とによつて自ら別のあることは勿論である。

斯うして達せられた經濟的の平等は政治的のそれと共に新社會の永久にもつ矜恃でなければならない——。

といふのであつた。

眞樂主義經典（九）

夫人道は人造なり、されば自然に行はるゝ處の天理とは格別なり、天理とは春は生じ秋は枯れ、火は燥けるに付き、水は卑に流る晝夜運動して萬古易らざる是なり。人道は日に夜に人力を盡し、保護して成る、故に天道の自然に任すれば、忽に廢れて行はれず、故に人道は、情欲の儘にする時は立ざるなり、譬ば漫々たる海上道なきが如きも、船道を定め是によらざれば岩にふるゝなり、道路も同じく己が思ふ儘にゆく時は、突當り言語も同じく思ふまゝに言葉を發する時は、忽爭を生ずるなり、是に仍て人道は、欲を押へ情を制し勸め〳〵て成る物なり、夫美食美服を欲するは、天性の自然、是をため是を忍びて家產の分內に隨はしむ、身體の安逸奢侈を願ふも又同じ、好む處の酒を控へ、安逸を戒め、欲する處の美食美服を押へ、分限の內を省て、有餘を生じ他に讓り向來に讓るべし、是を人道といふなり。

（二宮尊德）

第八編　ヘルバーアトウェルズの新ユウトピア

一　所在

狼星の遙かの彼方に、そして空間の遙か奥まつた所に吾等がユートピアの太陽である星は燃え輝いてゐる。

その星の周圍には幾つかの遊星――世人のいふそれとは異つた組織の――が廻轉してゐ、そしてそれらの遊星の間に、その姉妹星である月を伴つてユトウピアが存在するのである。

そこには大陸があり、島があり、海洋がある。別な富士山が別な横濱の上に美しく聳えてゐ、そして別なマーターホーンが別なティオデュールの氷地の亂雜さを瞰下してゐる。またそれには取るにも足らぬものからアルプスの奥の奥にある草花に至るまで凡ゆる種類の植物を發見するかも知れないほど、世に遊星と酷似してゐる。

私等がアルプス山中の或る高い峠の上にゐることを想象しなさい。

ドシ〳〵歩き廻つて植物の採集をした私達は、とある岩の間に腰を下して、晝飯を食べたり、イーヴォーンの葡萄酒を飲んだりして壯快を悉にした。そこからは、ベイドレットウの谿谷や、山側の蔭に私等の眼界から隱れ去らうとしてゐるヴィラや、フォンターナや、アイロウロなどのそれ〴〵の莊麗幽邃な趣が心ゆくまで瞰下される。

モウ遙か彼方の夕靄の中には燈火がまた〻いてゐる。

聊か可笑しな話であるが、私達は、小さな汽車が十二哩彼方のビアシーナを伊太利の方へ走つて行くのを見ながら山深く踏み入つて行く。

左手にはピオーラの向ふにルクマーニャーの峠があり、右手にはサン・ヂアコモがある。が、それはみな私達の踏んでゐる小經ぐらゐにしか見えない。

フト氣づくと、私達の周圍は驚くべき變化をしてゐる。「妙だね」と私が言へば、彼はその特質であらう所の神經質の面を輝かして「全く不思議だね」と云ふ。

しかし、それは、世界が變化したのではなくて、私達自身が空間の最も奥まつた所に來たのだ

ことを、見慣れない天の模様からして推察しずにはゐられない。

私達がルチエンドロ湖邊を縫つてぶらついてゐると、ユウトピアに於ける最初の人にはからず出會つた。かれは素より瑞西人ではないが、地球上に於ては恐らく然うだつたゞらうことを思はせずにはおかないほど似通つた點のあることを見遁すことが能きない。それは私が主張してゐた「近代ユートピアには地球上の人間と同一なものが住まなければならない」ことを充分に立證するものである。

私達は、靜寂といふよりは寧ろ寂寥であるこの山奥から、ユートピアの人里へと下つて行くにつれて、さつきまで私等の眼前に住んでゐた地球上の人々を聯想させるやうな顏の有ち主と會ふ。

と、彼は私に「僕は重ねて悲哀を嘗むるために來たのではない」と、さも不平らしくいふ。私はつとめて穩かに「だつてそれは僕のせいではないぢやないか」といつて苦笑した。

いま三十九才である彼の今日までの生活は、悲劇でもなければ壯快な冒險でもなく、苦しむよりも多く讀書し、實行するよりもヨリ多く苦しんだものであつた。

彼はユートピアには全然興味を失つたといつたやうな顏をして、その青灰色の眼で私を眺めた。そして、私にはテンで興味のないハムプステッド事件や、彼がその戀人とはじめて會つた場所であるといふフログナルの戀物語などを續けた。

お惚氣をタンと聞かされた私は、彼が「あの女は、こゝにゐる方が地球上にゐるよりもズツト幸福だらうしヨリよく評價されるだらうと思ふね」といつたのをきつかけに「勿論彼女がフルグナルで會つたと全く同じいんだらうよ……兎に角吾々が見に來た人々は、地球上のそれと同じ欠點をもつたもので、要はたゞその境遇の差があるばかりだと思ふよ、吾々はこれからモツト研究を進めて行かうぢやないか」といつて、私は彼を促してルチエンドロの湖邊をユートピアの世界の方へと行く。

二　自由生活

それはユートピア人の通有性とでも言へやうほど、彼等はなか〳〵の旅行好きらしい。そしてそこにはアノ不愉快な煙を吐く汽車はあるまい。まるで蜘蛛の網のやうに、山といはず野と言はず海底といはず縱横無盡に敷かれてゐるだらう。

そして、ユートピア人はそれによつて一時間に二三百哩以上の高速度で一の地點から他の地點へ

と漫遊するであらう。當然そこには遠距離といふ觀念がなくなるにちがひない。

そして、交通機關の設備をかりに列車によつて推察し想像しやう――。と、それは車内が廣く、そして端から端まで自由に出入が出來、休憩車があり、食堂車があり、その日の種々な消息が線路の傍の電線から自動的に印刷されてくる仕組があり、浴室車があり、圖書車があるといつた風に、立派過ぎる程の倶樂部といつたものだらう。そして當然それらには等級などの差別が撤廢されてゐるだらう。

然うした大軌道は、ユートピア人が遠く速く旅行しやうとする時に用ひらるゝもので、人々はそれによつてその遊星の地面の到る處を辷り行くだらうし、それらの軌道に合し或は岐れなどして、無數の小軌道系統や電車道などが、網狀に地上にひろがり、そして都會地方に於ては密に、田園山地などは次第に疎となつてゐるだらう。そして又平坦な道路がよく通じてゐ、荷車でも、自動車でも、自轉車でも、その他のいろんなものが樂々と通行してゐるだらう。

しかし、重い貨物を運搬するために渇した可哀さうな牛馬は見られないだらう。多分、馬は慰みのために乘るだけのものらしい。

要するに閑暇をもつ幸福なユウトピア人は、世界の到る處を、車馬道により、人道により、鐵道により、海路によつて旅行するだらうことを思はれる。

だから、ユウトピアの住民は地球のそれ以上に移動的で、單に旅行の民といふばかりではなくて移住の民なのである。

潑溂たるわれらの精神は、絶えず漂浪と航海とを夢みてゐた、人間の自由な靈魂は、未だ決して如何なる土地にも隷屬すべきものではなかつたのである。また、更新され擴大された自由を獲得しつゝある彼等には最早それ〴〵の土地に永く隷屬して生活する必要がなく、そしてそれが利益でもないのである。が、彼等の中にも、結局は戀のために又は家族のために或る土地に落ち着くものはないとは言へまいが、はじめは極めて廣汎に世界を觀察して歩くことを怠らないだらう。

然ういつた風に、人々に地方固着の足械が弛められてゐるからには、そこには必然的に生活の要素の清新な分布が行はれてゐるに違ひない。

例へば、家の一軒もない物寂しい、そして危險な土地の渺茫たる廣がりがあり、そしてそこには所謂工業的荒廢の不氣味な偉力をもつ採鑛地域と鎔鑛地域とがあつて、人々は、そこへ來て或る一定の時間を勞働し終ると、次の瞬間には疾走する汽車の中で身體を洗ひ着物を着更えなどして、特に子供等のために惠まれた美しい文明の地へと歸つて行くと言つたやうに――。

として、子供等は、然うした地方にゐれば課税さるゝ憂ひがないが、他の地方へ行けば税を課せらるゝだらう。といふのは、子供の發育期と教育期との間を能きるだけながく引延ばし、それと同時に春期發動期を後らすことは、ユートピアの政治家達が暑い刺激的な地方に養育さるゝ子供の率を減ずべく絶えず賢明な取締を施して行く上に於ける一つの適當な按排でなければならないから――。

いま、こゝに、比較的に都會化した本道があると假定する。私はそれを幅が百ヤードばかりでその兩側が丈の高い樹木に覆はれ、そして柔かな電燈の光りに照らされてゐるやうな夕暮の歩道として考へやう。

その中央に通じてゐる軌道の上も、明るく美しい夜の電車が殆んど音も立てずに辷り走る。燈をつけた自轉車乘りの行路を走り交ふさまは恰で螢のやう、またヘツトライトに路上の凡てを照り出されつゝ自轉車は快い唸りを立てゝ走り行きまた走り來る。

ユウトピア人は幾人も幾人も黄昏の中の私達を通り越した。また行交つた。互に「今晩は！」とお定りの挨拶を交しながら――。彼等は一寸私達の顔を覗き込みはするが、私達の登山服の粗末な見穿らしいものもユウトピアに於ける標準からすれば烈しい注意を惹くほどのものではなく、私達が希望してゐた通り少し不精な平凡な人間として見られてゐるらしい。

私達は街路樹の下をぶらついた。おぼろに動く人影を夢の幻影でも眺めるやうにぢつとして、そして互に一言も利かないで――。

私達が小さな通路に折れてロイスの激流にかゝる橋の袂から下の峽間道の橋の方へ急ぐころは、ファーカ嶺の遙か上には、月の昇りの豫兆である蒼白い光が漂つてゐた。

一組の戀人同志が甘い囁きを續けながら私達の傍を通り過ぎた。私達の眼は期せずして彼等の後を追つた。然うだ、ユウトピアに於ては戀愛の根本的自由が保持されてゐるのだ。

美しい鐘の音が二十二、何處か山ノ手あたりから鳴り渡つてオペラルブの方へ漂つて行く。私が彼に「あれは十時といふ意味なのかも知れないね」といふと、橋の欄干に凭れて朦ろに見ゆる河を見下してゐた彼は、恰度その時山嶺に這ひ上つて惜し氣なく銀箭を放つ月に河面の閃光をもつて躍り立つさまを眺めながら「僕等もあの二人のやうに若い戀人同士だつたのだが……」と感慨深い表情で心中の煩悶を私に訴へる。

私は久しい間――少くとも私には然う感ぜられた――彼の悶々の情を聞かされた。

お影でトンだ道草を食つた譯だ。いざもとへ戻らう。

ユウトピアに於ける交通機關としてはなほ幾多のものがあるだらう。いろんな種類のボートが河

には浮んでゐるだらうし、また多くの運河もあるだらう。そしてまた秀麗な眺めの湖水や池沼があつて、それらの間を遊覽船が往復してゐるだらうし、一時間に三十海里以上も走るやうな客船が際しない荒波の上に於ける一つの黒點となりながら長い航海を續くるだらう。が、それらも軈ては航空機に代用さるゝであらう。而も、音のせぬ航空機が遠くから人知れず山を越えて眼界に現はれ來て輕快に翱翔し、驚異に滿てる視線の彼方へと消え去ることは極めて近き未來であらう。

ユウトピア人は、それくらゐ若しくはそれ以上の自由さを以てその世界を飛び廻るだらう。移動が廣く且つ自由であるといふことは、たゞ單に生活の瑣事にかかはらないばかりではなからうが、彼等の自由の範圍はドコまでゞあり、また禁止された範圍はドコまでなんだらう?

ユウトピアに於ては、恐らく小役人の心理に或る注意を決して怠つてはゐないだらう。たとへば法官の手に於ても、社會公衆のために危險だと思惟されるやうな直接乃至間接の權能を下級警官の手に委ねるなどいつたことはしないだらうし、また、酒類釀造の取締を以て國家の財源とするやうな謬見も有たないだらう。そして彼等は他人の秘密を侵害するやうなことはなからうか、それでも、一定の免許店に於ける一般公衆の酒類使用額と大人一人に對するその販賣額とは明かに制限して、弱年者の誘惑――飲酒は重大の犯罪とするだらう。

移動的なユウトピア人のことだから、旅館および酒場の酒類販賣免許は鐵道や交通路と同じ取締の下にあるだらう。といふのは、旅館なるものは、外來客のために存在するものであるから――。で、そこには地球上に於けるやうな所謂地方官憲の酒類販賣許否權に相當するやうな何ものもないだらう。が、確かにその販賣を取締り、また同じく確かに個人の暴飲を取締るだらう。何しろ、大ヒラな酩酊は、單なる大言壯語と違つて公衆の風儀に關するから、その處罰はある峻嚴なものでなければなるまい。しかし國家がそれ以上には出ないだらう。

肉體上の幸福に就て、充分に彼等は理解してゐるだらう。そして聰明な彼等は自己の身體に嚴重な注意を加へないではゐまい。

一體、地球上に於ては酩酊者の半數以上は不愉快や鬱憤やをそれによつて紛らさうといつた卑劣なそして馬鹿らしいことをしてゐるのであるが、ユウトピアに於ては決してそんなことはなく、彼等は最も正しい分別を以て凡ての飲食物に節制をすることを怠らないだらう。

三　經濟生活

西に東に自由な移動の生活をなす彼等であり、廣大なそして複雜な國家であるからには、勞働と物品との分布を圓滑潤達ならしむるため、彼等は必然的に貨幣を所有するだらう。

圓形な金貨に、一ライオンを以て十二タロスの靑銅貨に代へると記銘してある。ユウトピアに於ても金屬元素の比例が地球上のそれと甚だしい逕庭のない限り、後者は恐らく補助貨であらうが、十二進法をもつてゐることは最もユウトピヤ的の氣分がするものである。

そのライオン金貨は實に立派な出來のもので、表面のへりにはその價格が精巧なそして鮮明な文字で書いてあり、その中央には多分ニュートンのだらう頭部が彫り出してある。そしてその裏面にはユウトピア貨幣の共通の女神が一人の子供と共に大きな書物の文句を讀んでゐる所謂美しい平和の女神を表はし、その向ふには幾つかの星と砂時計とを表はしてある。

これによつて、私達はユウトピアが一の國家であることを知り得られ、それと同時に、そこには最早王君の存在がないことの强い暗示を得るものである。

私は旅館の中で偶然にも豫想外の發見をした。それは一冊の雜誌を手にしたことである。

私はその雜誌に載つてゐる獨創家の意見を讀んだ。それは主としてユウトピアの習慣となつてゐる「一般の批評を受けやうために發表された提案」であつた。ユウトピアに於ては或る法律や慣例などの修正案がその實施に先ち、行政部から明細な考案が公衆の前に提出されることになつてゐる。と、いふのは、然うすることによつてその案の實施前に各項目に亙つて充分な批評を受け、それによつてヨリ吟味され精錬されて萬全を期し得るからである。

私は、こゝに於てユウトピアの地方行政に一通り眼を注がなければならない。

この十年ばかりの間に於ける科學工藝の發達を注意深く觀て來た人々は、私が、かなり廣大な地域に亙つて幾多の公共的供給物の統一を圖ることが既に充分の可能性を帶びてゐると同時に極めて望ましいことであるといふことに驚かないだらうが、家庭用および工業用のために、そして各市內また各市間の交通機關のために、熱や光や力などの供給が、共通の發生所から電氣によつて辨ぜらるゝに至るであらうし、今日の政治上および社會上の傾向から觀て、この電氣エネルギーなるものゝ供給は、その試驗時代をパスすると同時に、それは恰も現今の排水および給水の如く地方官廳の權限に歸するだらうと思惟される。といふよりは寧ろ地方官廳は總括的な地主だと言へるだらう。

また、ユウトピアに於ては、如何なる種類の私有物にしろ、力の自然的源泉、および自然的生產物——嚴密な意味に於ける——例へば石炭や水力などは皆たしかに地方當局に歸屬してゐるだらう。——當局は、最大の便宜と行政上の能率とを保證しやうために多分イングランドの半分位の地

域を支配するだらう――

そして、地方當局は、水力や、焜燒や、風や潮や、或はその他の有効な自然力によつて電氣を起し、その電氣の幾分をその當局の點燈用や他の公共事業用に當て、そして他の幾分かは、補助として、本道や、大鐵道や、旅館乃至その他の世界的交通機關を取締る中央政府に提供し、然うした殘りが、一定の均一な料金を支拂ふ普通の個人々々にも亦會社にも點燈用として、熱用として、機械用および工業用として分配されるだらう。

そしてこれらの事務の整理は、各地方當局相互間、および中央政府と地方當局間に、大規模の簿記を必要とするだらうけれども、それは、物理學的エネルギーの學位で至極便利に行はれるだらう。

また、地方官廳が中央政府に對して拂込む場合にも、同じくこのエネルギーの物理學的單位で勘定されそして記帳されまた話題に上されてゐるだらう。さらにまた地方當局の或るものは、他の官廳乃至個人に對して、その支拂は最早金本位の貨幣を以てせずして發生所のエネルギー單位の何千萬何百萬にも融通の利く便利な手形を以てすべく契約するものがないとも限らない。

――斯ういつた風にして、高低の變動がしつきりなしに來る貨幣で計算する代りにエネルギー單位で計算することが能き、そして事實に於て取引の觀念をすつかり除去することが出來るならば、それは經濟學上の難問の溜飲が下つてしまつたことになる。要するに私のユウトピアに於てはそれらが實現され、そして普通の物品の生產と分配とはこのエネルギーによつて計量されるのだが、私が驚異の眼を以て見た例の雜誌の論文もこれと同意見であつた。

そして、地方當局の役人は、賣れ口の良い有効なエネルギーの過剩量に對してエネルギー手形なるものを發行し得られ、またその地方に於いて前年度が生產されそして讓渡されたエネルギーの量を最大限度としてそれらの手形に對する支拂契約をもなし得ることになつてゐ、その發行は前の手形の消印さるゝのを待つて更に繰返さるることになつてゐるのである。

一體、ユウトピアのやうな、境界もなく地方的束縛などもない所謂移住の國にあつては、これらの地方團體の發行するエネルギー手形の價格は絕えず均一となるべき傾向をもつものだらう。といふのは、雇主の心はいつもエネルギーの低廉な地方へと動いて行くものだから――。從つて或る特別な時期に於けるエネルギー單位の何百萬かの價格は金貨に換算しても恐らく世界中ほゞ同一なものだらうと思ふ。

そして、經濟上の壓力の均等のとれた或る特別な日に於て、金貨とエネルギー手形との一定の比

例――金貨の各ライオンとその日にその金貨を以て買ひ得るエネルギー手形の正確な各ライオンとの間の――を公布することが提案されるだらう。

そして、今までの金貨は、中央政府に對しては直ちに法定貨幣を失ふものだ、またそれが一旦中央政府の手に入れば再び出ることはあるまい。そしてそれは事實上一時的の代用貨幣―程なく新本位のエネルギーに換算さるべき――となり、そして次第に普通の代用貨幣におき換えられるべきものである。だから、ライオンを以てする從前の計算額もまた日常生活の小貨幣の價格もその價格には聊かも影響を受けない譯のものである。

人民の凡てが世界國といふ大きな觀念を有つユウトピアに於ては、天から降つて來る隕石以外には毫も輸入がなくまた輸出もない。私はユウトピアの經濟學は社會學上の問題に適應した物理學であつて、地球上に於けるが如き不完全な心理學を基邊とした貿易論ではないと思ふのである。

それを一言にすれば、科學の進歩が人間に貢獻する物質的エネルギーのしつきりなしの增加量をドウしたら人類の一般的需要に最も有効に適應させ得るだらうかといふ要件を述ぶることなのである。

すなはち、人間の勞力や現在の原料もその點から取扱はれ、今日の貿易問題やそれに關聯する富の問題などはその經濟組織中の末葉のことに過ぎない。

そして私が讀んだ論文の要旨はザツと次のやうなものである。

――全世界の取引が今日までよつて來た所の、比較的小額な金貨を基礎とする一時的な組織は、無闇矢鱈に波動を起して眞の標準とはならない、事物や事業の名目および價格は、社會の眞の物理學的繁盛に對して何等の明白なそして單純な關係も有たない。また何百萬磅、何百萬弗、何百萬ライオンなどいつた單に空虛な希望の積に過ぎない名目上の財産は所有者に對して幻滅を與ふるばかりだといふのである。

ユウトピアには、經濟學といふ特殊な學問は存在しない。吾々が見做すべき諸問題は心理學の範圍内におかれてゐる。そして彼等は心理學を二分して、その一を個人に關する普通の心理學即ち純正生理學から確然と分離し難い一種の精神生理學とし、他の一を、個人と個人との間の關係を取扱ふところの心理學としてゐ、それが、人々相互間の反應や他の一切の人間關係について周到な研究をするのである。即ちそれは人間の集團に關する科學であり、各家族間に關するそれであり、隣人及び隣人の情に關するそれであり、また、仲間、協會、組合、秘密結社、宗教團體などに關するそれであり、公共の目的および交際に關するそれであり、人間の團體を結び合はすべき交際法ならびに共同決議に關するそれであり、そして政府および國家に關するそれなのである。

吾等の世界――地球上の――に於ては、「社會上の假設や、不合理な心理學や、いくつかの地理學的および物理學的推論などの絶望的な混亂のうちに成立してゐる「政治經濟學」や「經濟學」が、ユウトピアに於ては蓋し分類されまた分離するだらう。

そして、自然界に於ける凡ての有用なエネルギーを人類物質的目的に轉換するために組織づけた物理學的經濟學すなはち物理學的社會學の研究がされるだらうし、また、個人の自由による生殖と教育とをその主要目的とする社會組織に注意を拂ひ、謂い所の勞働問題としての經濟的研究も行はるゝだらう。そしてそれらは政治に携はる人々に對して次から次へと新しい有効な斷案を寄與しつゝあるだらう。

一體、國家なるものは個人を代表すると同じく種族を代表するものであるが、ユウトピアに於ては全く種族を代表してゐる。そしてそれを生物學的に見れば、種族なるものはその凡ての成功せる個體の最初からの試錬の堆積であると言へる。

ユウトピアの經濟的方面も、それは在來の經濟的經驗の堆積で、その個人的企業は、成功すると否とにかゝはらず不斷の試驗を續けて行くだらう。

とにかく、ユウトピアに於ては、國家それ自身が唯一の地主となつてゐ、國家または地方政府は、凡てのエネルギーの源を保有して、直接に、或は間接――借地人や農業者や差配人などによつて――に、これらの源を開發して人間の事業に欠くべからざるエネルギーとするのである。

また、國家若しくば國家の借地人たちは、食物も産出するだらうし、人間の精力も産み出すだらう。そして、石炭や電力の開發もやるだらう。また風力や潮力や水力などの利用によつて得るものは國家の權限となるであらう。が、國家は、讓渡や賃貸や默諾などの形式によつて、このエネルギーをその個所々々の住民に與へるであらう。

また、國家は、秩序を維持し、道路を修繕し、安價なそして有効な裁判をやり、安價で迅速な運送をやり、勞力の傳達や分配をやり、凡ゆる天産物を管理しそして貸しまたは與へ、健全な分娩や活潑な壯健な子孫に報酬を與へて保護し、公衆の健康に注意し、貨幣を鑄造し、度量の標準を定め、各種の研究に補助し、公益事業に賞金を與へ、また必要な場合に於ては批評家や著作家や出版物などにも補助金を與へ、或は各種の報道を集めおよびそれを配布などするだらう。

そして、國家の然うしたエネルギーの費は、太陽によつて海から吸ひ上げられた水が、降り落されて、陸から海へと歸つて行くそれのやうに、借地料や、特許料や、免許料となり、また運送および貨幣鑄造の利得となり、遺産相續税や、財産讓渡税や、遺贈税や、さては罰金などの形式をとつ

て再び政府の海へと歸つて行くであらう。

そして、我等人間の立場からして山や海がその中間に横はる居住地のために存在するそれのやうに、國家はそれを組成する個體のため即ち個人のために存在し、法律は自由そのものゝために存在し、世界なるものゝ存在理由は實驗や經驗や變化のためにあることがユウトピアの根本信念でなければならない。

かういつた風に、國家を以て凡てのエネルギーの發源とし、それと同時に最後の遺產受取人とする所のわがユウトピアに於ける私有財產の性質はドンなものだらうか？　と言へばそれは勿論その社會全般の事象に亘つて徹底的に行はれてゐる所の主旨と同じく凡ての人の徹底的自由でなければなるまい。

すなはち、勞苦、手腕、先見、勇氣等の所產である總ての正當な價値の現はれである財產の與ふる自由を各人がお互に保證するだらう。更に言へば、財產の所有そのものは、その人の個性の延長であり表現であるほどの種類のものなのである。

そして、彼の死後に遺された財產は、その相談人や遺產受取人と共に政府はそれを分ち取るだらうが、それ位だからユウトピアに於ける會社法は法律にも劣らぬほど完全なものと見なければなるまいと思ふことだけをこゝでは言つておく。

つぎに、國家は、各公民の子供やその正當な家族に對して、彼の死後に於ける生活の保證を附與するだらうし、彼がともあれ生きてゐる間は餘分な待遇をするだらう。そして、長命者に對しては老弱および病弱に對する保護の保證も與へるであらう。（要するにユウトピアに於ける經濟學の大眼目とするところは、各人にその剩餘金を以て社會をヨリ充實せしめ美化せしめやうために費さしむべく能ふ限りの誘導をなすことなのである。）

また、ユウトピアに於ては土地または自然物および天產物などの私有は許されずして、それは全然國家の財產でなければなるまい。そして土地は交通自由の權利に抵觸しない範圍内に於て會社または個人に貸し渡されるだらう。しかしながら、それには將來の未知の必要を考慮に入れて、恐らく五十年以上の期限での契約はしないだらう。

つぎに擧げなければならないことは、機械力の應用によつて勞働の必要を除きつゝあることゝ、人間の奴隸的屈從を全然除去しつゝあることゝである。

それは私がユウトピアに於ける第一夜を明した朝のことである。私は輕い昂奮を感じながら室内

の裝置に物珍らしい眼をなげてゐた。大變な綺麗さで清潔さで單純さである。それは決して安價なものを以て然うしたのではなく、能きるだけ整理の勞を節約するやうに設計されてあるので非常によく調和がとれてゐるのである。

私の好奇に輝く眼は壁にある六個のスキツチの側にある寒暖計を見出した。そこにある配電盤の上には簡單な説明書が附けてある。一つのスキツチは、柔かい油布のやうなもので蔽はれてゐる床を溫め、また一つのスキツチは、內部があちらこちら抵抗コイルを取つけた金屬で出來た布團を溫め、そしてその他のスキツチは、各々が別々の裝置で電流を送つて樣々な溫度で壁を溫めるやうになつてゐる。

そして、窓は開かないが天井の扇風機が音も立てずに迅速に空氣を室外へと扇ぎ出し、また他の空氣がトウピン氣坑から這入つて來るやうになつてゐ。部屋の引込んだ所には化粧部屋、浴室、洗面所などの設備があり、水を暖めたいと思ふ場合には電氣で熱した螺旋狀の管を通しさへすれば直ちに溫まるやうになつてゐる。

また貯藏機械からは、石鹼やタオルなどが把手を廻すことによつてそこに落ちて來、それを使ひ終つて小さな箱の中に落すと滑かな竪坑を辷り下る。そして、寢臺の傍には、壁の中に小さな時計が取付けてあつて、枕の上の手近なスキツチを押すと電燈が點くやうになつてゐる。室內は掃除機械で數度撫でることによつて充分にその目的を達せられるやうになつてゐ、戶枠や窓枠は圓形の金屬製で少しも隙間風が通はぬやうにしてある。また、部屋を去る前に寢台の脚の所にある把手を廻すと、直ちに寢台の骨組が垂直になり、夜具がブラ下つて日光に曝される。

私達は階下に下りた。と、矢張二階に於けるやうな、石鹼の藝術的努力の所產である究極の單純と絕美の外形的完成になる所謂絕美の單純に接した。

私達と共に食卓についた宿の主人は私達に直ぐ前の電熱珈琲壺の取扱ひ方を敎へた。そして私達が珈琲と牛乳とを飲んで卷パンに舌皷をうつ樣や服裝などを眺めてゐた色の淺黑い小柄な彼は一言二言のお定まりの挨拶をすると沈默してしまつた。

そして、私達が「素的に良い珈琲ですね」「パンも素的に美味しいんですね」などゝいふお世辭に微笑を以て應へてゐたが、そこに入つて來た少女——娘の肩を撫でながら「あなた方は多分遠くからいらつしやつたんですね?」といふ。私達が「えゝ然うです」「それでお國が非常に珍らしいんですよ」などゝいふと、彼は解せない表情をして「山がですか? そしてドコからいらつしつたのです?」といふ。で、私が「いゝえ山ばかりではありません。私どもは別な世界から來たんです

よ」といふと彼は「へえ、別な世界ですつて?」と目を丸くする。そして私が「えゝ、別な世界です、遠い空間の底の……」といふと益々怪訝な顔をして私達を見つめてゐたが「こゝに宿帳がありますから……」といつて一冊の帳薄とペンとインクとそれから今墨を塗つたばかりの版石とを私達の前においた。

私達は主人に教はつて宿帳に記入し印を押してそれを差出すと、私達に指洗盆をすゝめて私達の記帳に好奇の眼を落した。

私たちは程なくその宿を後にした。餘程行つて私が振返ると主人と一人の上品な服裝をした婦人とがその旅館の外に立つて眺めてゐた。聊か不審げに——。

私達は冴えた朝の快さに浸りながらシエーレネン峽道の方へと向つて行つた。——とする。

數多の感じの良い小家屋が、谿の斜面に添ひ、共同の炊事場や食堂などを中央にして、それは恰度分科大學の群のやうに建てられてゐる。そして、そこには軌道のついた半道に添ふて二條の通路が通じてゐる。私達は電車にも乘らずに本道をテクることにした。何故なら、電車に乘ることによつて促され易い説明の煩はしさを延期しやうために——。そしてまたユウトピアの工學の一斑を觀やうために——。

いま軌道について觀る。それから感ぜしめらるゝことは、その設計者が教養ある人であり、藝術家的技師であつて、それは恰度最高の技師たる造物主が、植物の莖を作り動物の關節や身振をつくつたやうにその軌條や桁やその他の各部をつくつたに違ひなく、そしてそれは大成功の設計でなければならない。また、なほ進んでは多分美術學生が新らしい電車を考案すべく競爭してゐるだらうし、また、近代の冶金學や電氣工學に通ずるそれを見出すことも能きるに違ひない。

四　社會政策

ユウトピアに於ては、恐らく　總べての住民が、相當な家に起居し、充分に營養物を攝取してヨク健康を保持し、相當に清潔にし、また、衛生的な衣服を纏ふべきことを主張するだらうし、その主張の上に勞農法が確立されるに違ひない。そして、法律は、つとめて民衆的で、通俗な言葉を以て人間生活の標準を規定して居るだらう。

ドンな家屋でも、それがユウトピアの高い標準——健康と便宜との——に抵觸する場合には、國

家は直ちにそれを取壊し――公共の記念物は除く――て、それに要した勞銀をその持主に支拂はせるだらう。また、過度に混み合ひ、或は甚だしく穢がれてゐる場合には、國家は、直接または間接に、或る有效な方法によつてそれを沒收し適當な方法によつてその廓淸を圖るだらう。

また、ドンな職業に携はさる住民でもが、無作法な服裝をしたり、ボロ〳〵着物や汚れたそれを纏つたり、公衆の健康を害するやうなことをしたり、露天に眠つたり、少しでもその職業を怠にするやうな者は國家から訓戒を受けねばならない。

そして、彼が、働くことが出來るものでありまたその意志があるとすれば、國家は彼に職業を授け、またはその名を記錄して置いて職業のみつかるまでの生活費を貸してやり、また病氣の場合には彼に保護を與へなどするだらう。

そして、又、民間事業の場合には、彼を宿泊させ、彼に食物を與へ、或はまた相應な生活を維持するに足る最低賃銀を支給――自ら臨時の雇主となつて――するだらう。かういつた風に、國家は、經濟的競爭の一面に於ては臨時の勞役雇主となることだらう。

そして、政府が與ふるところの職業は、勿論骨の折れるものだとしてそれは決して殘酷なものでもなく耐え難いものでもあるまい。また、それは、その人の技術と能力とによつて然るべきものに

就くことが能きるに違ひない。さらに、それは、ヨ〻經濟界の壓迫を救ひ得るだらう。

國家は、然うして職業を與ふることが、恰かも公民の權利を與ふるが如くであり、人民はさながら普通の企業に於ける株主が株券を受くるが如くにその職業を受け取るだらう。が、國家は當然の制として、彼がその才能によつて獨立の生計を維持し妻子を養ふに足るだけの收入を擧げ得るに至らなければ結婚を許可しないだらう。また、老衰の人には恩給を與へ、それらの人には特に客室を設けてそこで恩給を有效に費し得るやうにするにちがひない。

然しながら、お人よしの無能力者や、意久地なしや、愚鈍なものや、病弱な貧乏人などもかなり多い。また、白痴や、狂人や、無賴漢や、飲んだくれや、或る不潔な遺傳性の疾患に感染したものなどがないではなく、そしてそれらの者はみな他人の世界を害するもので、彼等は親となることは出來るにしても、その大多數は一般の社會から隔離するよりなく、ために彼等は所謂社會外科學の診療を受けねばならないのである。そして その結果かれ等は一般人の有つべき社會的自由をもち得ない。と同時に彼等の妻子も社會の除け者とされ、普通人のやうに自由に外出することすら能きないのである。

また、亂暴者や、泥棒や、詐欺師なども居るが、それはその事實の暴露と同時に世界の自由生活から姿を消さなければならないし、また ドンな男でも女でもが、その疾病や、劣惡性、や狂氣また

はその他の異狀が確認されたり、或ひは數回も犯罪や不行跡の重さなる場合にも然うした制裁を受けなければならない。

勿論、初犯者若しくは二十五才以下の總べての犯罪者に對しては、愼重な敎誨的な取扱をなされるだらう。すなはち敎戒學校敎戒大學などいつたものを僻遠の地に而も墻壁を廻ぐらし普通の人々の出入を禁じて設け邪惡な傾向を棄てゝ人道の世界に生きるべく敎育し、昨日までの罪人が今日は普通の市民として社會に出されることだらう。そして健全な社會の人々は彼を排斥などは決してしないだらう。

そして、そこには死刑も行はれまいし窒息室もないだらう。勿論、不具兒や、畸形兒や、惡病兒などは殺すだらうけれども、その他のものに對しては國家が當然責任を負ふべきものとしてゐるだらう。何故なら、罪惡や惡生活は國家の病弊の現はれで、總てのそれが結局は社會の罪惡となるものだから——。

で、或る離れ島を選んで罪人を種別々々によつて別々の天地を與へられるであらう。——彼等に能きるだけの自由を與へた。そして都合によつてはそれらの島監獄を島僧院、島尼院とまでするかも知れない。でないまでも、かれらはその別天地で組織的な社會を構成してゐるだらう。たとへば、波止場には宏壯な建物の稅關があり、丘の眺めの良いところにはホテルが群り建てられてあり。また便利の良い場所に電話交換局があり、無料報道局があり、倶樂部があり、取引所があり、公衆の富籤を行ふ所があり、修業の足りない紳士のための商業學校があるといつた風に——。

それは然うと、ユウトピアに於ては、所謂貧民窟といつた所に質素なそれでゐて氣持の良いそして料金の低廉な旅館を設けられてあるために、係累のない連中はそこで比較的呑氣な生活をし、病氣や、死亡や、傷害や、老弱などに對して少額ながら保險料を支拂ひ、また衣服などの豫備費を貯へることも出來るだらう。勿論、多少は自己の自由を犧牲にしなければならないだらうが——。

また、國民の誰もに對して種族の未來の能ふ限り幸福なるべく希求するかの國に於ては、如何なる健全な地方に於てもが、國中の各方面の經濟狀態が、恰も氣象狀態のそれの如くに不斷の注意をされ、そして勞働局や他の公務所と同じ建物內にある郵便局の壁には勞力の必要な場所を示したその周圍三百哩以內の地圖を日每に揭げられ、役人が求職者の姓名を記帳しその身柄を證明して、その選定の目的地までの無料旅行券と必要な宿泊のための利札とを附與する。かういつた風に勞力の過剩な地方からその不足の地方へと年に一二回も自由に場所を變更し得ることはユウトピア人の普遍的特權の一つなのである。

しかしながら、その能力に適當な職業が世界の何處にもないとは言へまいが、凡ての人が所謂ユウトピア的方針の下にかなり良く教育されてゐるだらう。で、如何ともならない白痴でもない限りは無學文盲といふものはなく、また實際勞働に從事する者ならば如何なる職業に於ても、それは恰度飼ひ馴された家畜のやうに恐らく適應性を欠いだものはないだらう。從つて勞働組合もその人の活動には制限を加へないだらうから、當然、世界が彼の組合といつたやうになるだらう。

なほそれでも職業を發見し得ない場合があるかも知れない。それは人口が企業の增加よりも急激に增加するかまたは大企業の完成により若しくは新しい有效な勞力節減機の運轉によつて世界中の職業が減少するかに基因することは勿論である。けれども、凡庸な劣等な人間が過剩にならない限りはうまく難關をきりぬけるだらう。しかし、その豫防としては、賢明なる結婚法によつて人口增加の奬勵と制限とをその必要に應じて行ふだけの決意と能力とがあり。また世界に勞力過剩を來した場合には、科學に浸透し發明力に富んだユウトピアのことだから當然そこには新事業を起すに違ひない。

そして、世界の到る處に設けられた勞力交換所——勞働局——が、經濟的需要の波動的壓迫と勞力の過剩地からその不足地へと移動する勞働者とを報告するだらう。その過剩が世界的である場合には、勞働日を減じて過剩を吸收するか、若しくば特別なそして持續的な官營事業を起して最低の賃銀を支拂つて勞働の潮の干滿に應じ、そしてそれらの事業を緩漫にも迅速にも進め得るやうにするであらう。しかし健全な結婚法と出產法とを以てすれば、一時的な例外を除いたならば、世界の資力と創造力とに然うした要求をするまでもあるまいが——。

つぎに、人類社會は日々その集合的努力によつて支持されてゐ、そして種族全體に於けると同じく一個人の場合に於ても不斷の努力がなければ健康も幸福も得られないし、人間の常習的懶惰は世界の煩ひとなり彼自身の避け得られぬ不幸となるとはいへ、生活費を支拂ひ、病氣や老弱に關する保險料を支拂つて行けるだけの財產をもつものなら遊んでゐやうとて差支ない。ユウトピアは道德上の强制は決してしない。

だから、そこには遊民がかなりあるだらうけれども、然うした大資產の相續は稀なものであり、自然の數として、また國家の規定の運用からして程なく消滅すべきものなのである。

また直に公民の世界であるユウトピアに於ては、その誰もの現狀を迅速にそして確實に認知するための方法として、彼等の移動を記錄し、結婚、出產、犯罪、死亡などいつた資料的な事實を登錄しまたは削除するなどの極めて有效な大仕掛な索引をつくり、さらに、指紋などの肉體的特質およ

び資料的價値のあるそれによる分類法によつて個々別々な數字の所謂科學的姓名を與へられ、それによつて見出しをつけられるだらう。そして、姓名により、職業名により、病名により、罪名によりなどして排列されてゐるにちがひない。なほ、それらの索引カードは恐らく透明であり、必要な場合には隨時に寫眞謄本を造り得るやうに、またその人の最近に報告した地名の札が滑り込むやうに出來てゐるだらう。

それには、指紋や番號の對照に携はつてゐる支局から來る出産、死亡、旅館への到着、郵便局への證明書の出願、旅行券や乘車券の下附、罪の判決、結婚、國家の施與に對する出願などいつた報告が絶えず屆けられるのを整理して索引をつくるなどの中央事務局は忙殺——晝夜ブツ通しで——されてゐるだらう。

そして、その公民が死ねば愈々最後の登記——年齢、死因、火葬の場所などの——を濟した彼のカードは死者の記錄の次第に增加する陳列館へと移されるのである。

五　結婚法

私はこゝでユウトピアの婦人について述べなければならない。

その男子と同じく飽くまで自由であるべきは勿論であるが、それは人格的にいふ所の平等でなければならぬため、事實上に於ては決して然うではないかもしれない。すなはち、彼女等が、經濟上の低劣を脱しない限り、また男子と同じき能率を擧げ得ない限りは、その法律上および工藝上の對立は不可能でなければならない。そして女は善かれ惡かれ男に隨つてその浮沈を共にすべきものとなつてゐる。

しかし、わがユウトピアに於ては、母たることが既に國家に對する最大の奉仕であり、またそれは生活安定の當然の權利だとして能ふ限り兩性間の事物を平等にしてゐるのに違ひない。

そして、國家は、母たることの禁止權と許可權とを行使すべきものであるため、既に母であり、又は母になりつゝある婦人は、警官や、判官や、王や、國教會の監督や、直轄學校の教授や、國家が扶養する他の如何なる人とも同樣に、最低以上の俸給と、補助と、自由と、尊敬とを與へらるべき資格がなければならない。

從つて、國家は正當な許可の下に於ての母であり、また母になりつゝあり、更に又母になりさうな婦人に對しては、勞苦および生活上の懸念をなくするために、一定の俸給を保證するに違ひない。

そしてまた、嬰兒の出産に對しては、一定の慰勞金を與へ、その子供が肉體的にも精神的にも最低標準以上の發達をした場合には、その子供に獨立的自由を確保するだけの金額を或時期々々に支給し續けるだらう。そしてまた、國家は、その子供が肉體的若しくば精神的に或最低資格以上に頭角を表した場合には、右の俸給以外に報酬を與へるだらう。

――かういつた風に、所謂有爲な母性を有利な職業としこの實際化に盡力するに違ひない。さらにまた、それと關聯して、既婚婦人および養育すべき使命をもつ親の產業的使命を禁ずるだらう。但しその適當な代人を傭ひ入れるまで――。

私はつぎにユウトピアの結婚法について述べなければならない。

それがみな公然と行はるべきことは勿論であるが、婚約の當事者は、健康と身分とに於て充分準備が能きてゐなければならない。すなはち特殊の遺傳病にかゝつてゐてはならないし、男は二十六歲または二十七歲以上女は二十一歲以上で、ある最低以上の教育を受け、そして活動的であり、男はある最低俸給以上の純益を收め、また負債のあるものはそれを返濟し終つた後でなければならないのである。

かれ及びかの女は、先づ公務所へその共同の意志を傳へなければならない。そして彼等は、その配偶者の年齡と、過去に於ける結婚の有無と、法律上に定められた疾病の有無と、子女の有無と、原籍と、犯罪の有無と、財產讓渡登錄とを記載した索引カードの寫しを與へられる。そして、配偶者の熟慮乃至取消とのために、そこには適當な期間が設けられ、愈々當事者の意志が確定すれば、直接に地方公吏へその旨を告げ、その登記簿に必要な記入をされて彼等は事實上の夫婦となるのである。

これから條件を無視して自由結婚をなさうとするものに對しては、そこに私生兒が生れない限りは敢て干涉しないだらうけれども、もし私生兒の生れた場合に於ては、その兩親に對して、扶養義務、教育義務その他凡てのそれを課し、更に生命保險の拂込を命じてその子女に對する保證の確實を期するにちがひない。しかしながら、個人の續義乃至貞操等に對しては敢て干涉しまい。

若し、妻の不義が實證された場合には彼女は離緣される。そして、その夫および國家は彼女の產んだ子女の扶養義務を免かれる。萬一、夫か妻の不品行を看過するときは彼はその連累者と見做され、また離婚される妻は私犯者としてゞなく多分公犯者として取扱はれるだらう。

それに反して、夫の不行狀の場合は、國家のために結婚してゐる彼女の當然の權利として國家の

援助を求め得られ、彼女の意志次第で離別し得らるゝのである。

夫にしろ妻にしろ同じであるが、その一方が本統の夫婦生活――伴侶の根本義務――を履行しない場合に於ては、その他方は當然國家の扶助を受くべき權利が與へられてゐる。但し、その者が飲酒に耽り又は懶惰に流れ、或ひは重大な罪惡を犯し若しくば暴行などした場合はその資格を剝奪されるにちがひない。

なほ、次第のためにのみ兩性間の干渉を行ふユウトピアに於ては、純然たる道德的立場からして、子供のない夫婦の操行に制限を加へ、またその夫婦生活に制限を附して、例へば三年、四年、若しくは五年を以て滿期とするといつた風にするだらう。但し、その夫妻が再婚し得べき權利は少しも失はずに――

また、嫡子の生存と安泰とを圖るためにその母親に俸給を與ふることを怠らないユウトピアに於ては、その父親の精力と收入との幾分かをその子に分配せしめて父親の父性を養ふに違ひない。兩性固有の愛兒心を培養せずにおくことは甚だしい不經濟だから――そして然うした不經濟さを敢てしまいから――。

六　社會生活

私達は、所謂山紫水明の湖水に面した頗る感じの良い旅館兼下宿屋――經營の一部分は國家がする――に投宿して、すつかりユウトピア人になりすまして一日五時間づゝ仕事に從事してゐるのであるが、そこの宿泊料は至つて低廉な、それでゐてなか〳〵設備の完全なところである。

それをかい摘んで說明しやうなら、それは四角な庭をつくるやうに建てられ、高さは五十呎ぐらゐで、一階から五階ぐらゐまでが寢室になつてゐる。その小寢室の數は恐らく幾百を以て算ふる程で、室內の設備も甚だよく、家具も優雅な均衡をとつて小じんまりと整つてゐ、浴槽附きの化粧部屋までである。

室の窓は、方庭に面し若しくばその反對の側に向いてゐて、戶口は人工光線で照した廊下に通じてゐる。そしてその廊下には一種のコルク製の敷物が敷かれ、若しくば何も敷いてないが、昇降用の階段が取りつけられてある。

下層は主として、厨房や、事務所や、食堂や、喫煙室や、集會室や、理髮室や、圖書室などで、

ベンチ附の柱廊が方庭の周圍に通じてゐて、その中央は芝生となつてゐ、その中央には眠れる小兒の銅像が、睡蓮の生へた水盤と噴水との上に立つてゐる。

そして、その旅館の建築材料は、光澤のない象牙色の人造石で、その建物から受くる感じは、單純さと、自然さと、優雅さで、豐富な花をもつ二三本の黄薔薇を這はしたアーチ形の門が一入の趣味を添る。そしてユウトピアの慣はとして日出前に仕事をはじめるので、私はいつも早起するが、曉天に紅のピラートウス山の眺めは得も言はれない。

そのルセルンには、かういつた方庭式の建築が普く行はれてゐるので、大商店など——小店は旅館の柱廊内にある——に行くにしても、町の端から端へ行くにしても、大道へは一歩も踏み出さないで、掩廊や柱廊に沿つて行くことが能きる。

そのくらゐに凡てが秩序だつてゐるのだから、それは寧ろ當然過ぎることだらうが、ユウトピアが僕婢のない世界だことは特筆しなければならない。

ホテルがあり、倶樂部があり、また一切の協同機關があるユウトピアの事だから、その家族の自活は地球上のそれよりも遙かにはるかに節減されてゐることは勿論である。

ホテルに住まない者は、普通、倶樂部に住んでゐる。つまり、趣味を同じくする男女が相寄つて住宅的倶樂部を組織してゐるのであるが、かなり裕福なものは大低こういつた倶樂部の二つ三つに入つてゐる。

倶樂部には、普通の調度附の寢室の外に、少しこつた趣きの部屋もあるので、望みのものを借り受けて自分の嗜好に適した道具を備へつけることが出來る。だから、普通、婦人應接室、私用圖書室および書齋、私用庭園などをもつてゐる。

そして、ユウトピアでは、個人の厨房は殆んど見られないし、商業や個人的の業務はその居宅で行はないこともないが、大抵、繁盛な商業區にある特別な出張所に於て營んでゐる。また、公園や、幼稚園や、遊戯場や、兒童の遊園などいつたものは、凡てが倶樂部の家庭に於ける特色を見せてゐる。電車道や自轉車道さては急速車道などの設けられた大道路の幾筋かゞ市の中央部に集てゐ、そこには、官衙の群が二三の劇場や大商店と相接して建つてゐる。かの地に於ける急速鐵道の中心も勿論そこである。

その市外には、數多の邸宅と廣い野原とがある。そしてそれらの邸宅は、みな、中央エネルギー配給所から、燈火や熱の供給を受け、水道の便があり、醫者、商店、その他の必要な所には電話が通じてゐるなどは勿論である。そしてそれは言ふまでもなく裕福な田園愛好者の別莊といつたやう

なものである。

また、交通機關の發達してゐる賜として、農業者でも、集會所や倶樂部――勿論市内の――に住居してゐて日中は辨當を携へて仕事に出かけてゐるが、そこには小作人はなく、耕作は、農民組合すなはち互選された支配人の下にある民本的な無限責任會社によつて營まれ、國家に對しては、一定の地代を支拂はずしてその生産物の一部を納附するものだらう。そして會社は年々懶惰な社員を淘汰してヨリ能率を擧ぐべくするに違ひない。

そして耕作能率の最低標準は地代の最低價格の決定に據るもので、多分それは審査によつて定め居られるだらう。また、生活標準に關する一般の方則が、この組合――農民にも適用されることはいふまでもない。

勿論これらの共同作業は社會的には、農業および園藝上の生産に對する最善の方法であるが、家畜の飼養、種子の取入れ、農具の仕入れおよび貸附農事の研究乃至實驗などの事業は、大會社、都市、若しくば國家が直接管理するなどの最善な方法を講じてゐるにちがひない。

私達の働いてゐる工場は、小供向きの小さな木製玩具の製造場で、私たちは、機械で粗製されたもの〻仕上げをする木彫工であるが、私等は時間で仕事すると同時にある一定數の玩具を仕上ぐべく責任づけられてゐる。そして、この特殊な工業に於ける勞資の爭點に關する規定が後部の壁に掲げられてあるが、それは、賃銀勞働者總會が雇主と協議の上に定めたものである。(この總會は憲政上の一勢力となつてゐる)聊かこ〻に特筆すべきことは、雇主が技師としての知識と技術とをもつてゐ、よく雇人を敎へ導くことである。私たちは毎日正午を以て勤務時間の終りとなるのでブラブラと湖畔の安宿へと歸るのである。

私達がユウトピアで會ふ人見る人の總てが、壯健でありよく訓練されてゐることを感じずにはゐられない。肥滿過ぎる人や、禿頭の人や、白髮の人や、腰の屈つた人など――そんな年配にもかゝはらず――は殆んどなく、すべての人の容姿が整つてゐるので、見るからに快活であり活潑である。

衣服は、一般に優雅で、婦人のそれはイタリー十五世紀のそれを想ひ起させずにはをかない。貧民ですら小綺麗なよく似合つたものをつけてゐる。そして、頭髮はいたつて質素ではあるが、それでゐて入念に頗る美しく整へられてゐ、極めて陽の强い時でなければ男女とも帽子を被ることがない。勿論、服裝上に强制は行はないだらうため、それは種々の變化をみせてゐるにしても、地球上

の粗野な競爭的文明にみるやうな騷々しい所謂爭鬪的外觀などはない。

私はこゝに人類の大集會場といつた大都市に於ける教育的方面のことを記さう。そこには大きな大學――男女共學の――があつて、數千の教授と數萬の學生とがゐ、思索と研究とを發表する大雜誌や、哲學や科學に關する堂々たる書籍や、文學上の立派な作物などが發行されるだらう。そして、すてきに大きな圖書館があり、大組織の博物館があり、またあらゆる藝術が集まつてゐて、自からなる靈妙な雰圍氣が構成されてゐるだらう。

私たちは、いま、散歩から歸つた。また彼から「犬の子一匹いないユウトピアは大きらひだ」などゝさん〳〵な愚痴を聞かされたその散歩から――。（まつたく私達は到着の日に驢馬を一頭見たゞけで他の動物は見たことがないが、それは徹底的衞生を實行するために全滅さしたものらしい）

眞樂主義經典（一）

大道は譬ば水の如し。善く世の中を潤澤して、滯らざる物なり、然る尊き大道も書に筆して書物と爲す、時は世の中を潤澤する事なく世の中の用に立つ事なし、譬ば水の氷りたるが如し、元水には相違なしといへども少しも潤澤せず、水の用はなさぬなり、而して書物の註釋と云物は又氷に氷柱の下りたるが如く、氷の解て又氷柱と成しに同じ、世の中を潤澤せず、水の用を爲さぬは矢張同樣なり、扨此氷となりたる、經書を世上の用に立んには胸中の溫氣を以て能く解して元の水として用ひざれば世の潤澤にはならず、實に無益の物なり。氷を解すべき溫氣胸中になくして氷の儘にて用ひて水の用をなす物と思ふは愚の至なり、世の中神儒佛の學者有て世の中の用に立たぬは是が爲なり、能思ふべし、故に我が教は實行を尊む、夫經文と云ひ經書と云其經と云は元機の立絲の事なり、されば、竪絲ばかりにては用をなさず橫にて實行を織込て、初めて用をなす物なり、實行を織らず、只竪のみにては益なき事、辯を待たずして明かなり。（二宮尊德）

第九編　吾が徒の理想郷建設計畫

一　吾が徒が鳥海山麓に建設せんとする理想郷建設趣意書

醉生夢死が人類の本領ならば止む。苟も幸福な生活を遂げて、人生と國家社會との進歩に寄與しやうとするならば、その住所改善は最大急務である。

幸福な生活をしたいと云ふ事は、凡ての人の希望であるけれども、之を實現し得る機會は誠に少ない。微力なる吾々は、日夜營々として額に汗しても、尙且つ滋味ある食物、暖き衣服を得るのは中々困難である。況して心地よき家に住み、機嫌よき隣人と心の奥底を打ち明けて何の不足もなく暮らすと云ふ事は、殆んど絶望かと疑はれる程の難事である。

けれども難事必ずしも不可能事ではない。適當の方法と資金とを備へ、適當な人と糾合し、其團結の偉大なる力を以て、一定の方針の下に進めば、居心地よき村を作り、延いて家々の物質的及精神的生活に愉快なる一大革命を成し遂げる事が出來る。吾等は此信念の下に東北＝秋田縣下に理想的な模範自治農村を建設せんとするのである。理想郷の建設は、今まで東西幾多の人と處とに於て試みられた。そして其悉くが失敗の歴史を有つてゐる。世人が吾等の此の計畫をも亦之と同視せぬとも限らないであらう。然しながら吾等の計畫は決して左樣な甘い、空想的な、超現代的なものでは無い。

吾等は、現在我國民の生活は寸毫も悲觀せぬ。否其中から反つて幾多の光明點を發見して、此光明を拾ひ集めた焦點に生活しやうとするのである。

而も其の焦點に些少の修正添加を試みて、系統的の不斷の進歩の上に生活しやうとするのである。

此進歩せる生活の基礎を築く地盤としては、惡しき舊慣の羈束の無い——生活の基本たる廣き土地を得る事の出來る東北地方に如くは無い。吾等が鳥海山麓無人の曠野と雄物川畔の荒野とを擇ばんとするのは此の爲めである。

吾等は此村に於て住民の幸福の爲めに、あらゆる生産の増大を計り、其の得る收入によつてあらゆる社會的施設を試み、人類が如何ほどの程度まで協力し得るや、その協同の結果が如何ほど偉大なる幸福を齎すものたるやを、事實に證明して見たいと思ふ。

吾等は既に必要なる一部の金と人とを得た。此上は更らに助成の人と、資金と、理解ある住民との多數を求めるのである。願くは滿天下の同情を得んことを。

神武天皇紀元二千五百八十三年

大正十二年夏

理想郷建設＝明星自治團

創立主唱者　石田傳吉　井田俊二

時國理一　佐々木虎吉

大官仁忠　大和重太郎

青山兵一　市施軍策

佐藤金治郎　柳榮

麻布七藏　石田銀

萩場茂　白岩春一

明星自治團の歌

（一）正義の光り力なく、
闇、人の世に迫るとき、
天地照らすは何者ぞ、

（二）混沌として人眠り、
希望の空に烱々と、
人道示すは何者ぞ、

（三）此の明星の使命こそ、
踏むべき道ぞ努めよや、
自治の百花は地に匂ふ、

西山の端に春きて、
孤星の光り爛々と、
宵の明星ならざるか。
朝日のさすに未だ遠き、
吾れ先づ獨り覺め起ちて、
曉の明星ならざるか。
吾が團員が一致して、
理想の星は闇に照り、
偕樂郷を打建てよ。

△報知新聞（大正十二年六月廿六日）拔萃記事

鳥海山麓の新しき村へ

縣下篤農家の盛んな後援振り

齋藤代議士から土地の選定

縣下鳥海山麓に石田傳吉氏が理想の村建設計劃はその後着々進行し縣下の有力な篤農家は石田氏計畫のために活動しつゝあるが今回代議士齋藤宇一郎氏から公設市場監督佐々木氏宛に次の様な意味の手紙が到着した『理想の村建設として鳥海山麓に三百町歩の土地選定方の依頼あるも苟し健全なる一農村を建設するとせば三百町歩にてはその區域餘りに狹小に過ぎると思ふ況や百町歩の相川地内於てはとても秋田縣の模範村を建設する事は出來るものではない農村としては田畑森林牛馬飼料及肥料採取地などを見込む時は少くとも五六百町歩の地積が必要であるこれを鳥海山麓に求むればば仙北郡院内村冬師山牧場附近即ち平澤驛から東に向つて一里の處に五六百町歩の官有地がありこの土地は拂下可能なる故この地に新しき村を建設するのは最も適當であらうと思ふ』といふ意味のがあつたので佐々木氏はこの旨石田氏に報知したとのことで或はこの地に決定する運びに至るやも知れぬと

二　理想鄕建設＝明星自治團々則

第一章　總　則

第一條　本團ハ眞樂主義（新報德主義又ハ全體主義トモ云フ）基ヅキ相互扶助ノ實ヲ擧ゲ理想ノ自治農村ヲ建設スルヲ以テ目的トス

第二條　前條ノ目的ヲ完成スル爲メ事業ヲ五部ニ分チ之レガ遂行ヲ期ス

第三條　本團ハ左ノ三種ノ團員ニ依リテ成立ス

一、正　團　員

一、準　團　員

一、賛助團員

第四條　本團ノ要スル一切ノ經費ハ正團員ノ出資及事業上ヨリ得ル收入其他準團員、贊助團員ソノ他ノ會費寄附金ニ依ツテ支辨ス

第五條　本團ノ存立期間ヲ九十九ケ年トシ滿期ニ至リ總會ノ決議ヲ以テ更ニ繼續ノ方法ヲ定ム

第二章　事　業

第七條本團ノ目的ヲ達成スルタメ事業ヲ左ノ五部ニ分チ實行スルモノトス

一、開村＝創業部　ハ團有ノ原野ヲ開墾シ農業、園藝、畜産ヲ主業トシ工業ヲ副業トシテ家ト村トノ富ヲ充實スルニ務メ物質及精神ノ兩面ヨリ自治體トシテノ完成ヲ期スルモノトス

二、圖書出版部　ハ本團及團員ノ研究シ著作シタル圖書ヲ發行シテ地方自治ノ革新ノタメ貢獻センコトヲ期ス、又本團ノ機關雜誌『建設』ノ編輯發行をナスモノトス

三、講演宣傳部　ハ本團ノ主旨主張及本團ノ研究シタル地方革新事項ヲ廣ク各地ニ宣傳スルモノトス

又町村及各種團體ノ請求アル場合ニハ本團ノ講師ヲ派遣スルコト

四、町村是調査部　ハ一般町村ノ囑託ヲ受ケタルトキ町村是ノ調査立案又ハ廣ク町村經營上ノ指導ニ應ズルモノトス

五、公衆娯樂部　ハ農村娯樂問題ヲ研究スルト共ニ清新堅實なる娯樂隊ヲ組織シテ一般町村ノ求メニヨツテ派出スルモノトス

當分常設スル誤樂隊ハ左ノ三種トス

一、演　劇　一、活動寫眞　一、涙花節

第八條　各部ノ事業規程ハ各部別ニ定ムルモノトス

第三章　團　員

第九條　本團ヲ組織スル團員ヲ左ノ三種ニ分チ各々其權能ヲ異ニスルモノトス

一、正團員ハ　年齡二十一才以上ノ男女ニシテ品行方正操守堅固ニシテ左ノ資格ニ該當スルモノニシテ總會ニ於テ認メタルモノ

但シ二十一歲未滿ト雖モ本團ノ許可ヲ得タルモノハ此限ニアラズ

イ、農業勞働ニ堪ユル體格ヲ有シ併セテ開村資金五百圓ヲ一時ニ出資シ得ルモノ

ロ、前項同樣ニシテ開村資金二百五十圓ヲ一時ニ出資シ得ルモノ

但シ團ヨリ二百五十圓ヲ貸與シ（イ）ト同等ノ權利ヲ得セシム

ハ、前二項ノ前書ニ該當スルモ出資シ能ハザルモノ

但シ團ヨリ五百圓ヲ貸與シ（イ）ト同等ノ權利ヲ得セシム

二、準團員ハ　正團員トシテ入團ノ希望ヲ有シ未ダソノ資格ノ具備セザルモノニシテ年額團費參圓ヲ出金スルモノ

三、贊助團員ハ　本團ノ大目的ヲ助成セシムベク精神的援助ヲナシ又ハ年額十圓以上ノ寄附金ヲナシ又ハ一時ニ百圓以上ノ寄附金ヲナスモノ

準團員、贊助團員ノ入退ハ隨意トス

第十條　正團員トシテ入團セントスル者ハ本團ニ申出デ許可ヲ受クベシ

正團員入團ノ許否ハ總會ニ於テ之ヲ決ス、正團員五分ノ四以上ノ同意アルニ非ザレバ入團ヲ許サズ

正團員ノ場合亦同ジ

第十一條　正團員ハ入團滿三ケ年ノ後ニ於テ一戸當リ一町歩ノ土地ヲ無償附與サル、モノトス

但シ（ロ）（ハ）ニ屬スルモノハ其貸與金ヲ返濟シタル後ニ附與サルモノトス

第十二條　正團員（ロ）（ハ）ヘノ貸與金ノ利息ハ年一割以下トシテ入團四年目ヨリソノ元利ヲ年賦償還セシムルモノトス、但シ年限ハ當人ノ實力ニ依リテ定ムルモノトス

第十三條　準團員、贊助團員ハ本團ノ施設物ヲ使用シ又本團ノ產物ハ市價八掛乃至半額ヲ以テ使用スルノ特權ヲ有ス

但シソノ規定ハ別ニ定ムルモノトス

第十四條　本團員ハ常ニ本團制定ノ徽章ヲ佩有スルモノトス

第四章　團　結

第十五條　正團員ハ本團經營村內ニ於ケル自己所有ノ土地建物及共有財產の持分ヲ他人ニ讓渡スコトヲ得ズ、但相續の場合本團ノ承認ヲ得タルモノハ此限ニアラズ

前項ニ違背シテ第三者ト締結シタル契約ハ一切無効トス

第十六條　正團員ハ團ノ許可ヲ得テ共有山林ヨリ自家所要ノ建築材、薪炭材ヲ伐採スルコトヲ得

第十七條　正團員脫退ノ場合ハ其所有ニ係ル村內ノ土地、建物ハ時價ヲ以テ本團ニ買收ス

前項ノ評價ハ評議員會ノ決議ニ依ルモノトシ團員ハ之ニ異議ヲ唱フルコトヲ得ズ

正團員脫退ノ場合ハ共有財產ノ持分ハ其權利ヲ喪フモノトス

第十八條　正團員ハ公共其他ノ爲ニ勤勞スルノ義務アルモノトス

第十九條　正團員ハ報恩ノ趣旨ヲ以テ本團基本金トシテ每年純益ノ三十分ノ一ヲ團ニ寄附スルモノトス

第二十條　正團員ハ永安家資金トシテ每年純益ノ千分ノ二十五ヲ貯金スルモノトス

前項ノ貯金ハ團ニ預入スルコトヲ要ス、本團ハ團員資產ノ增殖ヲ圖ルタメニ此貯金ヲ運用ス

第二十一條　正團員ハ生產物ノ販賣、物品ノ購入等凡テ本團ヲ經テ之ヲ行フモノトス

第二十二條　正團員ハ冠婚葬祭其他ノ儀式日常生活ニモ努メテ舊來ノ弊風ヲ去リ質素善良ノ美風ヲ作興スベシ

第二十三條　正團員勤儉力行、衆人ノ模範タル行爲アル者ハ團長之ニ善行章ヲ與ヘ善行章十二個ヲ得タル者更ニ奇特ノ行爲アル場合ニハ總會ニ於テ特別表彰ヲ行フ之ガ細則ハ別ニ定ム

第二十四條　正團員分ヲ忘レ奢侈ニ流レ業務ヲ怠リ又ハ不良ノ行爲アリト認ムルトキハ團長ハ之ニ忠告ヲ與ヘ忠告二回ニ及ブモ尙改悛セザルトキハ役員會ノ決議ニヨリ二ケ年以內團員ノ權利ヲ停止ス

第二十五條　本團ノ體面ヲ汚辱シ若クハ團ノ節度ニ服セザルノ行爲アリト認ムル者ハ除名スルコトヲ得

除名ハ第三十七條ノ例ニ據ル

第二十六條　除名處分ニ附セラレタル者ハ本團ヨリ附與セラレタル土地、建物及共有財產ノ持分一切ヲ本團ニ沒收セラルルモノトス

第二十七條　正團員病災其他ニ因リ家計困難ニ陷リタルトキハ本團ハ無利息年賦償還ノ方法ヲ以テ必要ノ資金ヲ貸與スルモノトス

第五章　役員

第二十八條　本團ハ左ノ役員ヲ置ク

團長	一名	副團長	一名
監事	五名	參事	五名
		部長	五名
		評議員	三十名

團長ハ本團ヲ總理ス

副團長ハ團長ヲ補佐シ團長事故アルトキハ之ヲ代理ス

部長ハ團長ノ指揮ヲ受ケ本團經營ノ事務ヲ分掌ス

監事ハ本團ノ事務ヲ監査ス

參事ハ會長ノ諮詢ニ應ジ事務ニ參與ス

評議員ハ重要事務ヲ評議ス

第二十九條　團長、副團長、部長、監事ハ總會ニ於テ選擧ス

第三十條　正團員ハ一人一戸トシ五戸ヲ以テ一組トシ各組ヨリ一名宛ノ評議員ヲ選出シ、若干組ヲ以テ各區一名宛ノ割合ヲ以テ評議員中ヨリ參事ヲ互選ス

第三十一條　準團員贊助團員ハ選擧權被選擧權ヲ有セズ

第三十二條　役員ノ任期ハ四ケ年トス

第三十三條　本團ニ醫員、書記、技手、産婆、看護婦、職工、工夫、使丁、其他必要ノ職員ヲ雇用スルコトヲ得

職員ノ任免ハ團長之ヲ掌ル

職員ハ部長ノ指揮ヲ受ケ各種ノ事務ニ從事ス

第三十四條　役員及職員ニハ俸給ヲ給ス、但監事、參事、評議員ハ實費支辨トス

第六章　會議

第三十五條　總會ハ毎年一回三月之ヲ開ク

團員半數以上ノ請求アリタルトキ又ハ團長ニ於テ必要ト認ムル場合ハ隨時之ヲ開ク

評議員會ハ必要ニ應ジテ之ヲ開ク

參事會ハ毎月十五日ニ開ク

第三十六條　會議ハ團長之ヲ招集ス

總會ハ少クモ一週日前議案ヲ示シテ招集スルヲ要ス

第三十七條　總會ニ附議スベキ事項左ノ如シ

一、正團員ノ進退ニ關スル件

二、役員選擧

三、豫算及決算

四、團規ノ變更

五、其他團務遂行上重要ナル件

第三十八條　會議ハ正團員四分ノ三以上出席ヲ要シ、議事ハ出席者ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得ルニ非ザレバ議決スルコトヲ得ズ

第七章　雜　則

第三十九條　本團ノ事業年度ハ四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

第四十條　本團ノ趣旨ヲ永遠ニ普及徹底セシムルタメ正團員ノ家族ヲシテ青年會、處女會、主婦會、老人會等ヲ設置シ本團ノ教育機關トス、其細則ハ別ニ之ヲ定ム

第四十一條　本團經營ニ必要ナル學術技藝ヲ收得セシムルタメ本團ハ研究生ヲ選定シテ他地方に留學セシムルコトアルベシ

（於東京、假事務所ヲ東京市市外千歳村烏山七〇一ニ置ク）

（於秋田、假事務所ヲ秋田市上米町六番地ニ置ク）

〈秋田新聞（大正十二年七月十五日）拔萃記事

烏海山麓に理想の村

相川村にも候補地

調査の上理想から實行へ石田傳吉氏の實地視察

「理想の村」の著者にして農村問題研究家の一權威たる石田傳吉氏は本縣下に理想の村を建設すべく之が候補地選定の爲め十四日來市し同夜地方有志と種々打合せするところあり翌十五日前記候補地に出張し視察する筈であるが候補地と目すべきは烏海山麓海拔二百メートルの地に千町歩の國有地又河邊郡相川村に雄物川に添うて部落地約百町歩の地ありて氏が視察の上何れかに決定し理想から實行に着手する筈である、右主唱者たる石田氏は確固たる信念を以て此の理想鄉に就いて語る「幸福なる生活をしたい」といふことは凡ての人の希望であるけれども之れを實現し得る機會は誠に少い、微力な我々は日夜營々として額に汗しても尙ほ且つ滋味のある食物、暖き衣服を得るのは中々困難である、況して心地よい家に住み機嫌よき隣人と心の奥底を打ち明けて何の不足もなく暮すといふことは殆と絶望かと疑はれる程であるが適當の方法と資金とを備へ適當の人を叫合しその團結の偉大なる力を以て一定の方針の下に進めばこの理想が實現されるのである。

私達は此の理想を實現する爲めに今回「明星自治團」を創立せんとしてゐるのである、此の團の

仕事は講演宣傳町村是調査、圖書出版、公衆娯樂とそれに開村といふことが附帶されて居ることは勿論である、理想の村は約三ケ年後を以て村人の勞働にて推持して行く丈けの成績を擧げたいと念じてゐるがこれは出來るだらうと思ふ。

假りに鳥海山麓としたら馬鈴薯を植ゑ付け之を食料に製粉に又養豚に用途は幾らもあるだらうと思ふ、殊に同地は冬季が長いだらうと思ふが冬季には其の季に適した職業は幾らでも轉がつてゐる、總て同村に於て製產したものを更に加工して賣出すといふ方法を講じ殊に問屋と取扱ひをせず三越か何處かの小賣店に直接に取扱を開始したい希望を有つてゐる又此の鄉人は總て團員制とし三種に分ち開村費五百圓を一時に出資したるもの、同二百五十圓を出資したるもの、出資する能はず會より五百圓を貸與したるものとを正團員として右團員には三年後に於て一戸當り一町歩の土地を無償にて貸與することになつてゐる、然し一戸一町歩では獨立して生活することは出來ないのであるから製產方法を講じ又土地增加の方法を漸次講じて行かねばならないのである。勞働を强て粗食で滿足せよとは無理である、理想の村は中等階級の生活をする村の創設である」と

三　理想鄉の建設地を求めて

一　帝都を後に鹿島立ち

衰頽へ滅亡へと傾きつゝある農村を救濟すべく、燃ゆるが如き同胞愛の衝動から、東奔西走すること實に二十有余年、地の使徒として我國の到る所の人々から多大の尊敬と信賴とを鍾めつゝある焦點の人、惠峰石田傳吉先生が、その理想を具體化し實現すべく理想鄉の建設地を求め初めてからもう二三ケ月を閲する。

理想鄉建設＝明星自治團とはすなはち先生の雄々しく花々しき社會改良の世界的大事業を達成して、先生の所謂眞樂主義……全體主義の社會を何れの地にも實現せしめべくその傘下に集まつたグループの名稱である。その誰もの眼は希望に耀きその胸は熱愛に燃えてゐる。

石田主盟の机上に地方の有志から齎された建設の候補地は數多あつた。が、種々の點からしてその最も有望視されたのは鳥海山麓の數ケ所である。

建設地の實地踏査に……石田主盟、町村是調査部の時國主事、農業部主事の井出主事、編輯局にゐる私との四名がその胸を轟かせながら希望の旅に上るべく上野驛を立つたのは去る八月十四日の午後八時である。

我等の希望のシンボルである星は耀かしい光を放つて我等の行を祝福してゐた。

二　あはれ—白靴の行水

目的地たる鳥海山の西海岸に出るため、また秋田から乘加する筈の同志を待合はすべく新莊驛で急行列車を乘り棄てた、私達は、町内の視察に限られた短い時間を利すべく相携へて構外へ出た。

汽車の窓から眺めて過ぎた地の地方のやうに、町はづれに見られる何かしらの工場が二つも三つも—と言ふよりは工場といふ工場の殆んど凡てが—塀はくづれ煙突は倒れ庭には雜草が茫々と生へ繁つて秋蟲がしきりにすだいてゐるのは堪らない氣がする。

驛を出る時から少々氣遣つてはゐたのだつたが、かうまで早くやつて來やうとは思はなかつた聚雨がザーツと降り出して來たからたまらない。しかし未だ雨足が小さいだけが幸と皆がスタコラを初めた。何しろ石田主盟と井出君とに杖傘があるだけで、時國氏と私とはステツキしか持つて來てないのだ。相合傘も素より惡くはないが、東京を發つ時に「雨なんか大丈部さ」と言つて杖傘黨を聊かひやかし氣味な態度をとつた私達ステツキ黨である。「濟みませんが……」と言ひ出して「ステツキでは如何です?」なんて皮肉られるのも少々癪だから、雨が降り出すと同時にスタコラと走り出したものだ。

一足先に走り出したステツキ黨たる私達が振り返ると杖傘黨の二人も續いて走つて來るのには聊か意外の感に打たれざるを得なかつた。が、井出氏が走り出した原因はかうらしい。それは買ひ立てのズツクの白靴を穿いてゐるので、七つ下りの洋服よりも其の方が餘程大事らしいから——。ハ……これはとんだ失敬。

ところが石田御大の走り出された理由は矢張り全體主義の立場からその主義に忠實なためらしい。誠に以て感心の至りだ。と言つても敢て鬚の塵を拂ふのではないよ。

そんな個人々々の立場や理由は兎に角として、杖傘やステツキを肩にして、而も私のやうないつも少々幅の利かない小男ならまだ良いが、五尺五寸……六尺といふ連中が走る有樣は騰茶ところだ。但し後で見たら井出氏だけはとう〳〵傘をさしてゐた。蓋しそれは未だ新しい麥藁帽子が濡れるのを避けるためだらう、ハ……

秋田から同志を乘せて來る筈の汽車が着くにはもう間がなかつた。で、私達はプラットホームへと行つた。私達が驛へ着くのを待つてゐたと言はぬばかりに勢よく降り出してゐた大粒の雨が、何か塵埃でもかかつてゐるらしい雨樋の或る部分から瀧の樣に溢れてそれが風で煽られるので人々は彼方此方の隅つこの方に小さくなり合つて集つてゐた。それでも容赦なく飛沫は時々御見舞するのだからたまらない。何しろ餘り大きくもない驛ではあり、酒田方面に行く旅客がかなり多く吐き出されてゐるのだからお互に助からない譯さ。

洗面所に隣した柱の附近の僅かの安全地體?に集つてゐる人々がある。その中に、この春女學校に上つたらしい少女がまじつてゐた。イヤ何も殊更らその少女が優れたビユウーなどいふ譯ぢやないのだ。その少女の存在を私は一つの突發事件によつて知つたやうな次第なんだ。

その突發事件といふのは、恰度その柱の所が增築前の雨樋のあつた部分だ。それを血の廻りの惡い新莊驛の連中がその儘にして置いてるので、それと同樣の不注意さから來てゐるプラットフォームにかゝる俄か瀧の水のために良い鹽梅に濁り水を以て陷穽となつてゐるのだ。それに例の少女が待ち構へてゐるとも知らずにその穴に足を踏み入れたので、可哀相にその新調らしい白の靴下をズツポリ汚してしまひ。おまけにこの突發事件のために急に衆目の焦點となつて泣き出しさうになつた。マアほんとに可哀さうに……。私は若し彼の女が今少し交渉の深い隣人だつたら鐵相を相手取つて損害賠償の訴訟を起してやるのだがと思ひなどした。全く。

お役人達の仕草は大抵こんなものだといふことを新莊驛長以下一同が赤裸々に露はしてゐるのだと思へばドコか神妙らしい氣もするが、旅客の蒙る迷惑は決して許されない。で、早速驛長に注告しやうと思つて二三歩を運ぶと、早やくも石田主盟の注告に平謝りしてゐる驛長のこの姿が見えたので止した。

屹度新莊驛で落合ふべく日時を示し合してゐた秋田からの同志はどうしたかとう〳〵來なかつた。

私達は羽後岩谷行と云ふ舊式な恰で押し入れ見たいな列車に乘り込んで目的地へと向つた。

三　車中女性の解放論

その汽車の中で、而も私達の前に、他の同性に侮蔑の冷やかな眼を投げかけてゐる妙齡の女性が二人ゐた。それはさつき新莊驛で素的に澄しこんで相變らず四邊に冷かな侮りの視線を散らしてゐた蟲唾が走るほど氣障な女である。

それが癪に障るほど幾度も鏡を出してはおめかしをやる。新らしがり屋で、生意氣な女であることは一見して耳隱しが肯かせる。

その女、なか〳〵熱度が高いと見えて思ひ切り偉いことを云つてゐる。曰く「私たちが國政に參與する曉には……」だの「虚げられつゝある現代の女性が解放されるには、女それ自身がその運動を白熱的にしなければならない」だのと互にそして人に聞えよがしに語り合つてゐる。

「少しは話せる女だなア」と妙にコウ感心してみた氣になつたのも場所が場所だけに無理もあるまい。私は「酒田の町を幸ひなものだな」と思ひなどした。何故つてその持つバスケットに記されたものによつて彼女等が酒田X町の何某といふことが知られたから。

はじめ氣障の女と思つてゐた事などは何處かへ飛んでしまつて、遂によい隣人としての交渉を持つやうになつた。何？　助平な奴だ……と戯言いつちやいけない、人を氣嫌ひするのが抑もの間違いなんだよ實は。

遂に互に時事を論も文藝を語ると云つた風に素的に共鳴してしまつた。我が、明星自治團の理想鄕建設には大いに贊成の意を表して「我が同胞のため否全人類の爲めに然うした健全な社會のヨリ早く實現されることを切望します。大いに眠れる我が同胞の爲め覺醒の烽火を揚げて下さい」など目に熱誠を輝やかせて言ふ。

いつか汽車は最上川上流の景勝を眺めながら走つてゐた。トンネルがある。瀧がある。トンネルを出ると思へば又トンネルだ。そしてその間あひたに瀧が高く懸つてゐるのだから、そこらには幾十條の瀧が並んでゐるのに違ひない。その中に於ける大きいのが白絲瀧なのである。私は然うした眺めに、雄大な感じを受けたものだ。トンネルが盡き瀧がなくなつた頃「君あれが鳥海の雄姿だよ」と石田御大から注意されて指される方を見ると、どこまでも男性的なそして雄大崇高な鳥海山が「ヤツト少し涼しくなりかけたのでボツ〳〵衣更へでも……」とでも云つた風に雪の裝ひを未だ全然脫ぎきらないでゐる。御大はまた指しながら「あれは笠ケ嶽、アレが觀音森……」と說明された。

さうこうしてゐるうちに汽車は酒田に着いた。一行はそこで下車して町內の視察をすることにした。多分時は午前十時少し過ぎだつたらう。

四　ソバの違ひで大失策

プラリ〳〵と炎天の下を私達は歩いた。何町から何町を通つたかそんなことは記憶にない。又勿

論氣にも留めなかつた。素的にどこを通つても桃の立賣の多いのには少々驚かざるを得なかつた。

「桃買つて行かつせ」と言ふ言葉を耳の中に瘤が出來るほど聞かされたものだ。

モウ余程歩いた。相當にお腹も空いた。何處かで何か食べなければ足が思ふやうにいかない。四人の八ツの眼は何處か然るべき所をと求め探した。

が、頓とそんな所がお生憎様と來てゐる。散々歩いた末、公園前の何とか亭といふ古びた表の硝子戸に「きそば御料理」と書いてあるのが目についた。蕎麥が三十分間待てば出來るといふのだから、こんな場合はなんでも掻き込むに限ると衆議一決して、主婦の案内するまゝに裏二階のいかゞはしい室に入つた。

暫くすると運んで來たわ、運んで來たわ、三四品づゝの料理にビールを……。勿論こんな暑い最中にそんなものゝ注文なんかしやしないのに持つて來たのだ。

「オイ君これは坐敷の間違ひだよ」といつもは咽喉から手が出る程好きな時國氏が神妙なことをいふ。と、女中は澄したもので「旦那さん方、然う被仰ずとサア一杯！」と言ふやうな意味のことを方言丸出しで言ひながらモウビールの口をきつた。

サアかうまでなつて見れば誰からともなく皆がしきりにコップを傾けないではゐないものだ。「ぢや折角だから……」といふので飲むだ。

二本……三本……と空のビール壜は並べられた。モウ誰の顔にも良い加減に醉が廻つた。

再三再四催促の末ヤツト蕎麥が運ばれた。それまではよいとして、さてお代りをと請求したら驚かないことか大きな箱にヤツト一人で持てる位入れた蕎麥玉を持つて來た。隨分思ひきつて大袈裟な作り方をしたものだ。何んだかそれを見たゞけで腹の中が一杯になつたやうな氣がしたが、それでも人並に一玉食べた。蕎麥と來たら目がないと自稱する井出氏すら箸を投げた程だから他は推して知るべしだ。

會計書を見て又私達は驚かされた。東京の三倍以上の高價でボルのだからやり切れない譯さ。しかもその言草が振つてゐる。言葉ははつきり判らないが「蕎麥は全部の代を請求する權利があると同時に其の他のものは當地の相場だから……」と言つたやうに小憎らしい横柄な面をしてゐる。

石田御大が「これも一つの經驗で社會への月謝さハ……」と苦笑される。

五　酒田名物―物言ふ桃の強賣り

余りそこで暇取らされたのでとう〳〵一汽車乘り遲れた。で一行は公園の松林を縫つて海岸へと

出た。直ぐ足下のグラウンドでは赤銅色に日に灼けた學生達がテニスやベースボールをやつてゐた。

私たちが何かしら記念塔らしい大きな石の影の芝生に休んでゐると、これはまた物好きにも右の眼に朧夜の星を宿した五十格好の皺くちや顏した女が、顏に似合はないコケテイツシュな笑を洩しながら私達の前に來てサモ慣々しく言葉をかける。その言葉は私には判らなかつたが「旦那さん。今晩お泊になるなら廉くて飛びきり待遇の良いそして〇〇〇〇としてお世話する所にお伴しませうから今直ぐにでも被來い」といふ意味らしかつた。

そして彼の女は前垂れに包んでゐた五つ六つの桃を芝生の上に並べて私達にそれを食ふべく奬めながら可笑しな節で〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇酒田の桃は一しほめ……」など、歌ひ出した。

私達はたゞ苦笑を洩すのみだつたが、彼女はなほ執拗に言つて私達を伴はうと努める。最後にこんな意味の事も言つた「そのうちは表面はお針をしてゐるのだが、三人はその家にゐるから後の一人を蕎麥屋から連れて來るから是非……」と。

私たちはさうした聞くに堪えない言葉をヨリ以上耳にしたくはなかつた。誰もが無言の儘急いでそこを去つた。

六　總身の血は怪しく波うつ

坂を下つて町の方に歩くと恰度其の坂の盡きる所の左側に堂々たる黑板塀の建物がある。それは本間樣には及びもないが、せめてなりたや殿樣に」といふ俗謠によつて知らるゝ本間某の邸宅である。

その驕者飽く事を知らない本間の建物を見て私は急に痛ましい感に震たれざるを得なかつた。何故つて？　私の目には農業に從事する町はずれの家々および遠近に見ゆる農家の――殆んど凡てがその小作人だ――哀にも小さく貧しいことを見てゐるから……。實際屋根を葺くに杉の皮を以てし、又それを多くの小石を以て抑えてあるのは痛ましい感じがするものである。

それのみではない。それこそ山海の珍味もなほ足らぬ生活をしつゝある本間家の前の乾物屋にはその店頭に鮭か鱒かのらしい鰓が吊されてゐる。私はそれを八つ目鰻のやうに藥になるのだと思つた。で、石田主盟に何の病に特效のあるものかと問ふと「アレはこの地方のお百姓たちの貴重な食料の一つですよ」との答を聞かされたのには尠らず驚かされた。

何んといふ傷ましいコントラストだ。何といふ痛烈なアイロニーだ。私の總身の血は怪しく浪う

つた。

彼本間某のために幾多の同胞が血や涙を流しながら生きるために餘儀なく働いてゐるのだ。不合理な制度の下に幾多の生靈が現世地獄の苦惱を嘗めつゝあるのだ。

然うした小作人達の生活は素より血涙を以て同情するに餘りある。と同時にそれを顧ずして現世の青鬼赤鬼の地位に立つてゐる人間性を離れた本間某に對してはまた一片同情を禁じ得ない。

世の誰も彼も……地主も喜び小作人も共に喜ぶ眞樂主義の社會の實現を望むについても我々の理想鄕の建設をヨリ早くしなければならないなど思ひながらいつか驛近くを歩いてゐた。

七　なつかしき小砂川の宿に

我が一行が目的地――秋田縣由利郡上濱村――の小砂利驛に着いたのは八月十五日の夕方であつた。

一眸のうちに收むることの能きる鳥海山、稻村獄、笙ケ獄、觀音森などが、泰然として氣高く聳えてゐる。

また洋々たる日本海は遙かに飛島を以てその單調さを破つて一つの良い眺めをなしてゐる。

崇高雄大な鳥海山と洋々たる日本海との間にある廣々とした高原地帶……それが我が明星自治團の理想鄕建設豫定地の一つである。

小砂川海水浴場……の名は東北地方ではかなり知られてゐる。その一方の鎭として突出する岬――奇岩怪石のよく按排された景勝の地――は我が明星自治團の臨海倶樂部建設用地である。

私達は主盟の然うした說明を聞きながら歩いた。と、間もなく道下にその海水浴場が見下せる。

我一行の宿は海水浴場の入口に位するそしてそれを瞰下することの能きる絕好の所にある橋本屋といふのである。まるで親戚か親しい知己を迎えるやうで、商賣柄のオベツカなどは少しもなくまつたく氣持の良い宿である。

帝都の暑熱を離れたといふせいもあるだらうが、如何にも晴々しい氣分が四邊に漂つてゐた。浴衣に着更えて食膳に向つた時の快さよ。

何時の間にか紺青の空に三日月が輝いて、それがその小さな影を波に碎いて細長く光を漂してゐた。そして左手に見ゆる三島岬、右手に見ゆる明星岬――我が臨海倶樂部建設用地のある――の二つはその繪のやうに美しい姿を海水に洗はせながらモウ眠つてゐた。

八　昔を語る鯨の大頭骨

十六日、素的に早く主盟と井出氏とは床を離れたものらしい。我が眼を醒した時だつて未だ五時頃だつたにモウお茶を啜りながら四方山の話に花を咲かせてゐた。

時國氏はドウかと蚊帳を透して見れば、これはしたり誰かに大事な睾丸をでもトツ締めらた時のやうな顔をして寢てゐる。奴さんなか〳〵表情がうまいものだと一寸感心しながら大急ぎで顔を洗つて二階へ戻つて見ると懷爐だ藥だと騒いでゐた。奴さんお腹をあてられたのだ。

一體今日の豫定は、約十哩を北へ走つた金浦（コノウラと訓ましてある）町で講演會をやることになつてゐたのだ。講師一名は缺けた譯だが仕方がないから三人で出かけて行つた。

が、止むを得ぬ事情のために講演會はお流れとなつてゐた。

次の汽車を待合す間を利して私達は沖の島公園に行つて見た。沖の島と言つてもそれはお隣の象潟が未だ本統の潟であつた時代……彼是二百年前迄の名稱其の儘で、地震のために象潟の潟がなくなつたと同樣に沖の島も今では一つの岬となつてゐるのである。

そこには幾つもの神祠がある。素盞嗚命と五尺ばかりの高さの石に記されたものゝ傍に大きな鯨の頭骨がある。勿論雨ざらし日ざらしだ。誠に以て勿體ない次第である。「何故に小學校の標本室に置かないだらうか？」と石田主盟は呟いてゐられたが、後で學校長に注告してゐられた。

金浦發二時二分の汽車で私達は象潟町に下車した。象潟と小砂川との中程の——に行つた。それは探檢隊に加はる寫眞師を傭ふためと、かねて手紙を以て照會を受けてゐた講演會の日時を決定すべきためとで——。象潟の講演會は八月二十日午後一時から同町小學校に於て開催すべく決定された。主催は同町の有識者の集團である讀書會といふのである。

寫眞師は明日の上り一番列車で一行に加はるべきことを約した。

九　途中のエピソード

これで象潟町に於ける用件は濟んだ譯である。次の汽車までは未だ四時間も待たなければならない無意味にそれだけの貴重なタイムを費すことは御互の心が許さない。で、上濱村の村長と同村大砂川區の區長と有志とをその爲めに訪ふべく提唱された主盟の言葉に從つて二里半の道をテクルことにした。時は四時を少し廻つた頃だつた。

道すがらは團歌を歌つて元氣を鼓舞しながら歩いたものだ。大きい子供になつて——。

村長や區長の家を訪ねたのはモウ黄昏頃だつたが、その前に一つのエピソートがある。

三人が三人ともモウかなり疲れてゐた。比較的樂な、一歩でも近い途をとるといふのは誰もがかうした場合に考えることである。時間の點からしても然うなければならない。

「君達この毛氈を布いたやうな近くてよい舊道を拔けやうぢやないか」と石田御大から言われた、フト見れば、なるほど新道と舊道とは弓と弦だ。多くの人がこの近道を利用するらしい事は芝生の中に一條の小道が形成されてゐるのによつて肯定される。で一も二もなく贊成して歩いたまではよかつたが、これはしたり橋がない。木の一本も竹の一本も渡してない。後戻りするのも馬鹿〳〵しい。と言つて水はかなり深い。私のやうな小男では膝の上まで位は濡さなければ徒渉されないらしい。さてこゝは考へ物だぞ。

それでも他の二人は徒歩の準備をしつゝあるのに後戻りは全く忌々しい。で私も徒渉すべく仕度を調へかけた。と御大が「私が責任者だから背負つて渡すから……」と言はれる。でも余り恐縮だから躊躇してゐると、「サア遠慮せずに負ぶさり給へ」と重ねて私たちを促される。

とう〳〵私は背負はれて渡つた。私が對岸に着いたと言はぬばかりにズックの白靴——と言つても塵埃のためモウかなり土色になつてゐた—が一人心中をきめこんだ。しかもそれも御大の御蔭で命拾ひ……私はホツト吐息をついた。井出氏もやはり先生に背負はれて渡つた。先生こそ良い災難だつた譯さ。

しかし地の使徒として社會から尊敬され信頼さるゝだけあつて、かうした所にまでその面目が躍如たるのには感激しずにはゐられない。

それから豫定の訪問をすまして村の中央部—役場や中央小學校のある——に出た時はモウ眞暗がりだつた。

かなり時間を費したのだつたがそれでも汽車よりは早く小砂川の宿に着いて、而も汽車の響は良い加減ビールを傾けてから聞えた。

一〇　第一の豫定地を探險すべく

十七日　今日は山形縣飽海郡吹浦村にある候補地を踏査する日なのである。かなり懸念されてゐた時國氏の病氣も全快したし、象潟町から一番列車で走せ乘じた寫眞師と小砂川驛で一しよになつたのでつまり一行は五人となつた譯である。私達はその汽車で目的地たる吹浦町へと行つた。

山形縣と秋田縣……何だか吹浦村と上濱村とは遠いやうな感じがするが、その實はお隣り村なの

である。

驛から驛まで僅か四哩余りしかない。

一行は村長さんや郵便局長さん達に迎えられて村役場で小憩した。そしてそこの正門前で一行と村長さんや郵便局長さん初め村役場の吏員さん達と同じカメラに收まつた。

村からつけられた道案内者と人夫とは共に元氣な人だつた。前者は六十幾歳といふ爺さんで後者は廿前後の娘だつた。そして爺さんの名は吹浦村々會議員畑中庄太郎君と言ひ、女はお鶴とか言ふのださうだ。

庄爺さんの足の早いこと、恰で競爭でもして走るといつた有樣「お爺さん、余り歩き方が早いよ それでは迎もついて歩けはしない……」と誰かゞ言へば、庄爺さんは大きく口を開いて笑ひながら燧石をうつては煙草をプカリ〳〵吹かしてゐる。遙か向ふの方で——。

しかし間もなく歩みを緩めて呉れたからよかつた。でないと迎もやりきれなかつたに違ひないのは私のみではあるまい。

道すがら松蟬がしきりに鳴いてゐた。が、里を離れるに從つてその聲は次第に減つた。そして彼方でも此方でも鶯が朗かな聲を振りあげて鳴いてゐた。

道中はどちらかと言へば平凡なものであつた。たゞ所々の平坦地の熊笹などを燒いた後を少しばかり掘り返して蕎麥等を撒いてある。極めて粗放な原治的農法が行はれてゐる。未だ民度の比較的低いことを裏書してゐるそれが眼に上る位のものだつた。

一一　眞鴨に驚き—蝮に慄えて

はじめが程は鳥海登山道をのぼつてゐたのだがいつからか熊笹が首のあたりに氣味惡く觸れるやうな道の、而も刈草負ふ馬の上り下りに踏みならしたらしい凹凸の道だからやりきれない。

それでも幸補地の中央部あたりでは比較的樂に歩けた。木の芽澤を左に見て一行は進んだ、と、素的な羽音を立てゝ眞鴨が八九羽驚いて飛び立つた。私達だつて不意の事だから驚いたものさ。ところが庄爺さんが頗る面白い。手にした柄長の鎌を銃のやうに構えて「ドーン」とその皺嗄れ聲を張揚げて叫んだ。すると今度はその足許から鴨が又一羽驚いて飛び立つたと、庄爺さんは恰で掌中の玉をでも失つたやうに落膽した。面白い爺さんもあつたものだ。

そこは陣屋の澤である。將來貯水池を設けるには最好の地帶であり、またその水源としても相當の量があるらしい。そして約六百坪余りの面積の地にいつも水が溜つてゐるのである。

そこは第一に實査地に於ける寫眞としてカメラに收むべきものだとして早速その運びに取りかゝつた。が寫眞師君、どうも適當な地所を得るに困つたらしく寫眞機をあちらこちらに運び廻る。

とう〳〵最初の地點に於て撮ることになつたが、サテ一行が澤の處々に點在して……といふことになつてからが問題だ「この附近には蝮はいないかな、お爺さん」と訊くと「ゐないこともありませんぞ」といふ。私は何だか足の下から魔が手をさしのべでもするやうにゾグ〳〵し出した。

恰度幸ひ井出氏が來たので「君、蝮がゐるといふから頗る險呑だぜ」と言ふと「ゐたらよい、藥になるから生捕りにするんだ」といつて力んでゐる。私は彼の足跡を寸分違はぬやうに用心深く一足一足を運んでやツト目的地點に達した。

そこでカメラに收まつた一行は再び熊笹の生え繁つた地帶をぬけて鳥海登山道に出ると陣屋の茶屋まで一息に登つた。

一二　熊笹の小屋でビールを抜く

その茶屋が丸木の柱に熊笹の屋根だのが頗る面白い。「如何だね、お爺さん。お爺さん達は二人で若い氣取でこんな生活をするなんて乙が良いね」と言ふと茶屋の爺さんは大仰に笑ひながら「婆さんは下に置いてゐますから、私一人ですから氣が合つて良いものですよハ……なアに婆さんは婆さんで好いたやうに暮しませうから……」

と言つて暢氣相に煙草をくゆらせる。

茶屋の裏の陣家の泉に先刻冷したといふ村長さん達の厚意によるビールがお鶴さんの手によつて運ばれそして注がれる所は場所柄なか〳〵よいものだ。

ビールを飲みながら庄爺さんは陣屋の茶屋といひ陣屋の澤などいふ名稱の因緣について語つて呉れた。それによると、明治維新の當時、酒田藩と秋田藩との軍勢が今の秋田、山形、兩縣の縣界をなしてゐる山脈を挾んで對陣してゐた時の因緣によつて附けられた名である、と言ふ。

その茶屋を明星茶屋と改名し、陣屋の澤は明星の池と改名しやうなどと語り合ひながら名に負ふ日の丸、辯當を飯べ終つた一行は候補地をバツクにしてカメラに收ることになつた。恰度そこに鳥海登りの人も來たし下りの人も來た。で一所に撮るべく彼等を促した。すると上りの人はすこしも躊躇もしないが、下りの人は强硬的に躊躇する。「上で撮つて來ましたから」……と言つて再三再四すゝめてヤツトその參加を得たやうな譯だ。何も物好きに然うまでしなくつてよいのだが、折角の機緣だからといふのが其の原因だつたのである。

後で聞けば、鳥海山上には或る寫眞屋が出張してゐて、登山者を捉えては早速「こゝの景色を撮りますから入つて下さい。何もお金を戴くのではありませんから……やはり人物がないと寫眞がうまくないので……」などとうまいことを言つて、後では「折角のことだからホンの原版料だけつき合つて下さい」などと言つて金を絞りとるとの事である。月山や、湯殿山には登山者が多いが、鳥海山にはソンな惡辣な商人輩が入込みまたそれを默認してゐる神主さん達の怠りもあつて登山者が少いのではあるまいかなどと言つてゐる人もあつた。

私達は良い加減ビールが廻つた勢で歸途についた。勿論鳥海登山道路をとつたのだ。誰も歸りの足の早さよ。何しろよい鹽梅に道の勾配がついてゐる所に、ビールの勢で一時疲れてゐた元氣が頓に活氣づいたためもあらうから。

遙か左手にボカシ出される月山その他の連山を友としながら、また水天彷彿の日本海中に獨り淋しく浮かんでゐる飛島の風物などを、庄爺さんから聞かされながら、二里だといふ道を譯もなく下つた。

一三　大物忌神社に參拜—主盟の憤慨に共鳴する

登る時に參拜しなかつたといふので、庄爺さんは私達を國幣中社大物忌神社—羽後の一ノ宮で即ち鳥海山神社の邊津宮である——に伴つた。

境内の最も人目に觸るゝ場處に、かなり大きな自然石に大きく刻み出された「本間光丘君切積之碑」といふのがある。石田主盟はそれを指しながら「君達、これを見給へ、碑文がないから判らないが、實はこれは毎年僅か玄米五石づゝを奉納しやうと言つたとかで建てられたものだそうです。勿論その土地の所有權は本間某にあるので、余りにも神明を侮り人を世を僞るものです、而し私は毎年玄米五石宛を奉納することそれ自身には何等の言ふべきことをもつものではないが、本間某が世をチョロマカス一つの方便として、彼にしては余りにも僅少のものを奉納することに對して當神社第一等の靈地を汚してゐることに就て、然うせしめたその時の神主及び神社關係者にもその責の一部はあるが、本間某の術策が最も憎むべきものです。而も碑文を認めさせないところに彼のズルサがアリ〳〵と見えるのです。私は速かにこの碑石をこゝから撤去して何處かの隅にでも置くことを主張して止まないものですよ」と熱のこもつた言葉を吐かれた。

そして主盟はそこから見下せる所にある小さな祠を指して「アレは羽後風土記を執筆された進藤和泉守といふ神主さんの住ひの跡ですが、如何に昔の學者が清貧に甘んじたかゞ痛切に感じられる

ものです。兎に角然うした地方的大偉人の功績をすこしも表彰することを知らない人々の氣が知れませんよ」と言つて慨嘆の面もちをされる。私達は進藤和泉守の住居の跡だといふ小さな祠に行つて見た。二間四方な粗末な造りである。勿論今の建物は改造されたものではあるが、構造其の他は昔に似たものだといふ。私はある感激に震たれた。

私達が今だ少し予猶があると思つて郵便局長さんと色々話しながら歩いてゐるとモウ汽車が來てゐる。慌てふためいて皆がスタコラわれ先にと走つたものだ。私のやうなコンパスの短かいものにはこんな時に困るものだ。ドウ急いでもオツツかない。と言つてもこれまで私は五尺一寸はあるのだから馬鹿にしたものではないよハ……。デモ遲れ走せの私までが乘れたから、一行が皆その汽車で歸ることが出來たのは言ふまでもあるまい。

私達はさうした場合にも拘らず一行を驛まで送つて下すつた郵便局長さん及び庄爺さんの厚意を謝せねばならない。

一四　第二の豫定地—觀音の森下まで

十八日　小砂川區の候補地を踏査する日である。例によつて日の丸辨當を命じてゐた私たちを伊東といふ案内者が「觀音森の近くまで登るには何も然う仰山らしく構へるには及びませんよ、私なんか朝飯も食べないまゝで來てゐるのですから……」と言つて笑つてゐる。

とうとう辨當なしで登ることにした私達は伊東氏の後に續いた。かなり急ぎ氣味で……。しかるに寫眞屋がドウシたのかなか〳〵やつて來ない。余り待遠しいので井出氏が態々迎に行つてヤツト置いてきぱりを喰はないですんだ譯だ。大方奴さんのことだから昨夜一夜をドウシて明かしたかとその美しいワイフの所に手紙でも書いたのだらう。何んとなくさうらしい助平面をしてゐる。

小砂川には果樹園のかなり廣いのがあるといふことを聞いてゐたから、定めし相當の成績を擧げてゐるだらうと思つてゐたら私は甚だしく期待を裏切られた。といふのは、私達が辿りつゝある鳥海登山道の側にあるなるほど廣い果樹園がどの木にも殆んど一顆だに實を結んでゐないのだ「その廣い〳〵林檎園全部にどれだけ實が結ばれるだらう?」と考へて見るだけでも痛しいやうな氣がする。

何んでもその經營者は郡か縣かのお役人からしきりに奬勵されて經營したのださうだが、そのためにかなり損したらしい。「儲かる經營法や栽培法を習はなければ駄目ですが、どうもお役人さん達の言はれることは……」と伊東氏は苦笑しながら言つた。

一五　首くゝりの足引くやうな植林奬勵

私達は延びの良い杉林を幾らも見た。傷ましいから見まいと思つても眼に映るのだから仕方がない。イヤ君そんなに不思議さうな顔をするまでもないよ、私がこの場合傷ましいといふのはかうだ。

――植林がよい。農家の經濟は植林することによつて初めて保證づけられる――などと、牡丹餅で頰をなでるやうなことを縣や郡のお役人達から奬勵される。と、何十年目には一反部の山から何十圓の收益があるといふやうな計算から植えつける。

それまではよいが、いろんなことで何時かしらそれを手離さなければならなくなると云ふ鹽梅で、何右工門さんの所有に歸するといふのだからだ。而かもそれが首吊りの足を引張るやうなことで行はれるのだから、私が傷ましいといふのも當然だらう。

一行は觀音森の麓にある貯水池の豫定地でそこをバツクにしてカメラに收まつた。その水源地と目さるゝ所から噴出する氷のやうに冷やかな水を掬んだ時の快さやその美味しさつたらない。

建設豫定地帶の地味は勿論相當に良いし、然うした水源地にもあるので、かなり囑目さるゝ所だことは、昨日視た、吹浦村の豫定地と相似たものである。

一六　覺めた者は寂しい――遺恨の貯水池

私達が大須鄉へ出るダラ〳〵坂の道をかなり歩いた頃伊東氏は新な水源地とそして氏が主唱の下に企てた貯水池とを紹介した。

モウ陽は私達の頭から眞直に照す程になつてゐるので隨分暑かつた。かなり渴を覺えてゐた一行はシコタマその水を飲みながら伊東氏の說明を聞いた。

貯水池にしたと云ふ所の面積は隨分廣くそして深さも餘程あつた。自然の然うした地形に何等の事だつた人工を加へずにやつたらしい。「こゝの廣さはどの位あるでせう?」と伊東氏に問へば「さあ、何しろ隨分廣いものです。御覽の通り向ふの森の所から……」といふ。なるほど見る通りだ。

伊東氏はこの貯水池を作るために周圍の非難を受けたことは今更ら悔ゆるやうな口吟で言つた。然う言ひなさるな「覺めたものは寂しい」ときまつてゐる。ウインデレバントが言つたぢやないか「寂寥孤高は偉人の運命だ」餘り女々しいことを言ふものぢやないよ。

——私は氏にこんなことを話しながら下つた。フト後を見ると時國氏が野鼠を殺したと言つて大威張でゐる「僕の草靴に嚙みついたから……」だとさ。眞晝間の而も一間幅の道路の眞中に態々這ひ出して來て、踏まれてそゝかしく草靴に嚙みつくネズミ公もネズミ公だが、脫腸した鼠をステツキの先でイヂクリながら「鳥海山麓の脫腸鼠」として童話を一つ書くのだといふ時國氏も罪がないものさ。「隨分堅苦しい長い名だな」といつた伊東氏に「これは戒名の代りさ」と言つて彼は笑ひながら下つて來る。

一七　大きな獲物をカメラにして

そんな騷ぎで主盟と伊東氏とから私は少し遲れてしまつた。が、間もなくして路傍に思ひざま枝を延してゐる二本の松のところえ行くと、石田御大が「大きな獲物があるよ」とニコ〳〵たるものだ。

見るとなるほど大きな獲物がある。而もその二本の老松に注連を張つてその中にMの形をした高さ二尺位の自然石が鎭座…イヤ「氣をつけ」をしてゐる。松の大きさから推して千年近くを閲したらしい。

主幹はそれをカメラに收むべく寫眞師に命じて自分はその傍で腕を拱いて眺めてゐる——得々として——ところを撮らせ、重ねて「今一枚」との事、頗る御感に入つたものだ。後の一枚に門のその側にあるMの石と並べて撮らせる所はます〳〵以て罪がない。

そこで一休みして歸る時主盟が「ドーモ御苦勞さん」と言われる、改つて誰にだらうと思つてゐると皆が笑つてゐる。その所謂大きな獲物に對しての言葉だ。何のことだい全く笑はせるね。

そんなこんなで今日の視察もマア豫定通りに終つた譯だ。

——伊東氏が言つたやうにお午までには宿に歸ることが出來た。

一八　豫定地探險の第三日目

十九日　昨日の夕方東京から急電が來たので時國氏を失つたことは、一先ず候補地の踏査を終る今日としては一つの淋しいことである。

けふは上濱村に於ける候補地中の最も廣い面積をもつ大砂川區へ行くのだといふので、誰もが新たな元氣に滿ちた顏をしてゐた。

生憎、區長は差支のため行けないといふので、そこの有志須藤氏が案内されることになつた。

一行は同區の産神である八幡神社の華表の前でカメラに收まつた。

一行が豫定地の最高地たる字小屋の澤の頂きに着いた頃、鳥海、笙、稲村などの諸山には頻りに雨雲が飛んでゐた。で内心では少々雨といふことが氣になりながらも地圖など開いて悠々と構えてゐる御大を促し、そこに刈草をしてゐる青年の馬を借りて、稲村嶽をバックに馬上の御大を撮影することにした。その頃は恰度好い鹽梅に稲村嶽に雲がきれてゐた時だつたから。

私が馬丁格といふ所で馬の口を取らうとしたが、馬は、ビク〳〵しながら口をとる私を馬鹿にして時々凄い顏をしては「小男奴うるさい」てな風に首を振る。私は有體に言へば全く氣味が悪かつた、が、「誰か代つて…」などゝ弱音を吐いてはあたら五尺一寸の男が丸潰れになる。でこゝが我慢のしどころだと言はぬばかりに下腹に糞力を入れて寫眞屋に早く撮つて呉れと言ふと、奴さん噴き出しながら「そんなに馬が動いてばかりゐては駄馬ですよ」と言ふ。

餘り癪に障つたから寫眞屋に今直ぐ撮つて呉れと言ひながら草をむしつてゐる馬の口をグイと引き上げると「うるさい！」と言はぬばかりに馬の奴首を振つて私を拂ひのけようとする。

「ヒヤリ」として一歩後に退いた時馬主が苦笑しながら代つて口をとつて呉れた。アーお蔭で助かつた。

そんな騒ぎの中に紀念すべき馬上…主盟の勇姿は、稲村ケ嶽を背景にしてカメラへ入つた。

ペンが頁を辿つてしまつて肝腎なことを書かないでゐたが、今日踏査したところも有望な地である。殊に眺望としては吹浦よりも小砂川よりも良いし土地が廣いことも特筆すべきであらう。廣茫たるその候補地と遙かに見ゆる象潟、金浦の水田と、また海岸の松の翠とその根の巖に碎くる白浪とは誠に以て棄て難い趣があるものだ。

たゞ若し水田を開くに方つて、その貯水池を築くに骨が折れるが、須藤氏の亡兄が企てゝ失敗されたといふ字小屋の澤三號地は貯水池として強ち不適當だとは言へない。

そして水源として常に絶々ぬものがあるといふのではないが、雪解水を貯へればかなり廣い田を潤せる見込が充分である。

一九　尊き義人の遺跡

歸る道すがら、私達は一つの水涸れの小川を渡つた。「人工でしたものでせうか、それとも自然に雪解水でかうなつたのでせうか？」と須藤氏に問ふと氏は感概深い面持して實はこれは私の祖曾父が周圍の壓迫と非難との焦點に立つてやつたものです。今でも八月の初旬までは部落の田に水を運

んでゐるのです。大低八月初旬になりますと上の山に雪が失くなるので從つて此の川も涸れてしまふのです」といふ。

この大事業には勿論幾多の哀話悲話が隠れてゐるのでせうから是非お話下さい……」と私もいつかしんみりした氣分になつて言ふと「勿論そんなものは澤山ありますが、お話したとて……」と謙遜して「その話は止しませう、それはそうと、私の兄が計畫した貯水池もさつきお話したやうに、惜いかな一番底になる部分に大きな穴があつて駄目になつたのですが、その部分さへ少し手入をしたら大丈夫その目的を達しられますよ」と言つてうまく話頭を轉ずる。

私は大砂川區の部落に着いてから、須藤氏の曾祖父が中心となつてされたといふ所所深山堰に就て、幸ひ路傍に子守して休んでゐる一老人に問ふた。それこそ血の話であり涙の物語として廣く世に知らすべきものであつた。

私はこの隠れたる偉人を紹介すべく別に筆を起すことにする。

須藤氏の先代の物語りをして呉れた老人はなか〳〵氣慨のある痛快な人だつた。そして言葉もハキハキとしてゐて、所々方言のため判らないものもほゞ意味が通じた。

私がこの旅行中に會つた老人の中で最も感じのよい人である。

彼は義人庄左工門氏の事績を物語つた末に、彼方の大きな建物を指しながら「如何です？世は様々とはよく言つたものではありませんか、今お話した須藤さんのやうに社會的事業に熱中した偉人を生んだ隣の區の川袋區には、アンナ堂々たる建物を建て、喜んでゐるものがありますからな―。この邊ではアレを川袋御殿と呼んでゐますが、何しろ二十萬圓もかゝつたといふのですから驚き入つてしまひますよ。私どもの若い頃までは百姓なんて蟲ケラ同然にしか見られてゐなかつたので百姓は不幸がつたと言ひますが、ありがたい天子様の世にも百姓を嬲り殺しにするやうなことが行はれてゐるのですから百姓は全くやりきれませんよ」と言ふ。

二〇　愚昧な村長を憐む

そんな話まで聞いてながいこと暇どつたのでモウ一行の影も見ゑない。私は一人で歩かなければならないかと思ふと聊か急に疲勞が出て來た。が幸ひ其の老人が道づれになつて呉れた。

道すがら老人は「あなた方のお計畫は非常によい事だと思ひますが、失禮ながらこの村の當局にそんな深い考がありますかしらん？ツイ二三日前に村長さんが或人に話されたことによると、村當局者は明星自治團の理想鄉建設は我が村の秩序と平和を破るとか言つたといふことです。なアに其

の理由といふのは、下男や下女が傭へなくなるし、ヤツト見つけたとしても高い給金を出さなければならないし、第一小作人がなくなりはしないかと思つてゐるらしいのですよ。自分さえよければ人はどうでもよいのですからなあ？……」と話しなどした。

だが上濱の村長さんはそんなケチ臭い量見ぢやあるまいし、村治に携つてゐる人々はそんな判らず屋はゐないだらう。

私がこんなことを考へながら歩いてゐる後から老人は「この村の議員さんのうちで自分が苗木を仕立てるので盛んにあなた方の事業を商賣敵にしてゐる人が現にありますからなあ……目あき千人目くら千人とはヨク言つたものですよ」といつて苦笑した。

なる程世の中は様々なものだな。

酒田新聞は吾徒の計畫を賛美し大々的聲援を惜まざるまでに左の報道をした。

△酒田新聞大正十二年八月十六日

鳥海山麓に新しい村

石田氏來郡

農村問題の研究家として著聞する石田傳吉氏は其理想の實現化の第一歩として本郡吹浦驛を去る約一里の鳥海山腹の荒地約三百町歩を利用し爰に理想村を建設せんとし其實測をなし尚ほ一行は昨日東京より當地に至り精細の調査に入るが石田氏は曰「本荒蕪地は吹浦村有地にして現に灌木多く不毛視されてゐる然るに全國にても海岸を距る僅かに且汽車驛を去る一里位に有望の荒地あるは珍とするに足る是が開墾有利有望なりと着眼したのである何れ吹浦村にても私の意見を聽き前途に嘱望してゐるから村會の決議にて今秋より開墾に着手したいと思つてゐる其三百町歩地の開墾には約一ケ年位の年月を要する豫定である田畑と化し村有土地であるから永く小作とするが良策かも知れない是に其住民が團體工業をして生計の途を確立するのも一方法であると考へてゐる是によりて模範理想村を建設する考へである尚此地に隣接する秋田縣上濱村の五百町歩を開墾して兩者に歩道を設けたいとの考へにて此方面と着々諒解を得てゐる吹浦の方は酒田より物質の供給を受ねばなるまい何れにせよ自分で理想たる模範村を本郡の不毛視されたる鳥海山腹に着手せんとするのは單に吹

浦のためにあらぬ現下農村人に綏和の一助ともなり又農村問題解決の良策であると信ぜらる同氏は昨日吹浦の現場に出發された

四　吾が徒の遊説＝宣傳の旅び（第一日）

一　戀愛葬と社會葬

「石田先生のお話だ」「明星自治團一行の講演會だ」といふ言葉は、強い響を以て村人の甲から乙へ乙から丙へと傳はつた。

「何處も同じことだが、殊に田舍の通弊として時間がよく守られない。この村でも御多分に洩れないだらうとけれども豫定の時間までには是非行かなければ……」といふので會場たる小砂川小學校（秋田縣由利郡上濱村）に行つてみると未だ開會十分前だのにモウ相當に多くの顏が集まつてゐた。

それ位だから開會の八時にはモウ滿員の有樣だ。老人もゐる。子供もゐる。が、聽衆の多くは青年達だ。彼等は炎天の下で一日の勞作をした疲れの色もなく輝かしい顏をしてゐる。一體この講演會は小砂川區の主催なのであるが、村中から集まつて來たのでかれこれ二百人位はゐるだらう。「こんなに集まるのは恐らくこの村での開闢以來のことでせうよ」と同校の伊藤校長は言つた。

十分間と言つても待つ身になれば永いものだ。さつきから手を拍つたり鋭い口笛をならしたりして頻りに開會を迫つてゐた聽衆だから、伊藤校長の開會の辭が後ろの方にゐる聽衆達には聞えぬ位に永いこと拍手してゐる。何のことはない伊藤校長の開會の辭が聽衆の拍手裡に始終したものだ。

「必ずしなくてはならない養蠶」と演題を掲げた主、農業部の井出主事が壇上に現はれた頃は聽衆は靜かにその所論を聞てくべく耳をすました。

――働いても働いても儲からない食へなくなるといふ現代の農業者、イヤ働けば働く程損をするといつた方が良い程の奇現象を呈してゐる農民が、その窮地から脱して生活の安定を圖るに最も適確の効を而も短日月のうちに現はすものは養蠶を措いて他にはない――といふことを種々の引例をして說いて來た時聽衆の一人が叫んだ「氣候風土が適しないです！」と。

「何故です？」「論より證據この地方で養蠶をした者は悉く失敗をしてゐます」「それは飼育法や蠶種の選擇が惡いからですよ！」「そんなことは一概には言へますまい。兎に角私の數ケ年の苦い經

驗からしても他の人のを見ても養蠶をして利益を得るなどゝはこの土地の氣候や風土を知らない人の言葉です。養蠶は農家に奬勵して戴くべきものではありません」とその青年はキツパリ言ひ切つた。

――長野縣と秋田縣……而もこの村と私の村とは氣候風土が酷似してゐることを數字が證明してゐる。良桑の栽培と優良蠶種の選擇と飼育法に意を用ふれば養蠶は外れることはない。また繭の販賣に就て、共同敗賣、共同乾繭などをし、稚蠶期に於て稚蠶共同飼育をなすなど、共同の力を以てすることによつて養蠶は農家の副業として最も有要なものとなる――と結んで井出氏は降壇。

「演題未定」としてゐた編輯局の文宮主事が登壇して「八時から十時までの二時間に四人の者が充分にその所論を盡し得べき筈がありません。殊に諸君は石田先生のお話を少くも一時間半は聞きたいでせう。何？モツト永く聞きたいなんてそんな慾の深いことを言ふものではありません。兎に角私達同人としても石田先生に少くも百分間のお話を願ひたいと思つてゐるので、實は仰々しく演題を掲げて結局ゴム風船の破れた時のやうなつまらなさを諸君に感じさせるより、ドウセ十分間やそこらの時間だから實はお近づきのために一寸御挨拶だけしやうと思つたので演題未定としておいたのです」と愛嬌をふりまいて聽衆を喜ばせて「しかしそんなつまらない顏をみせに態々演壇に立つものがあるかと言はれて折角色男氣取でゐる熱が冷めては聊か私自身に對して可哀さうですから本ンの一言二言お話しませう」

「……近來、讀みもの其他を通して地方の青年達が驚くべき程自覺したといふ。しかしさういふ結論を產んだ代物である讀物類はドンナ物でせう。それは讀む人々を骨拔きにする所謂修養書、賣らんがために頻りに誇大な廣告をする出版屋の所謂文豪・天才などのものした低級卑俗な小說、鼠小僧や猿飛佐助などの講談本などではありませんか。何處に自覺があります？マサカ諸君はそんな類ではないでせうが、ドウ間違つたかソコにある青年團の文庫には講談本が恰も古本屋の店先きみたいですね。讀み物の選擇について今少し諸君は諸君自身のために愼重な考へをして欲しいものです」とやつて町村是調査部の時國主事と代る。

時國主事は「近頃感じたこと」といふ演題を掲げてゐた。

――有島武郎氏の死と高尾平兵衞氏の死は個人的の問題として見るには餘りに大き過ぎる。有島氏の死は個人主義の破綻を意味するものであり、高尾氏のは或る意味に於ける社會的死である。有島氏の戀愛葬に高尾氏の社會葬は、或る何ものかを吾人に暗示するものである。私は有島氏がその愛を社會的に活かさなかつたことを遺憾に思ふ一人である。凡ての人が生きて行くにはヨリ自己を

充實せしむると同時に自己を社會に活かさなければならない――といふことを極めて卑近な引例を用ひて述べた氏は、時間の切迫のために言ひ盡せない殘念さを告げて降壇。

サテ愈々石田先生のお話がはじまるのだといふので、場内は急に一層の緊張味を呈して來た。主幹の演題は「必ず儲かる農業の仕方」といふのである。

「餓じさと寒さと戀とくらぶれば、恥かしながら餓じさがさき」といふ古歌を冒頭に、卑近適切なること恰も火を摘んで熱さを知るそれのやうな幾多の引例を用ひて滔々として述べられる。言々句句が悉く熱であり力である。その概ねは次のやうなものだ。

――ヨリ自己の充實を圖ることには勿論物質的と精神的と兩々相俟たねばならない。しかし物質的に然うすることが最も必要である。が、今日の農業者はこの點にかけてはお生憎樣と來てゐる。稼ぐに追つく貧乏なしといふ諺は農村を離れてしまつて、一鍬々々借金を掘り出しつゝある。然らば農業は全然無駄なものか?否、百姓は百勝である。世の中で一番儲かるものは百姓である。たゞその經營法が誤つてゐるために食へなくなりつゝあるのだ。儲かる農業の經營法は如何?それは人々の協同である。加るに能ふ限り無駄を省くことである。そして得た時間を以て最も收益能率の高度な副業を起すことである。殊に積雪期に於て然りである。その副業の最も有望なものは養蠶業と麻裏表の製造等である。前者は勿論夏秋の候に於てし後者は冬季に於てなし、以て勞力の平均を圖るべきである。なほ開墾不可能の土地には材料たる藤を樹えてその皮の移出をするなども忘れてはならない。藤皮の需要は秋田市山形市などにも頗る多い。そしてさきに述べた共同は、協同販賣購買組合と言つた形となつて組合員およびその隣人等を益するものである――と。

眞に迫つた熱辯に聽衆は始終その面を熱誠で緊張させてゐた。閉會したのは十時二十分。

――それは我一行が理想鄕建設予定地を踏査した第二日目すなはち八月十八日の夜のことである。

吾が徒の遊説‖宣傳の旅び（第二日）

一　理想鄕建設者の烽火

「理想鄕建設者大演說會」のビラは象潟町――秋田縣由利郡――の要所々々は言はずもがな、附近町村の目ぼしい所に貼られ、またその小さな宣傳ビラは附近町村の凡ゆる方面に屆けられてゐた。

主催者は同町に於ける知識階級を以て組織さるゝ讀書會である。田舍の小さな町で然うまで行屆

いた手配を見たことは實は一行の一つの驚異である。「ハイカツテゐるんだ」なんて言つちやいけない、それだけ比較的に文化の進んだ町なんだ。讀書會の幹部連中が相當話せる人で揃つてゐたことは一行の非常に力强さを感じたところである。

それは八月二十日のことで、場所は同町小學校の大講堂、開會時間は午后一時である。「ドウしたのか今日は減法界に暑いから人の集りが少いか知れませんね」「殊に昨日まで三日間勿滑谷さんの禪學講演があつた後だからね」などいふ人もあれば「なァにこの位の暑さヤその講演の後だからつて集りますよ。少くとも禪學講演會の四五倍の聽衆はありますよ」などゝ主催者の誰彼は言つてゐた。

が、定刻前にモウ大講堂の中は聽衆で黑山だ。主催者側のホク〳〵顏はあちらこちらにイソ〳〵としていろんな斡旋をしてゐた。

――開會。大講堂に溢るゝ聽衆を快げに眺めながら同校の中島校長が開會の辭を述べて一行を紹介された。

「讀みものを通して觀た社會相の批判」といふのが大官編輯局主事の演題として掲げられてあつたが、壇上で早速それを變更した。「今、所謂露拂ひ役を以て目さるゝ私は、與へられた短かな時間内に於ては到底徹底的に述べ盡せないことに觸れるのを好まないから、本團の編輯局にゐる私の立場……雜誌編輯者として、また單行本に手を染むるについての私の考を述べませう。それを「私の立場から」と題します。

――諸君が喜んで手にさるゝ雜誌、書籍がドンナものかは勿論知らない。しかし私の感じは諸君が餘り低級なものに手を觸れてゐないやうである。しかし私の感じが若し少しでもオベツカに諸君に思はれても困るし第一何だかアテにならない感じもするから、諸君は諸君の手にされるものも世間並と認める。諸君の手にする單行本にしろ雜誌にしろ定めし高尙なものであり實際に役立つものと考へてゐられるだらうが、一二の例外を除く外は低級卑俗か有害無益なものだ。諸君がそんな小說や雜誌或は講談本に鼻毛を長くして滿足してゐると言はれるのなら私はこの儘壇を下る。しかし少しでも自己を向上させやうとするのなら、今後はそんなものと絕緣して欲しい。誰のためでもない諸君自身のためだ。何處を探して見たつて「私の社で出す雜誌は俗惡です、有害無益ですが棄てる金があつたら買つて下さい」と廣告する馬鹿がない。殊に出版業者に於てはトテもお話にならない程誇大な廣告をする。ソレにウカと手を出してはならない。そんなことをしつけるとツイ人の妻君に手を出したり人の夫をひつぱつたりするやうになるーと、二三の例をひいて聽衆を笑はせる。

彼はさらに、現今かなりの勢を以て××的方面の手段として地方の青年が殆んど義務的に讀むべく餘儀無くされてゐる修養などの美名の下に出されつゝある某雜誌が、地方の青年男女を骨拔きにしつゝあることを實證し、ついで、雜誌などの使命とする所は、一歩々々と諸君を向上せしむべき筈だのに、今日の傾向は讀者に阿諛追從して賣らんが爲めにのみ應じつゝある。忌はしいことだ。この惡傾向を一掃して少しでも社會の益になる刊行物を見るの日は、たゞ諸君自身が下らないものを讀まないに限る。でないとその望みは百年河清を待つと同じだと述べ「私は編輯するに方つて如上の缺點や難點を一掃して以て同業界に於ける一新機軸を劃する確信であります。私の所論に對して若し商賣敵だなんてケチ臭いことをいふやうな人は一生下らないものと鼻毛を長くしておいでなさい」とやつて井出君と代る。

井出農業部主事の演題は「農業の經濟と養蠶業」といふのだ。盛んに養蠶の奬勵をやる「農民の金が措しけりや大いに養蠶をやるに限る」といふのだ。「なる程蠶を飼はねばならないと感動した顔があちらこちらにも見られた。一時間あまりで降壇。

石田主盟が悠々と長驅を壇上に運ぶと、今までに倍して强烈な拍手だ。主盟の演題は「理想鄕建設に就て」といふのである。

「諸君、東西の兩英雄と言はるゝ豐太閤とナポレオンとはドウ言つた？　世の中で一番必要なものは金だと言つたではないか！」と大きく出て「人間萬事金の世の中とはよく言つてある。私もウンと金を儲けたら有權者を買收して代議士にもなれる。手つとり早く輕井澤の別莊へと好いた女の手をとつて出かけるのだが、プロレタリアの悲しさ私には心中する別莊がないのでコウしてゐるやうな譯」はよく聽衆を笑はせる。

――しかし金を儲けるには決して縊死を圖る者の足を引張るやうなことをすべきではない。他人の生活を脅かし或は侵害して金を儲けるのは知慧のない事だ。自他共に喜ぶ金の儲け方をしなければ駄目である――と述べてお手のものゝ眞樂主義の說明に移る。

その前に精神萬能主義、物質萬能主義、國家主義から社會個人主義等の梗概を述べて、然うした凡ゆるものゝ長所をコンデンスしたものが私の謂ふ眞樂主義だと止めを刺した後で

「私共の理想鄕建設は要するに世の中の凡ての人が喜び樂む眞樂諧和の社會を全國の何れの地にも實現しやうとする烽火であります。それで或る主義思想を同じうする人によつて生れてゐる普通の所謂新しい村とは聊か趣を異にしてゐます。現今の町村にも部落にも直ちに應用して立派な効果を擧げ得られます。天皇陛下のため國家のため、私は一日も早く眞樂主義の實現を熱望して斯く同志

と共に建設の候補地を求めてゐるのです。我が理想郷は世の不自然さを一掃したものです。資本家も喜び勞働者も喜ぶものです。そこに所謂眞善美の社會が創造されるのです」と聽衆を醉はせる。

石田主盟の講演は二時間半に亘つてゐた。その間殆んど息もつがないまでに滔々として說かれる所は天晴だ。而もその長講演の一言半句と雖も悉く熱であり力であるのだから驚き入る。

「象潟の未曾有の大收穫です！」と熱誠を面に溢らして幹部の一人は語つたが、蓋しその言は追從ではないだらう。また他の一人は「石田先生のお話は恰で修道者の燃ゆるが如き信念の發露ですね」と感嘆した。然うだ。石田主盟は修道者だ。眞樂主義……新報德主義の熱心な傳道者だ。餘り主盟の所論に醉はされたのでペンがツイ走りすぎやうとする。モウこの位で擱筆しやう。

オツト肝腎なことを忘れてゐた。町村是調査部の時國主事は東京のお宅からの急電によつて昨日の上り一番列車で歸京された後だので今日の講演會には遺憾ながら臨まれなかつた。

今日の聽衆は千五百を以て目する人もあつたが、マア內輪に見ても千二三百は下るまい。閉會したのは夕陽が大地の總てのものゝ影をながくひき初めた五時少し過ぎ。

第三日第四日と各地有力者の求めに應じて縣下樞要の地に宣傳旅行を試みたが、何れも非常なる盛會なものであつた。

斯くも好都合の下に、理想郷候補地の視察も終り、併せて宣傳數日の努力は多大の反響も認めたので、更らに之を東京及各地にある同人に報告すべく探檢隊の一行は八月二十六日、京地にある同人の歡迎を受けて勇ましく歸京した。

翌二十七日創立委員會は我が事務所に於て開會された、出席するもの五十餘名。主幹及主任の口より詳細なる報告された。評議の結果、九月一日午後一時を期して創立總會を開催し一切の實行案を決定すべく散會した。

創立總會へ提出して協贊を求むべき企業案—實行細目等を編制すべく各部の主任は殆んど晝夜兼行不眠不休の體でその事務に當り漸く三十一日の午後萬端の準備も整ひ明一日の總會の開會を待つのみであつた。

五　噫！空前の悲慘事—天來の一大動亂起る

一　吾が明星自治團の大活躍

「ゴーツ……」と大地の底に潜む魔の唸るやうな物凄い響に驚きの耳を欹てる間もなく、ガタ〳〵メリ〳〵と器物が倒れる、瓦が落ちる、家が倒れる。

「アレツ！助けて呉れ！」とけたゝましい悲鳴があちらでもこちらでも起る。オロ〳〵しながら母を呼び子をたづねる人の狂い聲が「アレツ！」悲鳴を殘して消える。言ふまでもなくそれは家屋の倒れたゝめに壓死したのだ。

悲鳴をあげながら走り出す小僧に「助けて呉れ！」と抱きつく主人があれば、茶碗と箸とを持つたまゝ飛び出す女中の足にひきづられて表にヤツト這ひ出す妻君もある。

煉瓦造りの宏壯な家屋が譯もなく倒れる。石や煉瓦で築かれた塀などの昨日までは堅牢を誇つてゐたのがひとたまりもなくドツとくづれる。

モウこうなればむさ苦しい異臭紛々としてジメ〳〵した貧民窟も、金に飽かして造られた富豪の大邸宅もあつたものではない。

――時は去る九月一日（大正十二年）の午前十一時五十八分四十六秒に起つた大激震の騒ぎだ。

「火事だ！火事だ！淺草が燃える、神田が燒ける、日本橋だ、京橋だ、砲兵工廠だ」といふ聲が、大砲の響のやうに耳をかすめる。自働車ポンプが物凄い聲をあげながら走る。處々方々で焔々たる黒煙があがる。大激震の後數分を出ずして蒙々たる火焔の巷と化したのだからたまらない。

幸に本團にはさしたる被害もない。

主幹はじめ幹部一同は取るものも取り敢えず團子坂を一氣に馳け下つて上野の山に行つた時は、モウ淺草から本所、深川、日本橋、神田一帶が黒煙に包まれてゐる。その中に魔の舌のやうな紅蓮の焔を處所の大建築物が吐いている。淺草の十二階すら五階（？）の所からくづれてその後にはペロリ〳〵と赤い舌がうごいてゐる。

殆んど狂氣のやうになつて走り狂ふ人々の中をくぐり抜けて淺草橋を渡るとソコラ一面に避難者がウロ〳〵して逃げ場に困つてゐる。「上野へ！上野へ！」と彼等に告ぐると同時にウロ〳〵してゐる救護人達……巡査、在鄕軍人、青年團員などを促しながら我が明星自治團の救護班は右へ〳〵と進んだ。日本橋、京橋方面に出るつもりなのだが火の手で遮られてゐるので果せない。

萬世橋に出るとガード下に「こゝは良い避難場所だ」とばかり僅かばかり持ち出した荷物を下して休んだり荷車によりかゝつて地震の恐ろしさなどを語り合つてゐる者がある。勿論多くの人は叫び狂ひつゝドシ〳〵その地帶に避難しつゝあるのだ。恰も責木にかけられるやうな苦しい思をしながら……。

「上野へ！上野へ！こゝは直きに燒けるから上野へ避難し給へ、安全地帶は上野だ」と絶叫しつゝ我々は神田驛、須田町、駿河臺下を幾回となく叫び廻つた。今まさに猛火に嘗められんとする同胞を救ふべく懸命の努力をしたのだ。而も火は恰で枯野の原を燒くやうな勢で廻つて來る。折から勢の募つて來た風に煽られた火の子が襲つて來る。

上野へと避難者が走りはじめた時はモウ順天堂病院も烏有に歸してゐる程だから、萬世橋附近にゐたものは腹背共に火を受けてゐるのだ。狂ひ叫びつゝ今はたゞ一つ殘された生存への道たる上野へと彼等は走つて行く。

いつの間にか日は暮れて何處を見ても猛火の舞踏だ。その中を上野へ！上野へ！と彼等の狂ひ走る場面の物凄さよ！

我々が團に歸つたのは九時過ぎだ。少くも一時頃から五時頃まで極力避難者のために安全地帶を知らすべく叫び續けたのである。

我々は今日位人生の悲壯な場面を見たことがないと同時に、今日位警察の慌て方を見たことがない。勿論こうした大事件が起らうなどとは誰しも豫知してゐなかつたに違ひないが、一般巡査等の態度は何だ！避難者に然るべき安全地帶を選んで避難させるなどは夢にも見ないやうな顏をしてゐる。

それは勿論主腦者……少くも幹部の手ぬかりであらうが、非常徴收令だけを神妙（？）に守つて煙草などを徴發しチト職分を穿き違へてゐるのには聊か呆れざるを得ない。

――と言へば、自己を忘れてひたすら民衆の保護救濟に努力しつゝあつた警官諸君に對しては氣の毒なやうだが、こうした事を述べるのは決して彼等の努力を無にするものではない。否、却つてそれを割增にするものだ。

我々は警察といふ一つの鎖が個々に分裂して充分の能率をあげ、……職責を盡せ得なかつたことを遺憾とする。（九月一日）

二　流言蜚語＝自警團の○行

「今夜の十二時と四時とに大地震がありますよう！」と叫んで走る者がある。「○○人が放火しますよう！」「○○人が井戸に毒藥を入れますよう！」などゝ大聲でドナリ立てゝ通る者がある。

「內務省が燒けた、警視廳が燃える、神樂坂に火が移つた、本所深川は全滅だ」などの噂は次から次へと矢のやうに飛んで來る。

「〇〇人は見つけ次第捕縛しても殺しても良いから護身用の武器をもつて夜警をするやうに警察から言つて來ましたから――」といふのは在郷軍人だ。町會、青年團、少年團（？）などの共同して自衛をすることに大抵のところで決しられたのはその夜の三時ごろである。

「〇〇人はピストルや匕口をもつてゐるからドンナ目に合はされるか知れない」といふ騒で、それらの人が日本刀を持ち鐵棒や木刀などを手に〳〵提げて通路の到る所に俄かの關所をつくつたのは夜明け頃だ。

――時々地震はするし焔々たる猛火は凱歌を奏しつゝ次から次へと凡ゆる建物をその眞赤な舌でなめる。いろ〳〵な風説が櫛の齒をかくやうにしつきりなしに傳はつて來る。青年團、在郷軍人團、少年團、町會など言つた連中の然うした物々しい裝立に誰もが生きた心地もなく夜を明したものだ。

モウ大抵の人がそれ〴〵避難してゐる筈だ。「我々が今日執るべきことは特に暴利商人の膺懲だ」といふので我等同人は先づ最大多數の避難者の屯する上野公園附近に行くことにした。

大抵の店が「品物一切賣切れ申候」「賣るものは一つもない」など〻貼紙して戸をたて〻ゐる。「白米一升一圓……二圓……三圓、玄米一升五十錢……一圓……三圓……四圓と暴利放題にボッをも食はないではゐられないといふので我先にと喧嘩腰で買つて行く。

それかと見れば一方では敷島一個五十錢といふには實にお話にならない商人輩の魂情だ。で、片ツ端から懲しめる。

それまで放任する警察にも聊か考へさせられる。が、それは全然その手ぬかりではなくて全く手がそれまで廻り兼ねたのかも知れない、何れにしてもモウ大抵の賣物はドンナニ暴利を貪つても奪ひ合うやうにして避難者達がその餓えた腹に入れた後の祭りである。

上野公園の附近からがモウ足の踏場もないほどの混亂で、眼界の總てが生氣を失つた人々の蠢きだ。塵埃にまみれて溝の中に斃れてゐる勞働者風のものもある。ノートの八九冊を抱いたまゝ路傍に倒れてゐる學生もある。それが痛ましい氣分をヨリ寒らせる。

何のことはないそこに避難してゐる總ての人が魂を拔かれてたゞ纔に生きんとする本能のために餘喘を保つてゐるに過ぎない悲慘さだ。いろ〳〵な方法から彼等のために殆んど全力を傾注しつゝあつた焚出の恩惠――例へそれは玄米飯のムスビ一つではあつても――に浴した者は遺憾ながらその幾部分の範圍だつたといふ程避難者は餘りにも多かつたのだ。